



Dialog with the Public

京都大学アカデミックデイ 2014

みんなで対話する京都大学の日

報告書

2014 年 9 月 28 日（日）10:00 – 16:00

京都大学百周年時計台記念館

開催日時 2014年9月28日(日) 10時00分から16時00分

会場 京都大学百周年時計台記念館

目次	1. 概要	
	1-1. イベント概要	3
	1-2. 松本総長からのメッセージ	4
	1-3. 会場配置図	5
	2. プログラム	
	2-1. 研究者と立ち話(ポスター／展示)	9
	2-2. ちゃぶ台囲んで膝詰め対話(サイエンスカフェ)	17
	2-3. お茶を片手に座談会(トークライブ)	21
	2-4. 研究者の本棚(特別図書室)	46
	2-5. 対話マラソンのための給水ポイント(カフェコーナー)	54
	3. アンケート	
	3-1. 来場者アンケート	55
	3-2. 出展者アンケート	68
	3-3. 京都大学アカデミックデイ賞	78
	4. 出展者情報	
	4-1. 研究者と立ち話(ポスター／展示)	81
	4-2. ちゃぶ台囲んで膝詰め対話(サイエンスカフェ)	93
	4-3. 出展参加者一覧	95
	5. その他	
	5-1. 出展研究者向け事前説明会	99
	5-2. イベント終了後の学内限定タイム(出展者交流)	100
	5-3. 広報物	101
	5-4. 報道・開催報告等	104
	6. 支援体制・準備スケジュール	
	6-1. 支援体制	105
	6-2. スタッフリスト	106
	6-3. 準備スケジュール	107
	6-4. デザイン・制作物スケジュール	108
	7. (資料) 推薦図書リスト	109

1. 概要

1-1. イベント概要

京都大学は、2014 年 9 月 28 日に京都大学百周年時計台記念館にて「京都大学アカデミックデイ 2014 みんなで対話する京都大学の日」を開催しました。「京都大学アカデミックデイ」は、市民や研究者、文系、理系を問わず、誰もが学問の楽しさ・魅力に気付くことができる「対話」の場となることを目指しています。本学の研究者が来場者と直接対話することで、本学の研究活動をわかりやすく説明すると共に、国民の声を本学における研究活動に反映させることを目的の一つとしています。今年度は 50 組の研究プロジェクト、185 名の研究者（大学院生含む）が参加するとともに、近隣の高校からも 4 組の出展が行われました。当日は晴天に恵まれ、1 日で延べ 487 人の来場者が訪れました。

「京都大学アカデミックデイ」では、「対話」のスタイルに合わせて 4 つのプログラムを用意しました。研究者とじっくり対話をする「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話（サイエンスカフェ）」や、様々な分野の研究者に触れることのできる「研究者と立ち話（ポスター／展示）」、一つのテーマに沿って皆で話し合う「お茶を片手に座談会（トークライブ）」、そして、参加研究者がお勧めする本を紹介する「研究者の本棚（特設図書室）」です。それぞれのスタイルで、研究者と来場者が対話を楽しんでいました。また、「対話マラソンのための給水ポイント」では、対話のお供として、コーヒーやお茶を用意しました。

「京都大学アカデミックデイ」は、京都大学による「国民との科学・技術対話」事業の一環として実施しました。広報コンテンツや会場サイン等は京都大学学術情報メディアセンター コンテンツ作成支援サービスによって制作しました。ここでは、対話を促進させる仕掛け作りにも積極的に取り組みました。企画のデザインや運営は学術研究支援室（URA 室）及び研究国際部研究推進課、「国民との科学・技術対話」ワーキンググループが共同で行い、来場者の方へのアンケート調査も実施しました。どのような来場者が訪れたのかを把握するとともに、各出展ブースに対するコメントを受け、それを各研究者にフィードバックをすることで、今後の対話活動をよりよいものにすることを目指しています。



会場（百周年時計台記念館）

1-2. 松本総長からのメッセージ

京都大学アカデミックデイにご来場のみなさまへ

京都大学は創立以来、自由の学風のもと闊達な対話を重視し、高等教育と先端的学術研究を推進してまいりました。激動の変革期といえる今、京都大学は多元的な課題の解決に果敢に挑戦し、地球社会の調和ある共存に以前にも増して貢献することが必要だと強く自覚しております。

そのためには、学術研究の成果を市民に還元するとともに、市民の理解と支持を得て、共に学術研究を推進していく姿勢が不可欠だと考えています。研究者が社会と真摯に向き合い、次世代の人材を養成する活動はもちろん、倫理的・法的・社会的課題と向き合うための社会との対話が必要です。

京都大学アカデミックデイは、みなさまと京都大学の研究者とが直接対話をする場として企画をしたものです。学術研究の成果だけでなく、研究が営まれているさまや、同じ1人の人間としての研究者を知っていただく機会になればと思っています。そしてこの機会に是非、研究者に疑問をなげかけて下さい。みなさまとの対話は、研究者にとって自らの研究の社会の中の位置づけや課題を捉え直す機会となります。そして、成果還元の可能性や新たな活躍の場が広がって行きます。

この対話の場である京都大学アカデミックデイが、みなさまと共に我が国の学術研究を育む場になることを期待しています。

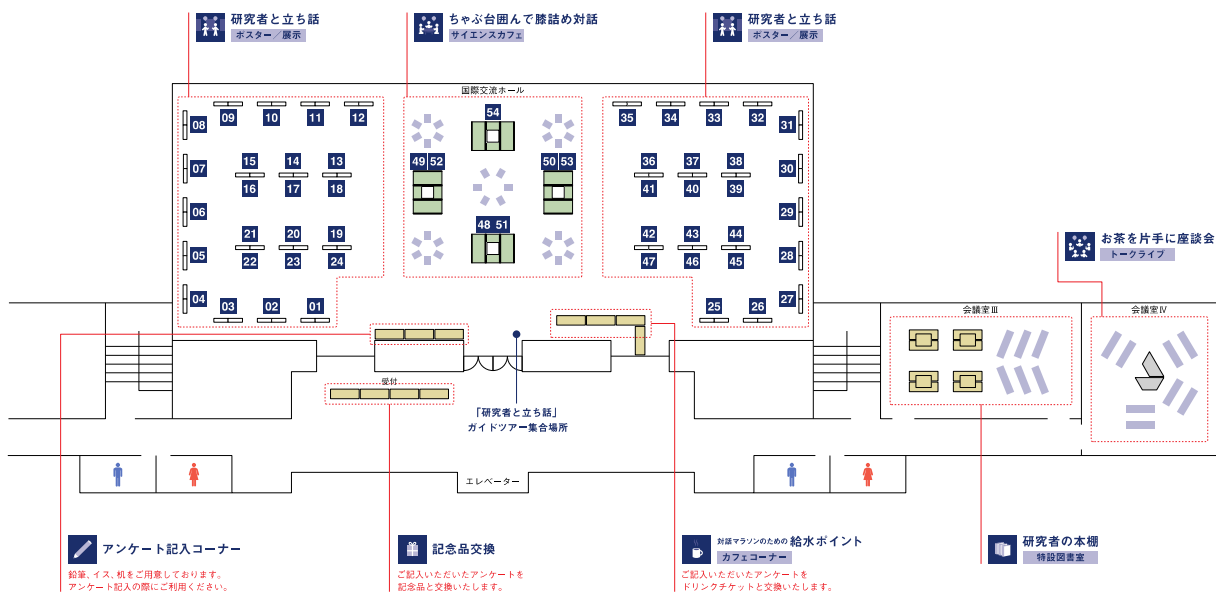


京都大学総長 松本紘

1-3. 会場配置図

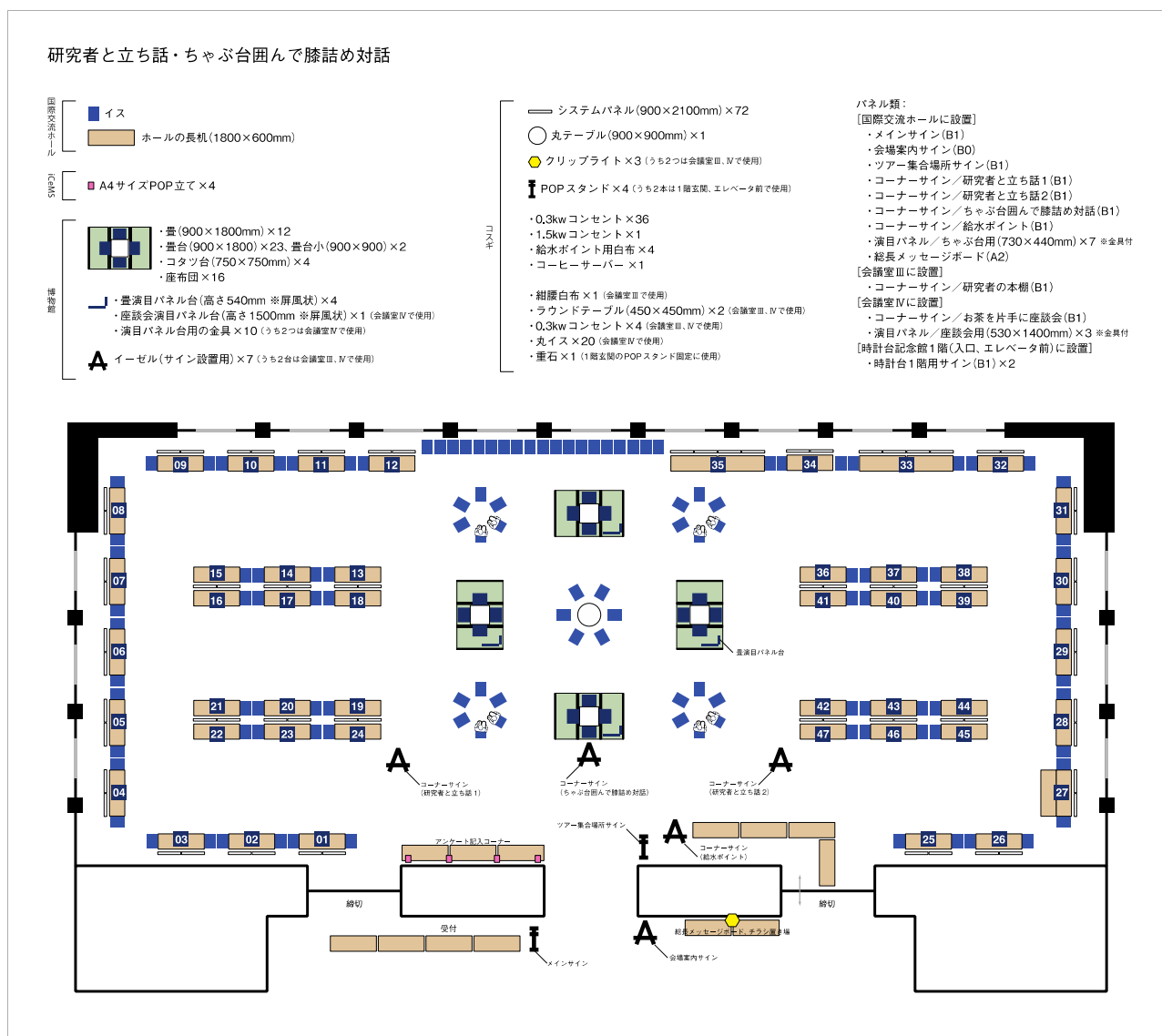
■ 1-3-1. 「京都大学アカデミックデイ」配置図

会場案内(百周年時計台記念館 2階)



■ 1-3-2. 各コーナーレイアウト

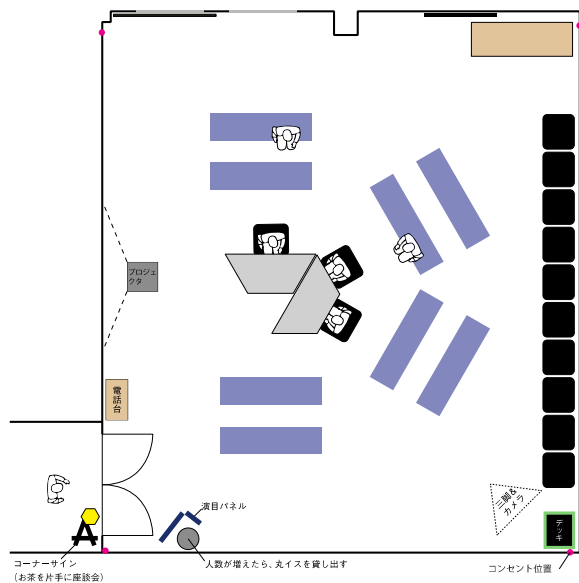
● 国際交流ホール：研究者と立ち話（ポスター／展示）・ちゃぶ台囲んで膝詰め対話（サイエンスカフェ）



● 会議室Ⅳ：お茶を片手に座談会（トークライブ）

お茶を片手に座談会「宇宙を見てゴカイを食べる？～人類学×生物学×天文学～」

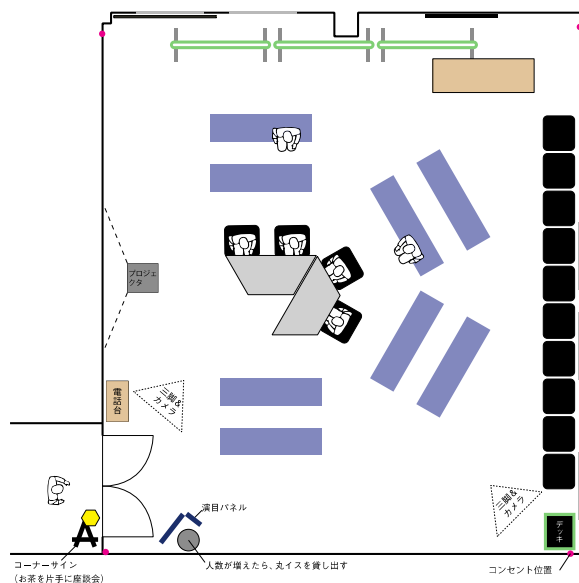
- 設備**
- A イーゼル(サイン設置用)×1
 - 座談会演目パネル台(700×1500mm / 350×1500mm ※屏風状)×1
 - 演目パネル台用の金具×2
- スペース**
- 台形テーブル×2
 - 長椅子(1800×480×高400mm)×8
- カメラ**
- 三脚&カメラ×1
 - プロジェクター(テーブル付き)×1
- 照明**
- 丸イス×20
 - クリップライト×1
 - 0.3kw コンセント×2
- 家具・備品**
- 長机(1800×600mm)
 - イス
 - デッキ類のラック
 - マイク×6 → このうち3つは会議室Ⅲのマイクを使用
 - ホワイトボード(よこ長) → 座談会2と3で使用
 - プロジェクター(ラック付き) → 使わない、国際交流ホール備品倉庫へ移動
 - スクリーン → 使わない、国際交流ホール備品倉庫へ移動



1m

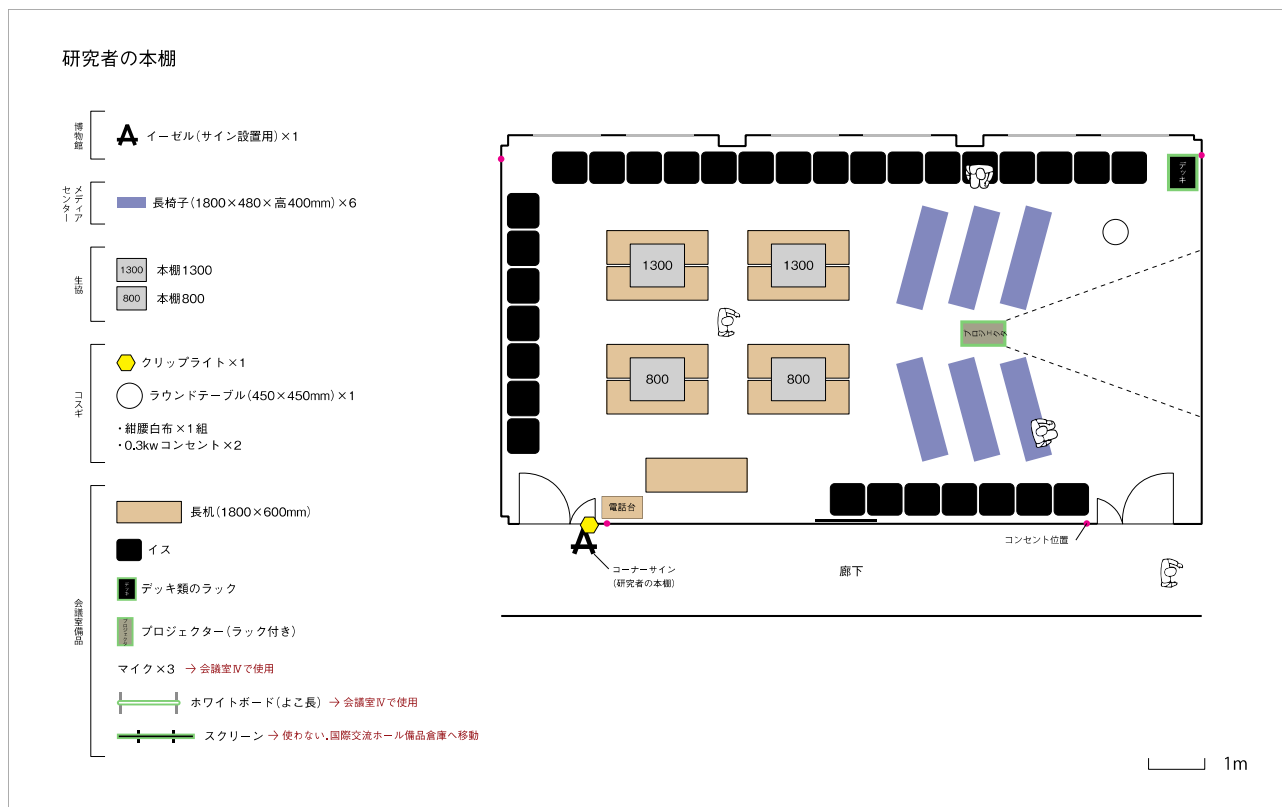
お茶を片手に座談会「震災映像の想像力と市井の人々～京大所蔵関東大震災記録フィルムをめぐって～」
「コトバのデータベースが社会を変える？：コーバスの意義と可能性を探る」

- 設備**
- A イーゼル(サイン設置用)×1
 - 座談会演目パネル台(700×1500mm / 350×1500mm ※屏風状)×1
 - 演目パネル台用の金具×2
- スペース**
- 台形テーブル×2
 - 長椅子(1800×480×高400mm)×8
- カメラ**
- 三脚&カメラ×2
 - プロジェクター(テーブル付き)×1
- 照明**
- 丸イス×20
 - クリップライト×1
 - 0.3kw コンセント×2
- 家具・備品**
- 長机(1800×600mm)
 - イス
 - デッキ類のラック
 - マイク×6 → このうち3つは会議室Ⅲのマイクを使用
 - ホワイトボード(よこ長)×6 座談会2 → 会議室Ⅱ、Ⅲ、Ⅳのホワイトボード(3台)を使用、終了後は一旦会議室Ⅱへ移動
座談会3 → 会議室Ⅰ、国際交流ホール備品倉庫のホワイトボード(3台)を使用、終了後は一旦会議室Ⅱへ移動
 - プロジェクター(ラック付き) → 使わない、国際交流ホール備品倉庫へ移動
 - スクリーン → 使わない、国際交流ホール備品倉庫へ移動



1m

● 会議室Ⅲ：研究者の本棚（特別図書室）



2. プログラム

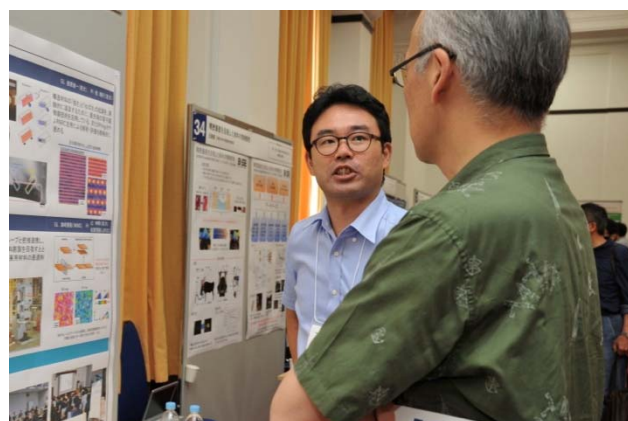
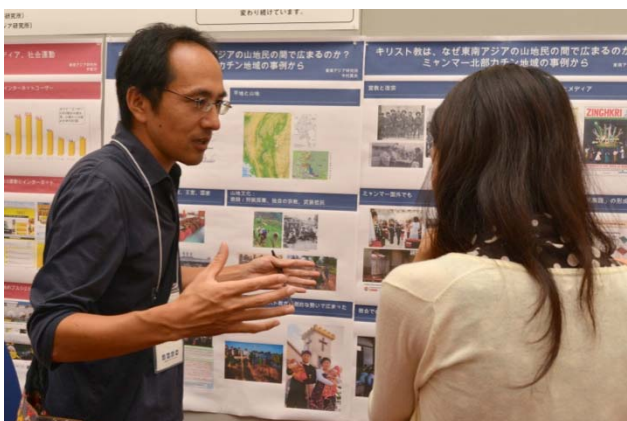
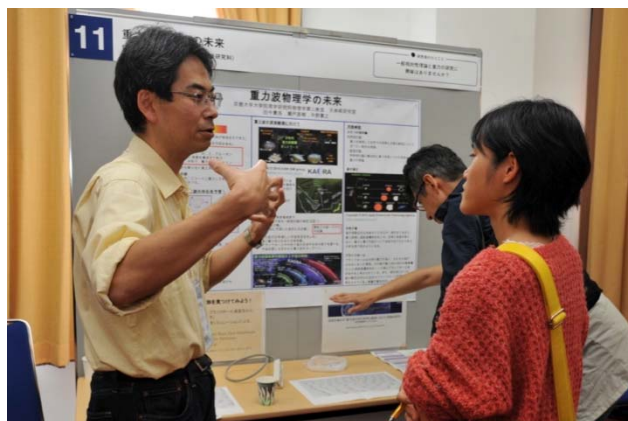
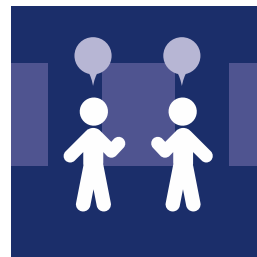
2-1. 研究者と立ち話（ポスター／展示）

■ 2-1-1. 概要

日時 9月28日（日曜日）10時00分～16時00分

会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 国際交流ホール

大学研究者、高校生などによる研究紹介のコーナー。会場には47のポスター展示がずらりと並び、ポスターの前ではその研究を行っている研究者が来場者と直接語り合いました。また、ポスターの前に模型やサンプル、資料等を並べ、それらを使って研究の紹介をする研究者の姿も多く見られました。さまざまな立場で研究をしている人が一同に集っていたため、研究者同士の交流も深まり、互いに刺激をシェア場になっていました。



〈来場者の声〉

- みんな興味を持ったことをつき進めているのだとわかった(中学生)
- 色んなことがダイレクトに伝えられて、学校じゃ教えてもらえないことが分かった(高校生)
- みなさんが積極的に話しかけてくださったので、安心して質問もたくさんすることができました(大学生：京大外)
- いろいろな話が聞けて、自分が専攻している以外のところにも踏みこめたので良かった(大学生：京大外)
- 普段はなかなか直接お話しする事の出来ない研究者の方と直に色々な事を話せたのが良かったです(京大生)
- 文系で、法学部です。文系の学生からすれば、理系の技術(科学技術など)に興味をもっても、実際に研究者の方々と近くで話す機会はないので、よかったと思います(京大生)
- 先生方が楽しそうに魅力を語ってくださったので、その研究を楽しそうだと感じたことができた(京大生)
- 実際の研究がどのようなものか少し感じられた。自分の知らない事を知ることができてとても興味深かった(20代)
- 普段触れることのできない世界を深めることができました。身近なところにある驚きや科学の世界を楽しめて良かったです(30代)
- オープンな所、フレンドリーな所、刺激を受けました。あとユーモラスな所(30代)
- 日頃知ることの出来ない研究チームの存在が判り京大の一部を知りました(40代)
- 選ぶことをためらうくらい研究者の熱い気持ちが伝わってきました(40代)
- どの研究が私の生活のどんなことにつながるのか、少し見えた(50代)。
- 新しい取り組みにチャレンジする精神と情熱の京大最先端研究と未来の展望が予測できた。こんなに頑張ってくれているのだからとても楽しい取り組みでした。本当にありがとうございました(60代)
- 発表者と対面で自由討論が出来た(60代)
- 経験を積み、且つ良く勉強しておられることが分かりました(70代)
- 内容がとても崇高ですごく勉強になりました。皆さんの説明がとてもわかりやすかった(不明)

■ 2-1-2. 「研究者と立ち話」ガイドツアー

「研究者と立ち話」では、学生サポーターによるガイドツアーを企画しました。一昨年までの京都大学アカデミックデイのアンケートに「なんとなく話しかけづらい」「数が多すぎてどの話を聞けばいいのか迷ってしまう」と言った来場者からの声がありました。そこで、昨年より、京都大学の学生がツアーガイド役となり、来場者と一緒に「研究者と立ち話」を回る企画を用意しました。

協力：有限会社関西教育考学



〈来場者の声〉

- ツアーの人が導いたり質問してくれたりしてとても安心できた（高校生）
- 学生さんのツアー、助かりました（30代）

● 〈出展者の声〉

- 大変によくオーガナイズされており、風船を持った方が、グループをまとめて展示を回られる方法はとてもよいと思いました（特任教授）

■ 2-1-3. 「研究者と立ち話」出展一覧

● 京都大学

出展代表者氏名（所属）	出展タイトル
後藤幸織（京都大学霊長類研究所 准教授）	「食と生薬による健康」
小金丸聡子（京都大学大学院医学研究科 研究員）	「脳刺激で、運動・認知機能を取り戻す」
加納靖之（京都大学防災研究所地震予知研究センター 助教）	「過去の地震にまなぶ」
金光義彦（京都大学化学研究所 教授）	「未来の太陽電池を創る～合言葉はナノ～」
跡見晴幸（京都大学大学院工学研究科 教授）	「100℃でも生育可能な超好熱菌」
齊藤智（京都大学大学院教育学研究科 准教授）	「心の構えを切り替える心の働き」
佐藤文彦（京都大学大学院生命科学研究科 教授）	「植物の薬用成分を効率的につくる」
澄川貴志（京都大学大学院工学研究科 准教授）	「ナノサイズの材料の強さを知ろう！！」
福田宏（京都大学地域研究統合情報センター 助教）	「音楽から地域を語れるか？」
田中貴浩（京都大学大学院理学研究科 教授）	「重力波物理学の未来」
柴田大輔（京都大学大学院農学研究科 特任教授）	「トマトって、なに？」
飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所 助教）	「お腹の中で子供を育てるサカナ」
田曉潔（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 5年一貫制博士課程） 泉直亮（京都大学アフリカ地域研究資料センター 研究員）	「東アフリカ牧畜民：サバンナを生きる」
田中功（京都大学大学院工学研究科 教授）	「材料開発のフロンティア：ナノ構造」
平野滋（京都大学大学院医学研究科 講師）	「耳鼻咽喉科領域における先進的研究」
諸熊奎治（京都大学福井謙一記念研究センター シニアリサーチフェロー）	「コンピュータで化学反応の世界を探る」
宮野公樹（京都大学学際融合教育研究推進センター 准教授）	「今の大学：学問論、大学論、政策哲学」
今堀博（京都大学物質－細胞統合システム拠点 教授）	「太陽エネルギー変換に挑戦」
増田亮（京都大学原子炉実験所 研究員）	「原子核からのぞく世界」
小野輝男（京都大学化学研究所 教授）	「新規スピンドYNAMIXデバイスの研究」
丁愛美（京都大学大学院教育学研究科 修士課程）	「英語で学ぶ大学授業が変える英語学習」
久保田信（京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所 准教授）	「不老不死のウルトラ動物ベニクラゲ」
板東俊和（京都大学大学院理学研究科 准教授）	「DNA オリガミを使ってできること」
工藤洋（京都大学生態学研究センター 教授）	「開花の季節同調：花が一斉に咲くしくみ」
平田知久（京都大学大学院人間・環境学研究科 特別研究員（PD））	「アジア・移動・インターネットカフェ」

中村輝石（京都大学大学院理学研究科 特定研究員）	「ニュートリノ最先端」
大北英生（京都大学大学院工学研究科 准教授）	「プラスチックでつくる太陽電池」
児玉聡（京都大学大学院文学研究科 准教授）	「医療や科学技術の倫理について考える」
辻伸泰（京都大学大学院工学研究科 教授）	「バルクナノメタルの科学」
伊賀司（京都大学東南アジア研究所 機関研究員） 今村真央（京都大学東南アジア研究所 機関研究員）	「東南アジア研究所は何を研究している？」
近藤直（京都大学大学院農学研究科 教授）	「精密畜産を目指した和牛の情報管理」
田中庸裕（京都大学 実験と理論計算科学のインタープレイ による触媒・電池の元素戦略研究拠点 拠点長） 田中功（京都大学 構造材料元素戦略研究拠点 拠点長）	「元素戦略プロジェクト」
竹内繁樹（京都大学大学院工学研究科 教授）	「光子のふしぎと量子情報科学」
小嶋浩嗣（京都大学生存圏研究所 准教授）	「宇宙で電波をとらえる小型センサー」
入江一浩（京都大学大学院農学研究科 教授）	「化学を武器にアルツハイマー病に挑む」
乾晴行（京都大学大学院工学研究科 教授）	「炎を制する一超耐熱構造材料」
延原章平（京都大学大学院情報学研究科 講師）	「水中生物の3次元自由視点映像」
大谷雅之（京都大学大学院情報学研究科 特定研究員）	「世界の言葉を繋ぐ『言語グリッド』」
服部敬弘（京都大学大学院文学研究科 特別研究員）	「『ある』の謎—フランス現象学の挑戦」
山本博之（京都大学地域研究統合情報センター 准教授）	「津波被災者からのメッセージを読み解け」
中道治久（京都大学防災研究所附属火山活動研究センター 准教授）	「火山大国インドネシアの噴火災害に学ぶ」
眞田昌（京都大学大学院医学研究科 助教）	「遺伝子からみた老化とがん」
西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所 特定助教）	「言語多様性 vs. 生物多様性」

● 高等学校・高等専門学校

学校名	出展タイトル
大阪府立長尾高等学校 理科課題研究班	「船橋川の水質に関する研究」
京都府立嵯峨野高等学校 スーパーサイエンスラボ	「淀川水系のヌマチチブは外来種？」
兵庫県立御影高等学校 環境科学部生物班	「六甲山には何種類のキノコがある？」
奈良県立青翔高等学校 理数科	「遺跡の桃から日本の桃のルーツにせまる」

「研究者と立ち話」レポート1

「研究者と立ち話」では京大生による来場者向けのガイドツアーも行いました。ツアーをするにあたって、まず、ツアーにいらっしゃった方の好きなもの、分野などを軽くお聞きして、興味を持っていただきやすいようなポスターを回っていきました。そして最後に必ず、興味がありそうな分野とは関係のない研究をされているところに案内し、そこでも話をするようにしました。いらっしゃった方々は「自分が興味ないと思っていた研究でも、先生方がとてもいきいきと話されていて楽しんで聞けた。」と言っていました。案内した身としても非常に嬉しかったです。特に、ポスター前に実物や模型を用意していたり、映像を見ることができるようになっていたりするブースは親しみやすく、質問も良く出ていたように見えました。

また、ツアー参加者の中には前回の京都大学アカデミックデイにもいらっしゃっていた方がいました。前はなんとなくポスターを眺めて会場を一周しただけだそうです。「ポスターの前には人がたくさんいて一人ではなかなか近寄ることができない」と言っていたのが印象的でした。実際に口で説明をしていただくと、難しい言葉をわかりやすく言い換えてくださったり、ポスターには書かれていないプラスアルファの情報を教えてくださったりするので、ただポスターを見るだけよりもはるかに面白いと思います。そういった機会を積極的に提供できて良かったです。

ツアーをしていて、1、2 個目のブースでは私が研究者の方に質問をしていたのですがツアー参加者の方も3 個目のブースくらいでは積極的に質問をしているということが少なくありませんでした。中には大学院生に質問をしていくうちに話が逸れて、進路相談をし始める高校生もいました。参加者と研究者の距離が近くなっていく様子を見ることができて良かったです。

(金岡歩美)

「研究者と立ち話」レポート2

午前中からお昼頃まで「ポスター前で立ち話」ツアーガイドを担当し、計 4 回のツアーを行いました。1 回目のツアーは「京都カラスマ大学」の授業として行ったものです。参加者のみなさんは既に興味を持って京都カラスマ大学の授業に参加されていることもあり、最初の顔合わせの段階でどの企画に興味があるなどと言っていただき、最初からスムーズに行き先を選んでいくことができました。最初の方は、私も積極的に質問をしていきましたが、だんだん参加者の方々からも質問が出やすくなっていったように思います。特に最初はほとんど質問していなかった方からも最後には質問をしていただいたという意味では、有意義なツアーになったのではないかと感じています。

ポスター発表を担当している研究者の方々も一般の方に紹介することに慣れているようで、「3 分程度で説明してほしい」と話すと、短時間に簡潔で分かりやすく説明してくださいました。京都カラスマ大学のツアーでも見に行ったポスターは 30 分間で 4 ブースと、多くのポスターを巡ることができました。

一方、後半のツアーでは、企業で（私自身の専門分野とも近い）研究・開発をされている（と思われる）方の担当になり、自分の専門分野に近い内容のポスターを回ったため、特に時間制限も設けずに 3 ブース程を回りました。参加者の方も積極的に質問を投げかけられており、このような場合はツアーガイドの役割も、「なんとなく話しかけづらいと思う参加者に対して（聞き手の見本として）ガイドする」というよりも、大学で学び研究する一専門家として各ポスターを案内するという別のニュアンスが含まれたように思いました。

気付いた点としては、文系の参加者の方にとっては、物理学系の分野はやはり難しく感じられるようで、簡単な言葉に言い換えて説明したり、身近なところでどのように使われるのかなどを紹介したりと工夫が必要に感じられました。また、行きたいと思った場所が混んでいる場合に、上手く話に割り込む、あるいは他のポスターへと案内するのは想像以上に難しく、ツアーガイドの技量が問われるところだったと思います。他には、改善点として、ツアーガイドが持つポスターの一覧表に分野別一覧のようなものがあればより案内がしやすくなったようにも思います。

案内を通して私自身も様々なポスターを見ることができ、とても楽しかったです。どの発表も、クイズがあったり、研究に使っている魚が泳ぐ水槽があったりなど、一般の方々が親しみやすいように工夫がされていました。

(草場哲)

「研究者と立ち話」レポート3

ガイドであるのに受け手として聞いている時間が多く、他のガイドスタッフに負担がかかってしまいました。それほど各展示が興味深い内容でした。

陽ざしの強い快晴で、10時から気持ちのいい始まり。午前は各展示に一人程度で、11時過ぎから徐々に増え13-14時前後にピークを迎え、展示と展示の間の移動も難しい程でした。15時を過ぎると落ち着き、出展者が他の展示を見ている様子も見られました。

40-50代の方は積極的に出展者に話しかけ、気になる部分を中心に時間をかけて見ている様子でした。出展者は展示の内容を伝えたい気持ちを抑え、来場者の興味に合わせていたように見えました。60-70代の方は、主に医療などのパネルを見ていましたが、出展者に声をかけず、出展者と他の人との話に耳を傾けていました。30代の方は子連れの方が中心で、「ちゃぶ台」を中心に見ていました。

ガイドツアーとしては、中高生や30代前後の方を案内しました。案内する前に好きな分野などの好みを聞き、ツアーで回る展示を絞り込み、出展者には5分程度で説明をお願いしました。出展者の説明が一方的になってしまうとツアー参加者が緊張することもあり、そうした場合には、ツアー参加者が分からなさそうな部分や区切りの部分で、ガイドが出展者に質問するなどして変化をつけました。ツアー参加者が、ガイドと出展者のやり取りを注視しているのが感じられました。また、ガイドがいなくても大丈夫と思われる場合には、ツアーで回る展示は2か所程度にして、後は各自で回ってもらいました。そうすると、いくつかの展示を比較的長く見ていたようでした。ガイドツアーだとツアー参加者と出展者に距離があったり、参加者が遠慮がちな部分もあったりしたので、ツアー後に参加者が積極的に展示を見ている様子を見て安心しました。

困った点としては、展示の解説が長過ぎること、案内したい展示が混んでいること、展示内容が複雑であることなどです。一つ目の場合は思い切って話を止めるか、解説している先の内容について質問するなどをして対処しましたが、これは各展示の内容を把握した後半にできたことです。解説の時間の長さについては、事前に出展者に周知しておく必要があると感じました。二つ目の場合は、その展示内容を簡単に紹介しておいて、先にイメージを持ってもらい、後で回ってもらうようにしました。三つ目の場合は、ガイド自身が分からない部分もあり、1ブースにかかる時間がかかってしまう要因にもなりました。複雑な部分については、出展者に話す量を少なくしてもらい、主に結果や強調したい部分を伝えてもらうようにしました。展示内容が理解できるとガイドとしても柔軟に対応しやすくなると感じたので、ガイドは展示内容をもう少し事前に理解しておく必要があると思いました。

ツアーの開始時刻や所要時間などをツアー参加者に合わせてアレンジしたのは、ツアー参加者に安心してもらえたようで良かったです。ガイドの目印にした風船は、遠くからも分かりやすいものの、出展者や来場者には何をしているか伝わらない様子だったので、他の手段を考えたいです。ツアーを実施していることを一目で伝えることは重要だと思います。ガイドが展示会場でツアーをすると共に、来場者が各展示を回る最初のステップとして、どの場所にも抵抗なく利用していただけるように、来場者に身近なツアーにしていけたらと思いました。

(降旗大岳)

「研究者と立ち話」レポート4

会場のポスターをひと通り見ましたが、どの研究紹介も来場者の興味を引くための工夫が多く見られました。そのため、大多数の来場者は紹介された研究に興味を持ち、会話をしていくなかで生まれた疑問を研究

者と議論するという場面も多々見られました。これはまさに、来場者と研究者が対話することで研究が育まれている場であると感じました。今回のイベントのように研究者（専門家）と一般の方（非専門家）が話合う機会が増えることで、研究の発想やアイデアが多様化し、よりよい研究が生まれるのでは、という期待を持ちました。

この企画では、来場者の方が研究者と会話しやすい環境を作るため、京都大学の在學生（以下在學生）がポスター会場を30分のツアー形式で案内しました。具体的には、ガイドである在學生が来場者と一緒にポスター会場を周り、研究者に研究紹介をお願いしたり、自らが質問する際のお手本になったりして、来場者と研究者の対話を促しました。これにより、研究者と来場者との対話がより円滑になったように感じます。

今回、私は4つのツアーを担当し、①カラスマ大学（興味分野がばらばら、5人）、②生物に興味がある女子高生と母親、③なんでも興味を示す男子小学生（高学年）と母親、④京大卒の中年男性（記者関係の仕事）の来場者と方々と一緒にポスター会場を回りました。このうち、いくつかの組は、特に興味のある研究テーマが決まっていないということだったので、そうした組には、同じツアー行程を用意しました。そうすることで、研究者（出展者）は来場者が変わるとどの様に対応するのか、また、その時の来場者の反応を確認することができました。

以下では、ツアーを通じて私が感じたことを2点述べたいと思います。ひとつは、研究者と来場者がうまく対話できていた場合の出展者の特徴、もうひとつはツアーガイドとして気をつけたい点です。

まず、研究者と来場者の対話について、対話が上手な研究者には3つの共通する特徴がみられました。すなわち、(A)話し始める前に「～は知っていますか？」と質問している、(B)来場者ごとに話し口調や研究紹介の方法を変えることができる、(C)来場者が触れる、見る、嗅ぐ、聴くといった感覚を刺激する小道具を準備している、の3点です。この3つの特徴を持った研究者のポスターブースでは、研究者がはじめに来場者の方の背景知識を探り、その背景知識に合わせた研究紹介を行い、小道具によって対話の「中だるみ」を緩和していると感じました。そのため、幅広い年齢層の来場者のどなたとも会話が弾み、来場者も研究者もともに笑顔が多くみられました。

また、来場者が高校生以上であり、もともとその研究分野に興味がある場合には、(A)だけでも十分に対話が進むようでした。他方で、もともと研究分野に興味がなくとも、高校生以上であれば、(A)と(B)が満たされていれば、会話が弾んでいるようでした。しかし、来場者が小学生になってくると(A)(B)(C)の全てを満たしていないと対話はできていないようでした。また、小学生は小道具に興味を持ち、遊んだりすることはできても、その小道具が何を意味するのかまでは理解することが難しいようでした。

つぎに、ツアーガイドとして気をつけたい点です。これも3つありました。すなわち、(a)来場者の方と研究者が対話している時には両者の表情を確認する、(b)ガイドが来場者に対して「ここまでで質問ないですか?」「～についてどう思われますか?」などと聞くことで、来場者の方が研究者に質問しやすい環境をつくる、(c)一度のツアーにつき案内する来場者を3人以下にする、です。

(a)について、研究者と来場者の表情が堅くなっている場合、ガイドが間に入って用語の定義や話している内容の確認を研究者に向けて行うことで、会話がはずみ表情が明るくなっていくことが多いと感じました。しかし、5人でツアーを行ったカラスマ大学の生徒さんの場合、どのポスターブースでも数名は表情が堅く、会話に参加することができていないように思いました。表情が堅くなる理由には、研究者と来場者の間に研究に関する背景知識の差があり、会話が上手くできていない可能性や、単純に研究者の話し声が聞こえていない可能性があると思いました。そこで、(a)と(b)を行うことで、来場者と研究者が会話をするのに必要な背景知識を共有することができました。さらに、(c)を行うことで、ガイドが研究紹介中の研究者と来場者の両方を意識しやすくなり、来場者と研究者の物理的な距離が近くなるため、声が聞こえやすくなると思います。こうした工夫により、(a)と(b)の効果もより高くなると期待できます。

(才木真太郎)

2-2. ちゃぶ台囲んで膝詰め対話（サイエンスカフェ）

■ 2-2-1. 概要

日時 9月28日（日曜日）10時30分～12時00分／13時30分～15時00分

会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 国際交流ホール

「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話（サイエンスカフェ）」では、研究にまつわるあんな話、こんな話を、来場者と大学の研究者がお茶の間気分で話し合うコーナーです。会場には4つのちゃぶ台ブースが設置され、10時30分から12時の間に3つ、13時30分から15時の間に4つ、計7つの研究グループが出展しました。各研究グループは、どんな研究を行っているのか、なぜその研究をすることになったのか、などを来場者と語り合いました。3帖の畳から成るブースでは、ちゃぶ台を囲んだり、畳の縁に腰をかけたりと、思い思いのスタイルで研究者と対話をする来場者の姿が見られました。



〈来場者の声〉

- 子どもの疑問に（科学的であるかないかにせよ）ハナから向き合ってくれて、顔をつきあわせて一人前に扱ってくれてありがとう（40代）
- ツアーやちゃぶ台など、イベントが多かったのがよかった！

〈出展者の声〉

- ちゃぶ台の企画で参加させていただきましたが、スタッフの方が気を使ってお手伝いをして下さりとても助かりました。休憩時間を作って時間を区切っていたので、何人もの来場者の方とお話できました。
- ちゃぶ台は来訪者にとっていまいちコンセプトが分かりにくい。何のテーマで語るのか。のぼりでも示せばのぞきに行くのですが。

■ 2-2-2. 「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話」出展一覧

日時	出展代表者氏名（所属 職名）	出展タイトル
9月28日（日） 10時30分～ 12時00分	和田敬仁（京都大学大学院医学研究科 准教授）	「いのちのバトン ―体験型ヒト遺伝教室―」
	西村周浩（京都大学白眉センター 特定助教）	「日本でヨーロッパについて語る？」
	村瀬雅俊（京都大学基礎物理学研究所 准教授）	「統合知 ―新たな学問の創成に向けて―」
9月28日（日） 13時30分～ 15時00分	平岡真寛（京都大学大学院医学研究科 教授） 原田浩（京都大学医学部附属病院 特定准教授）	「分子画像と四次元放射線治療の融合」
	ネイサン・バデノック（京都大学白眉センター／東南アジア研究所 特定准教授）	「言語から考える世界」
	寺村謙太郎（京都大学大学院工学研究科 准教授）	「CO ₂ を“ひかり”と“みず”でリサイクル！？」
	井上元（京都大学大学院工学研究科 助教）	「未来の“クルマ”とその“社会”」

「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話」レポート

私の仕事内容は、① ちゃぶ台の輪に入り難そうなお客さんがいたら、さりげなく促す、② 研究者を独占している人がいたら、他の人も話せるようにしてあげる、③ 研究者が一方向的に話し続けていたら、よい感じの質問をして遮る、④ 5分間の休憩時間になったら「休憩中」の三角柱をちゃぶ台において、休憩を入れてもらう、の4つでした。

ちゃぶ台の形式は2つに分類することができました。ひとつは、(i) 学生などスタッフが多く、お客さん一人に対して研究者一人が対応するタイプ（平岡先生、寺村先生）、もうひとつは、(ii) 研究者が1人あるいは2人で、お客さん3～5人に対して研究者一人が対応するタイプ（和田先生・バデノック先生・西村先生・村瀬先生・井上先生）です。

この2つの形式における、①-④の仕事について、実行した内容・反省・コメントを以下に挙げます。

(i)について、① 研究者に声をかけることをためらう方が多く見られたので、背中を押すことはできたと思います。② 独占してしまう人は時々見られました。しかし、他にも研究者が多いので他の人が話せないという問題は起きることはなかったです。研究者側が少し困っている様子でしたが、そこを遮ることはしませんでした。③ 4ブースを見ているので、ずっと話に入ることはできず、遮ることはできませんでした。ポスターよりもゆっくり聞けるということもちゃぶ台のメリットだと思うので、あまり問題ではないと思います。また研究者側もひと通り話すネタは用意されていたのがよかったと思います。④ この形式に対しては、休憩時間の声掛けは行いませんでした。大体20-30分ほどで入れ替わりがあったので、問題はなかったと思います。

(ii)について、① 一度輪になって5-10分経ってしまったところには入らない方がいいと思いました。入ったとしても話についていけないです。ただ、30分毎の休憩を区切りにし、お客さんを呼び寄せる・始まったばかりのところに場所を作って入れるなどができました。② 研究者を独占する人はいなかったと思います。③ (i)と同様、遮ることはできませんでした。この形式だと、研究者が話しつづけるのは仕方がないことだと思います。聞いているうちにお客さんも慣れて、どんどん質問しているのが見られました。④ さりげなく

休憩の三角柱を置いても効果はありません。そのままにしておくと、会話がいつまでも続くので、声をかけて入れ替わってもらいました。ブースに 30 分の時間区切りが明記してあったので、それに合わせて時間を調整して来るお客さんがいました。ただ、13:30 スタートのところをすこし早めてスタートしたため時間がずれ、入れ替え時間があいまいになってしまいました。お客さんに次が何時から始まるか伝えたいときに困りました。

研究者側と事前にどちらの形式で、どのようにサポートしたらいいか話し合っておくべきでした。話があまりにも長い時には、ひと区切りつけることを強制することも必要だと感じました。特に(i i)の場合は、研究者の人数が少なく、話すことに集中してしまうので、こちら側から区切り時間への積極的な介入と研究者側の時間意識が大事だと思いました。

(秋柴美沙穂)

2-3. お茶を片手に座談会（トークライブ）

■ 2-3-1. 概要

日時 9月28日（日曜日）10時30分～11時30分

12時00分～13時30分

14時30分～16時00分

会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 会議室Ⅳ

1つのテーマに沿ってみんなで語り合うトークライブです。今回は、3つのトークライブが行われました。登壇者と客席の距離を縮め、登壇者がテーマに沿って話しながら客席の来場者とも意見を交換できる場となりました。来場者は長椅子に腰をかけて、じっくりと話に耳を傾けることも、ふいに質問することもでき、思い思いのスタイルでトークライブに参加していました。

また、話し合いと同時進行で、言葉と文字だけでは来場者・登壇者に伝わらないモヤモヤを、グラフィックファシリテーター（※）が、思いや感情も含めて「絵巻物」にしていきました。来場者は「絵巻物」を写真に収めて持ち帰ったり、「絵巻物」を見ながら登壇者と話したりしていました。（「震災映像の想像力と市井の人々～京大所蔵関東大震災記録フィルムをめぐって～」、「コトバのデータベースが社会を変える？：コーパスの意義と可能性を探る」）

なお、座談会の内容は、京都大学のOCW（オープンコースウェア）にて無料公開する予定です。



※グラフィックファシリテーター

やまざきゆにこ 言葉と文字だけでは伝わらない組織や会議でのモヤモヤを、「絵巻物」の力でつなぎ、未来へのアクションを引き起こすグラフィックファシリテーター。ファシリテートしてきたワークショップは企業から行政や大学まで 300 件を超える。
やまざきゆにこさんによる絵解きは以下の URL をご覧ください。
<http://www.graphic-facilitation.jp/index.html>

〈来場者の声〉

- 座談会の一つ目がとても良かったです (30 代)
- 「宇宙を見てゴカイを食べる？」本当に楽しくためになるイベントで特に佐藤先生のゴカイを愛している感じがとても印象的でした (40 代)
- 震災映像の話は、自分の専門と近い分野だったのでおもしろかった。話している先生方が楽しそうで、ちょっとマニアックだったりするところがおもしろかった (30 代)
- 言語データ分析の未来を感じました (30 代)
- 絵を描いている人がいたが、絵が小さくて見えなかった。でも、話の聞き流していた部分を、描いている人が途中で質問してくれたので、確認できた (30 代)
- 座談会が入りやすかった (50 代)

■ 2-3-2. トークテーマ・参加者一覧

● テーマ「宇宙を見てゴカイを食べる?～人類学×生物学×天文学～」

日時 9月28日(日曜日) 10時30分～11時30分

会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 会議室IV

インドネシアのある地方では、1年に1、2回だけ大発生する「ニャレ」という生き物(釣餌に使うゴカイやイソメの仲間)がご馳走として、また祭祀的な意味をこめて食べられています。現地の伝統的暦がこの大発生の日を正確に当てられるのはなぜか?という人類学者の疑問に端を発して、ゴカイやイソメの生態や、月の光や地磁気を通して生物がどうやって宇宙を「見て」いるかなど、人類学者、生物学者、天文学者の議論が交わされました。座談会の最後には、文化と生物の多様性の重要性が再確認されました。

パネリスト 古澤拓郎(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授)
佐藤正典(鹿児島大学大学院理工学研究科 教授)
磯部洋明(京都大学宇宙総合学研究ユニット 特定准教授)



この座談会の詳細は以下の URL をご覧ください。

<http://research.kyoto-u.ac.jp/zadankai01/>



●テーマ「震災映像の想像力と市井の人々～京大所蔵関東大震災記録フィルムをめぐって～」

日時 9月28日（日曜日）12時00分～13時30分

会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 会議室Ⅳ

2013年10月に京都大学建築系図書室書庫で発見された関東大震災記録フィルムの鮮明さには、新事実解明の予感があります。映画の誕生以降の100年の間、記録映画、特に震災映像は視覚文化にとってのターニングポイントになってきました。この座談会では12分間の震災映像をめぐって、右往左往してきた歴史のこれまでとこれからの取り組みについて話し合いました。

スピーカー 田中傑（京都大学防災研究所 特任助教）
大澤浄（東京国立近代美術館フィルムセンター 研究員）
小川直人（せんだいメディアテーク 学芸員）
モデレーター 佐藤守弘（京都精華大学デザイン学部 教授）
グラフィックファシリテーター やまざきゆにこ

企画：五島敏芳（京都大学総合博物館）、仲野安紗（京都大学学術研究支援室）、元木環（京都大学情報環境機構）

共催：京都大学研究資源アーカイブ

協力（映像所蔵）：京都大学大学院工学研究科建築学専攻

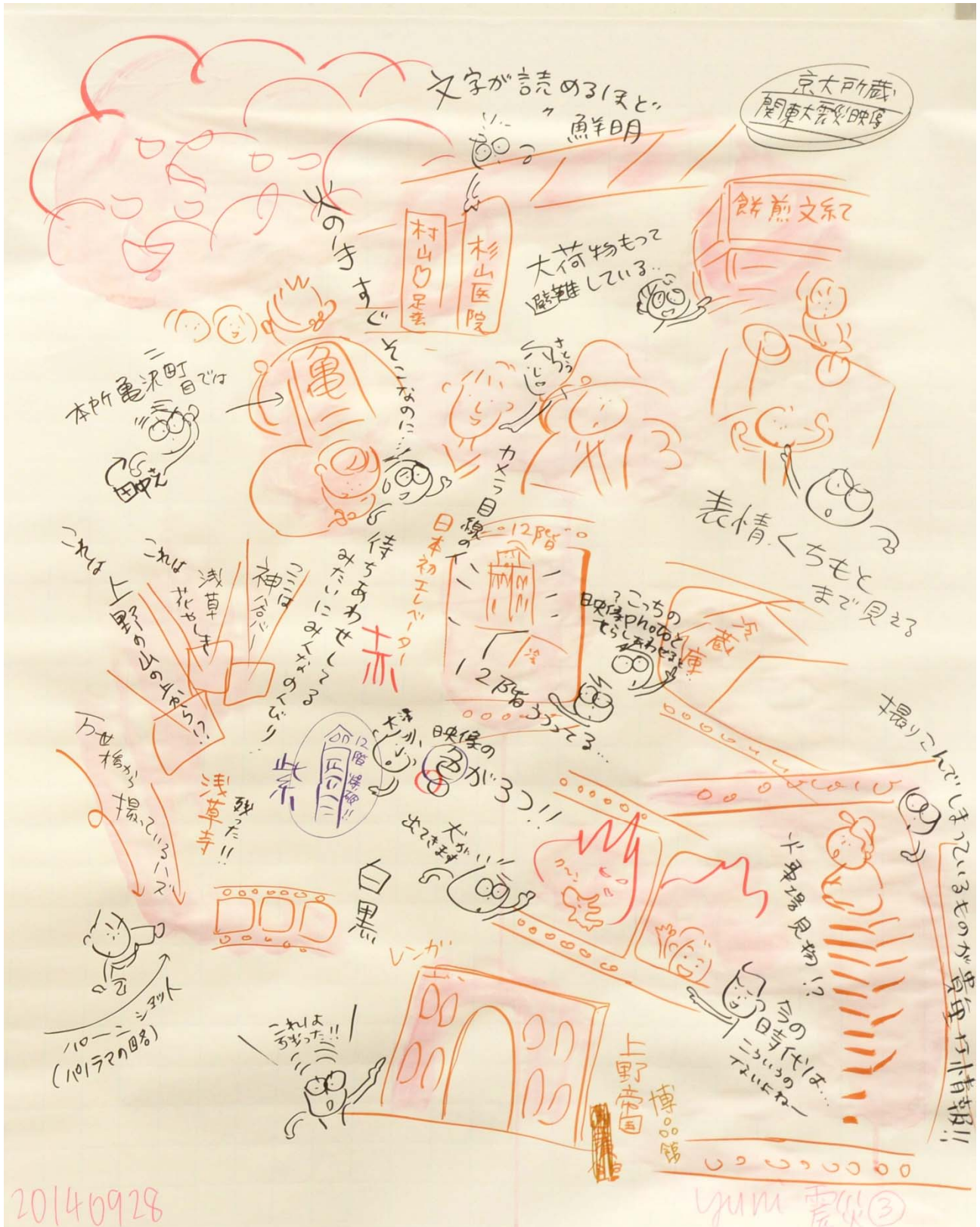


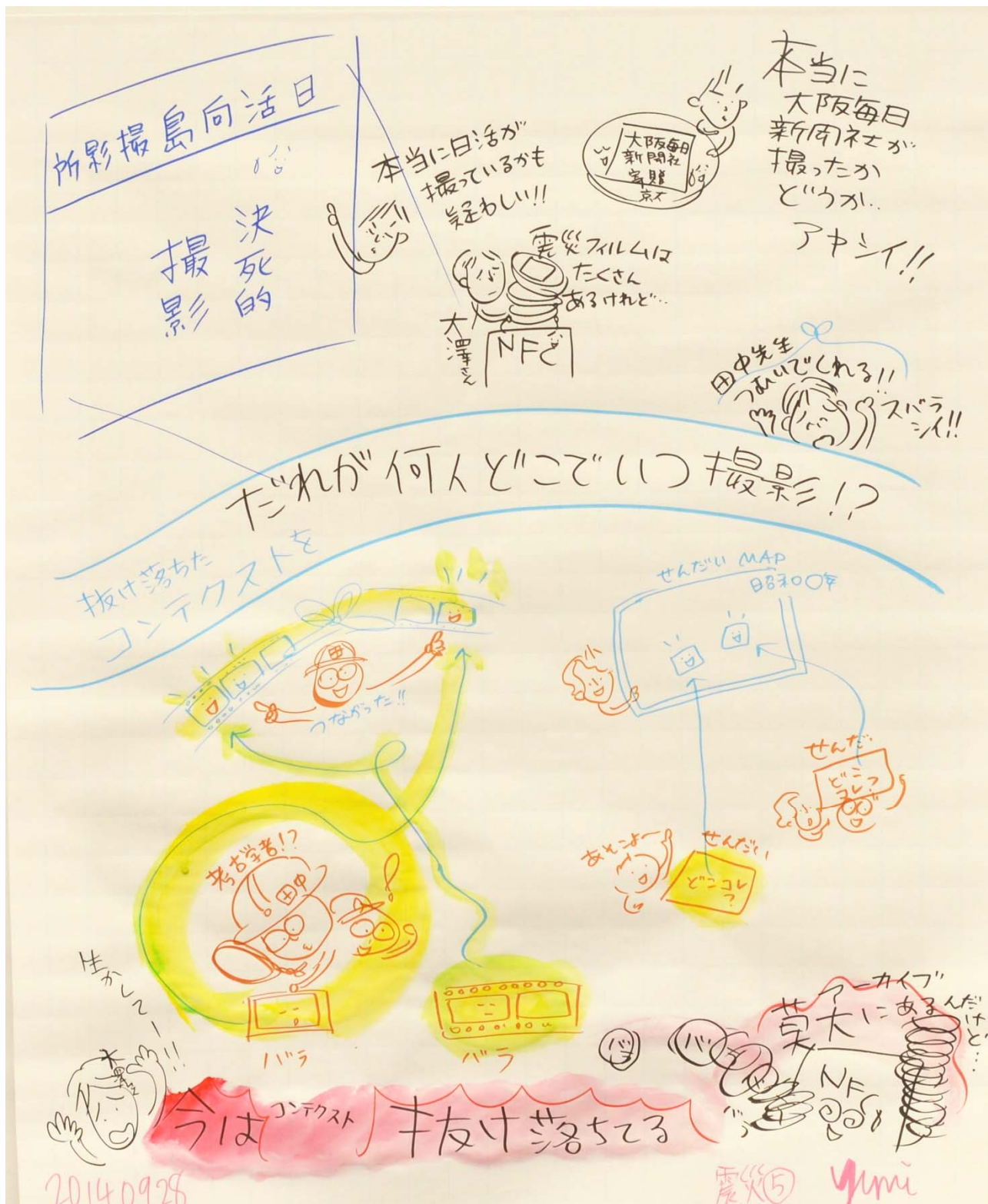
この座談会の詳細は以下の URL をご覧ください。

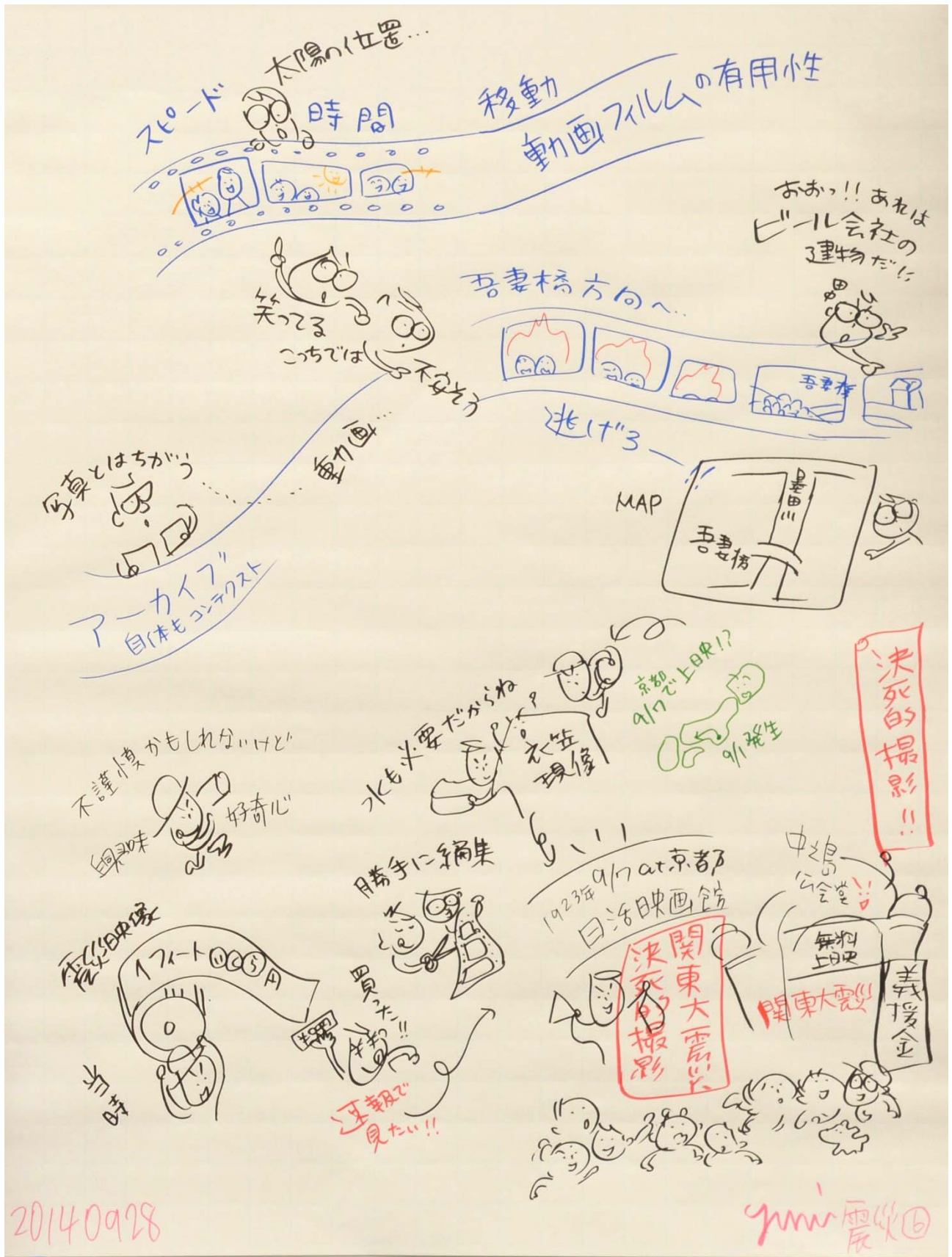
<http://research.kyoto-u.ac.jp/zadankai02/>

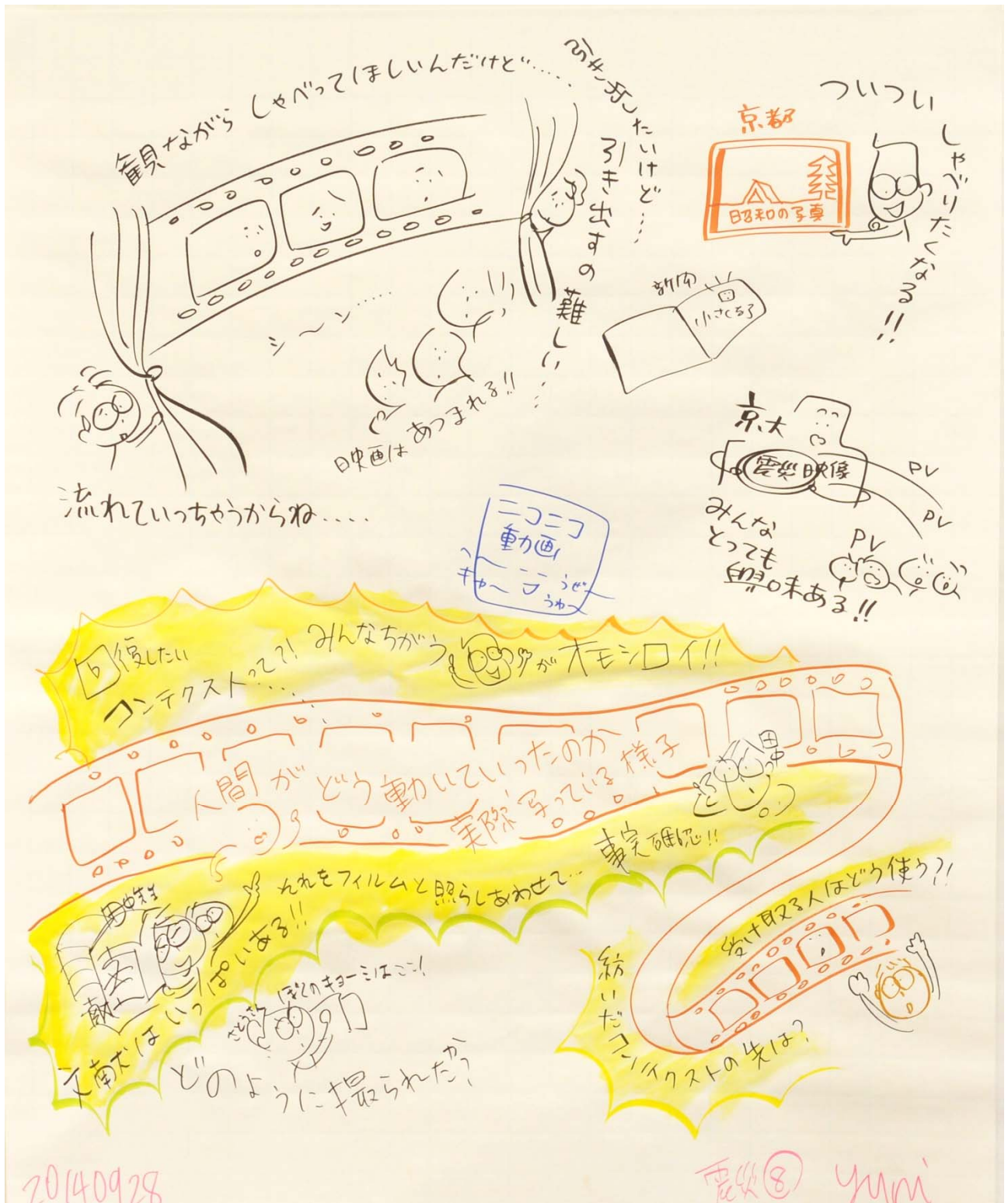












映像資料について

本座談会で上映された映像「京都帝国大学工学部建築学教室 35mm フィルム：実写 関東地方大震災」は、京都大学研究資源アーカイブシステムで配信されています。

京都大学研究資源アーカイブシステムトップページ

<http://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/about/introduction/search/>

「京都帝国大学工学部建築学教室 35mm フィルム：実写 関東地方大震災」コレクショントップページ

<http://urx.nu/cizL>

なお、映像を研究や教育等に二次利用される場合には、研究資源アーカイブ担当までお問い合わせください。

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学総合博物館（京都大学研究資源アーカイブ担当 宛）

TEL：075-753-3272

FAX：075-753-3277

E-MAIL：kurra-info@museum.kyoto-u.ac.jp

URL：<http://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/>

●テーマ「コトバのデータベースが社会を変える？：コーパスの意義と可能性を探る」

日時 9月28日（日曜日）14時30分～16時00分

会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 会議室IV

コーパス利用の最新事例を、英語学研究、及びカスタマーセンター業務等の社会の実問題への適用の現場から紹介します。さらに医療の臨床研究でのコーパス利用の可能性、とくに医師と患者のコミュニケーション（インフォームド Consent）や医師と看護師のコミュニケーションなどにどのような展開の可能性があるのかを話し合いました。

パネリスト

家入葉子（京都大学大学院文学研究科 教授）

黒橋禎夫（京都大学大学院情報学研究科 教授）

佐藤恵子（京都大学医学部附属病院臨床研究総合センター 特任准教授）

モデレーター

荒井祐介（京都大学本部構内（文系）URA 室 リサーチアドミニストレーター）

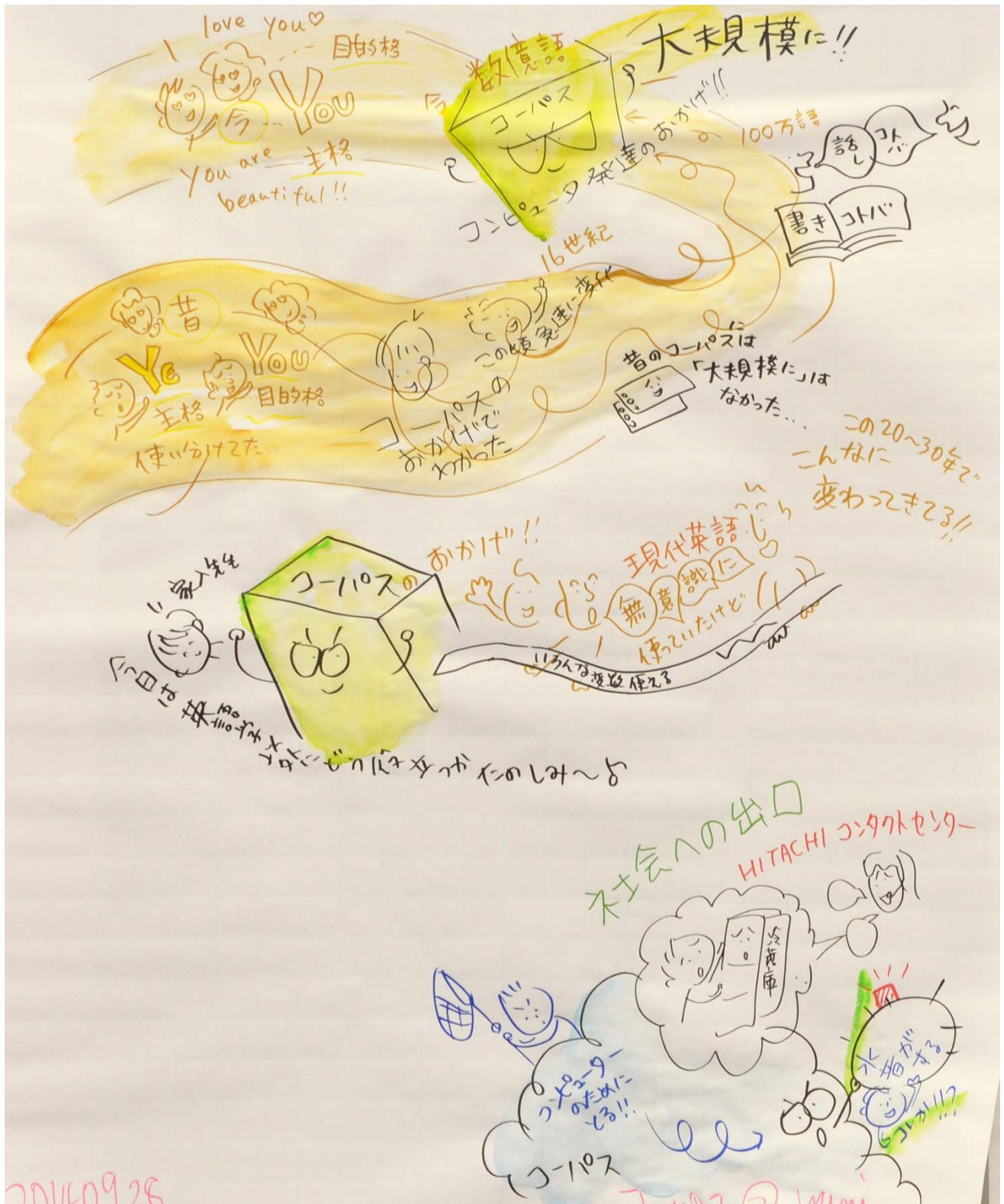
グラフィックファシリテーター やまざきゆにこ



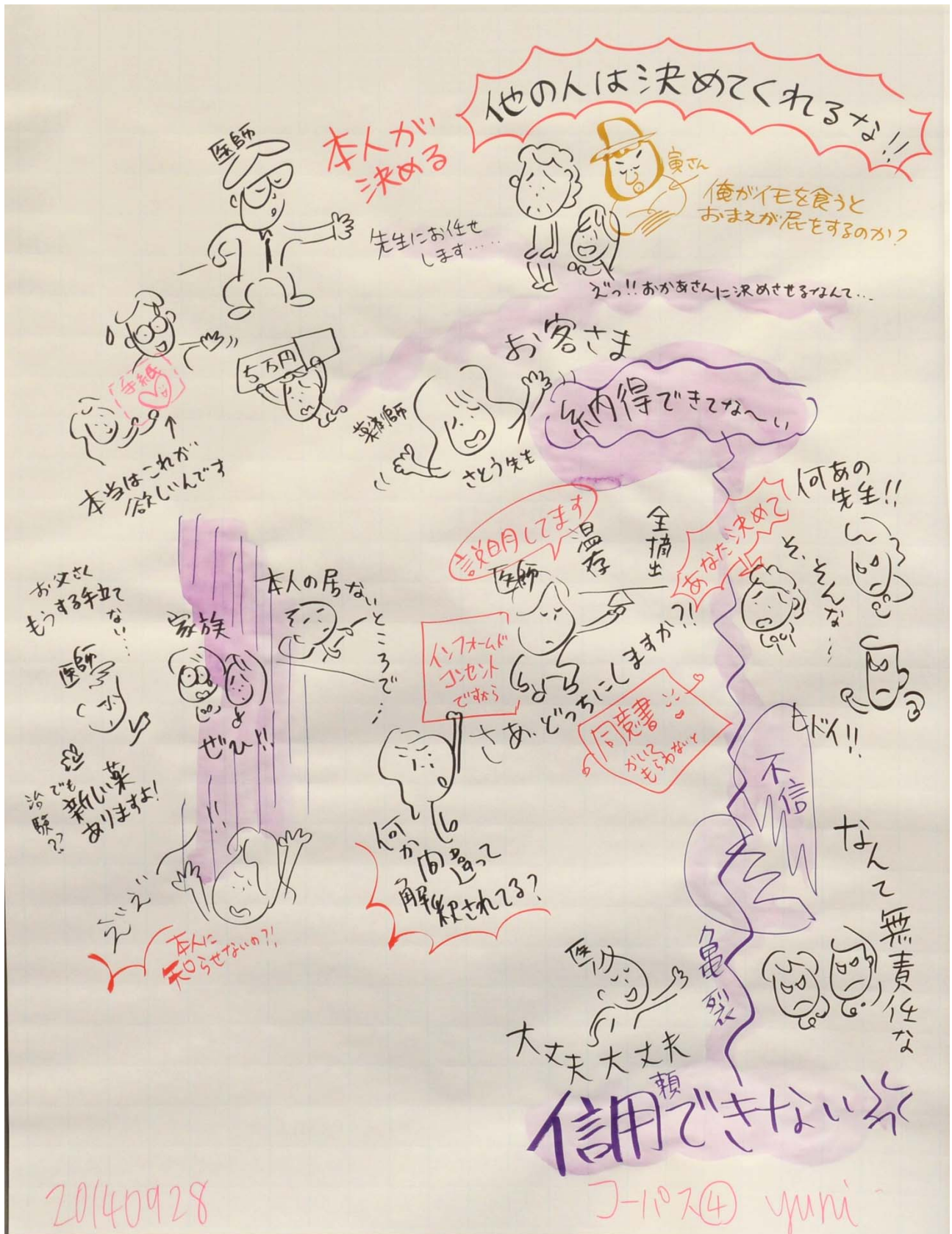
この座談会の詳細は以下の URL をご覧ください。

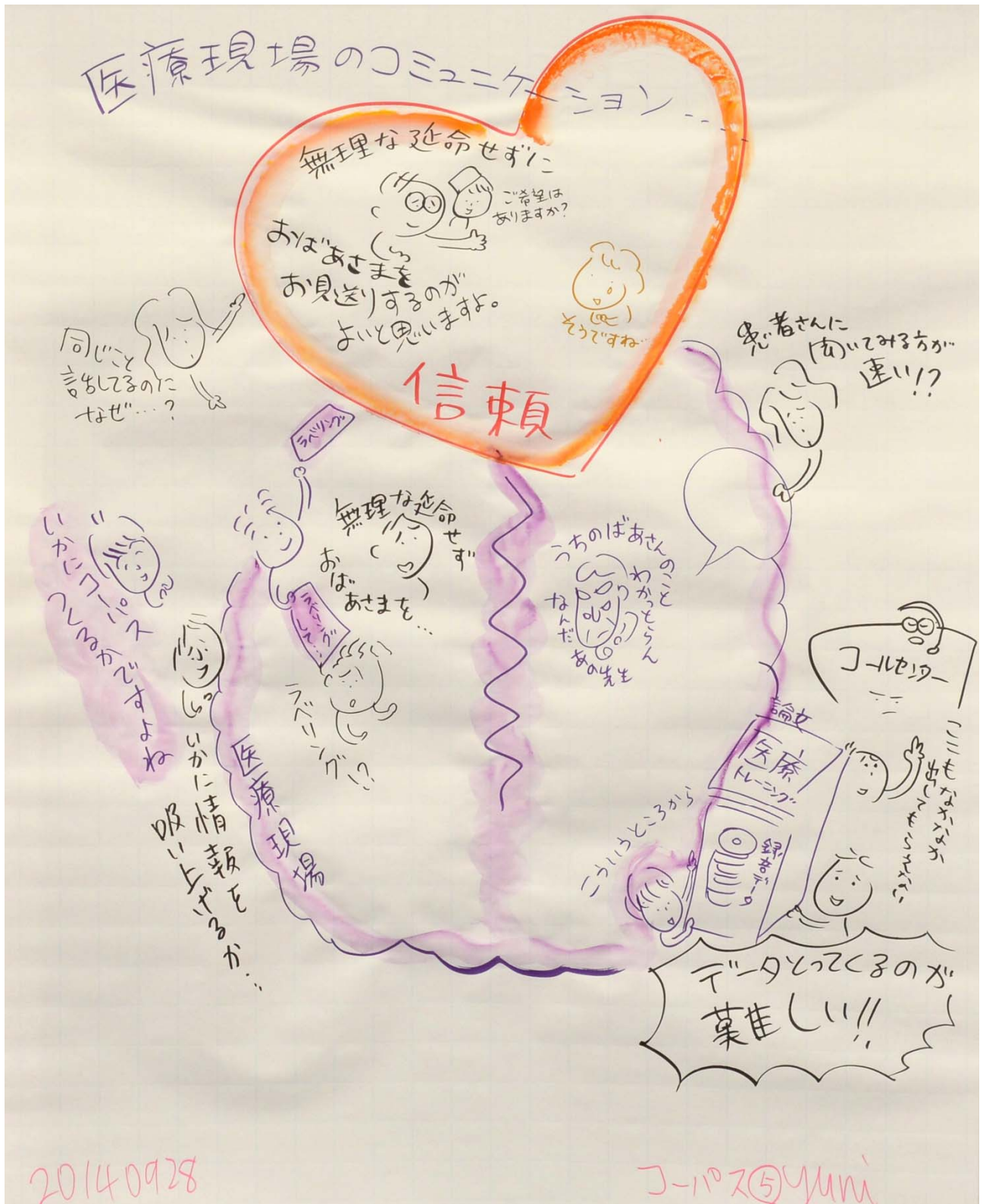
<http://research.kyoto-u.ac.jp/zadankai03/>

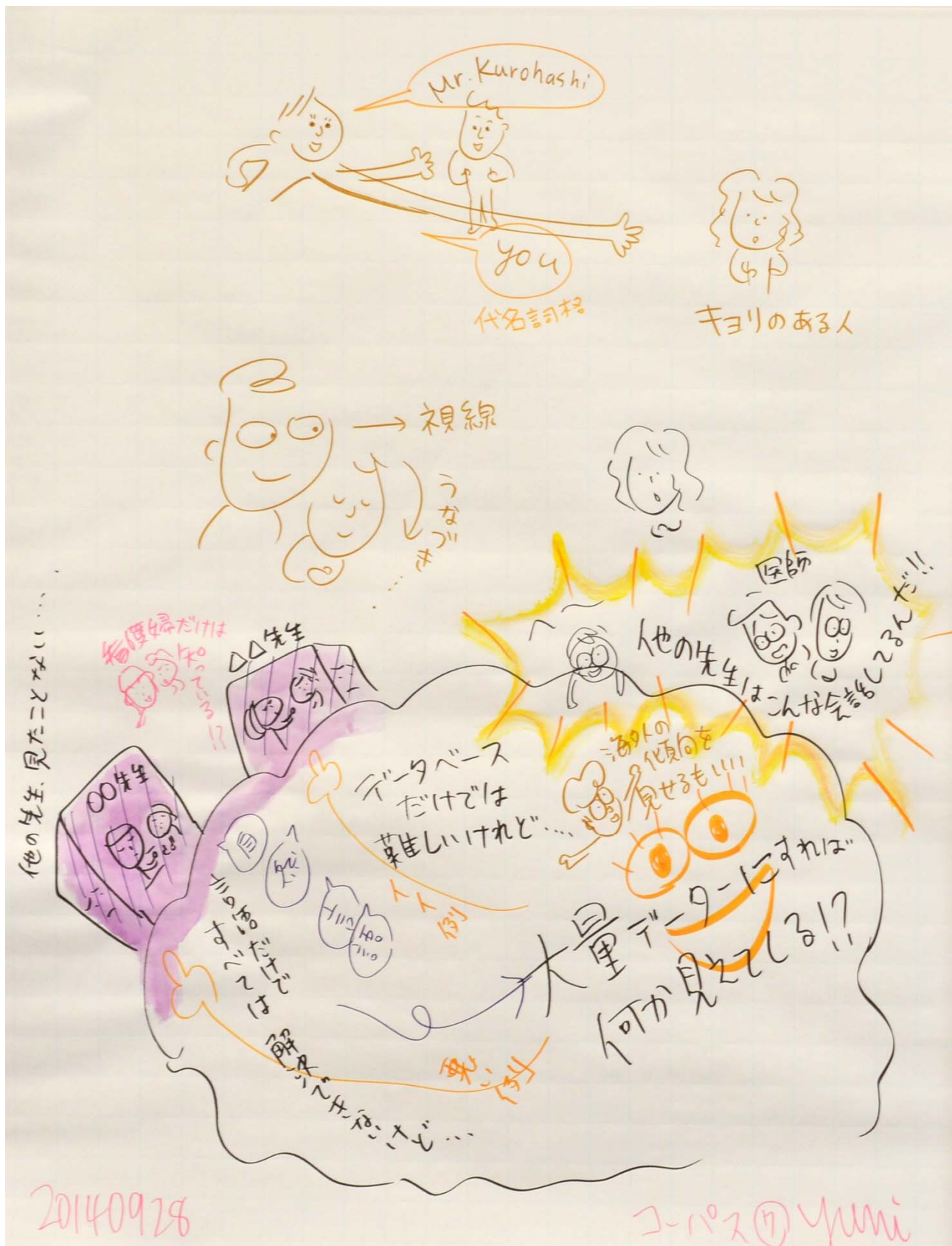


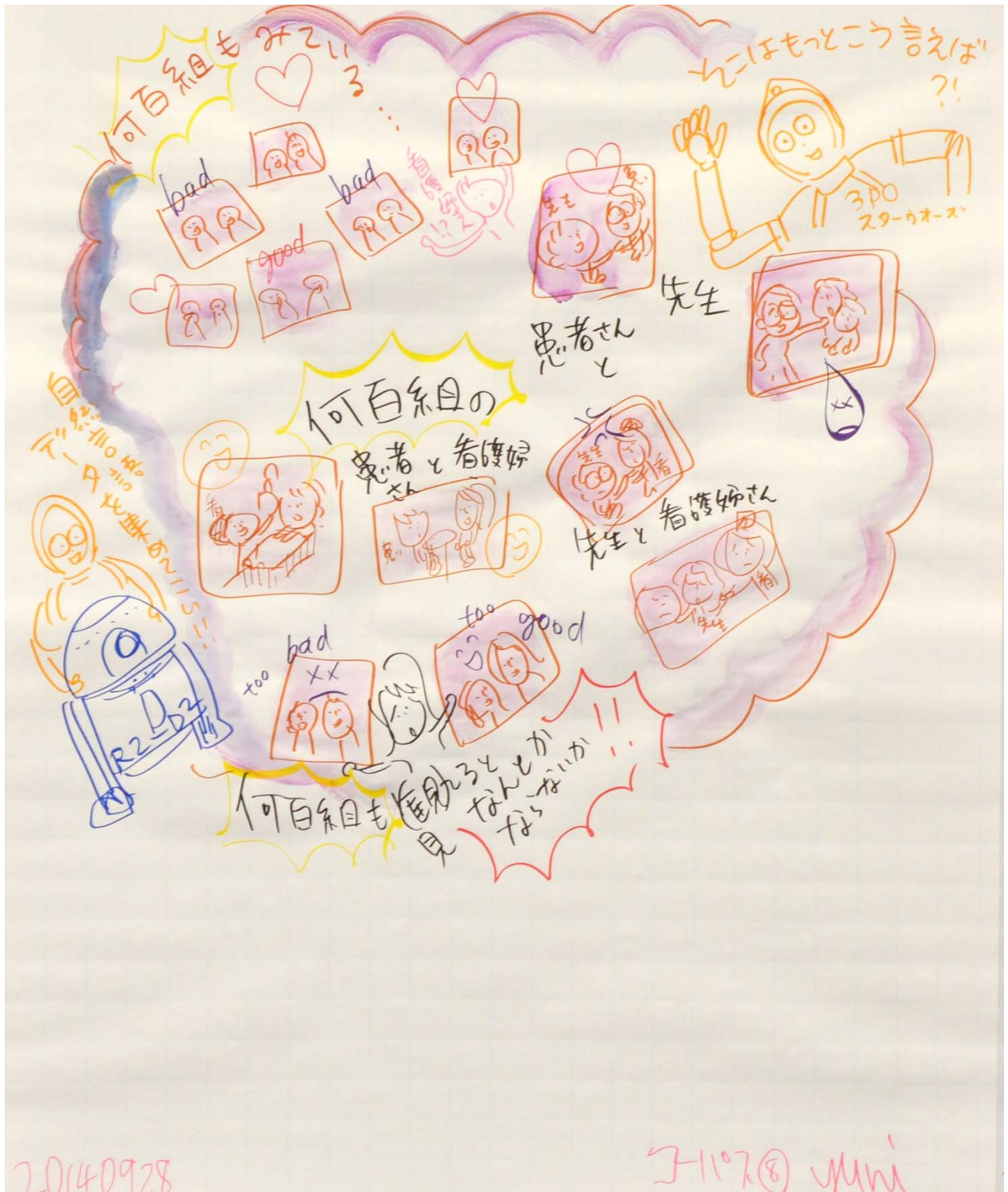












2-4. 研究者の本棚（特別図書室）

■ 2-4-1. 概要

日時 9月28日（日曜日）10時00分～16時00分

会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 会議室Ⅲ

京都大学アカデミックデイに参加している研究者のお勧めの本を展示・紹介しました。研究者には事前に「今の仕事（研究、進路）を選ぶきっかけになった本」、「ハマっている本」、「若者にお勧めしたい本」、「自分の研究に関連して紹介したい本」の4つの質問をし、その本と本を選んだコメントを紹介・展示しました。来場者が本を手にとり、本から研究者のことを知ってもらう、また当日参加している研究者との対話のきっかけになることを狙って企画をしました。

また、展示の他に、午前中は映像の上映・解説、午後はミニトークを行いました。

※本報告書の最後に推薦図書のブックリストを付けています。

協力：京都大学生協同組合





〈来場者の声〉

- 研究者の本棚がとても参考になりました（京大生）
- もっと本を紹介してほしい（20代）

〈出展者の声〉

- 本の紹介は、他の方のお勧め本も大変おもしろく、よかったです。また、私たちの展示をみたあとで、本の購入を希望されるかたもいらっしゃいましたので、ありがたかったです（教授）
- 「研究者の本棚」の企画は、ほかの研究者が本をどのように読んでいるのかが紹介されていてよかった（助教）

「研究者の本棚」レポート1

本棚企画は、気になった研究者の紹介する本を読んだり、本をきっかけにある研究者が気になったりと図書を介してお客さんと研究者の間接的な交流を意図した企画です。

各コーナー（「今の仕事（研究・進路）を選ぶきっかけになった本」「今ハマっている本」「若者にお勧めしたい本」「自分の研究に関連して紹介したい本」「座談会・本トークの先生方の推薦図書」）に出展研究者の推薦図書が並び、自由に閲覧できるようになっていました。古典の名著から最新の大ヒットコミックまで、老若男女問わず訪れた人の興味を引くラインナップであったと思います。用意してあった椅子に腰かけてじっくりと読みふける人や、軽く立ち読みしてから購入希望する人も見られました。

コーナーには推薦図書とともに、研究者による本の推薦文が書かれているブックリストが用意されていたり、本には推薦文付きのカードが取り付けられていたり、お客さんにとってその本の魅力が分かりやすく提示されていたと思います。

少し気になったのは、映像ドキュメンタリーの紹介が始まると部屋全体が消灯し、（おそらく）本棚目当てで入ってきたお客さんがしばらく本をよく見られない状態になっていた事です。

（倉田康平）

「研究者の本棚」レポート2

「研究者の本棚」はアカデミックデイに出展している研究者から昔読んで影響を受けた本、分野に関連した推薦図書、最近ハマっている本などを聞き、実際に展示する企画です。推薦図書も大学で使われる専門書

からマンガに至るまで様々な本がありました。私自身、大学の先生がどのような本に興味を持っているのかを知ることができたり、「この本そのうち読んでみよう」と思う本を見つけたりととても楽しい企画だったと思います。来場者の皆さんも大変熱心に本を見ていらっしゃいました。

私の担当時間中の来場者の延べ人数を表 1 に示します。来場者を数える際には、会場に入った段階で（滞在時間の長短に関係なく）カウントし、また、同じ人が複数回入ってきた場合も全てカウントしています。ミニトーク直後はそのまま会場に残って本を見られていた方が多く、その後來場者数は減ったものの 15:30 付近に放送されたアナウンスの影響もあってか、終盤には再び多くの人がいっぱいでした。年齢層としても高校生から高年齢の方々まで幅広くいらっしゃっていたように思います。

表 1 「研究者の本棚」14 時以後の来場者概数

時刻	延べ人数	時刻	延べ人数
14:03-14:15	33	15:00-15:15	12
14:15-14:30	15	15:15-15:30	21
14:30-14:45	8	15:30-15:45	28
14:45-15:00	6	15:45-16:00	11
		計	134

気付いた点としては、推薦図書の一覧を冊子にまとめて自由に持っていけるように置いてあったのは大変良かったと思います。来場者から 1 部頂いても良いかと聞かれることが複数回ありました。

今回は会場がポスター会場を離れて少し奥に入った会議室で、少々来場者が入りにくいのではないかと感じられました。ポスターの横に関連図書・推薦図書の表紙の写真を貼るだとか、ツアーガイドなどを通して積極的にこの企画を宣伝していてもよいのかなと思います。

（草場哲）

■ 2-4-2. トークテーマ・参加者一覧

● 映像上映・解説「東南アジア研究所の『映像ドキュメンタリー・プロジェクト』の紹介」

日時 9月28日（日曜日）11時30分～12時30分

会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 会議室Ⅲ

Visual Documentary Project は、東南アジア研究所が2012年に開始したプロジェクトです。2013年は「多文化共生」をテーマに作品を募集したところ、各国から多数の応募がありました。今回はそれら応募作の中から、多様な民族・宗教・文化を内包しながら急速に変化しつつある東南アジア社会の実情を映し出す作品2本を上映し、研究者が解説を行いました。

解説 Mario Ivan Lopez / マリオ・アイバン・ロペズ（京都大学東南アジア研究所 准教授）



〈来場者の声〉

- 研究者の本棚で東南アジアの映像ドキュメンタリーを見ました。普段生活していく中で、決して関わることのない世界をダイレクトに見ることができ、衝撃が大きかったのともっと知りたくなりました。無料とは思えない大きなものを得ることができました！また来年も来ます！（高校生）

「東南アジア研究所の『映像ドキュメンタリー・プロジェクト』の紹介」レポート

本棚企画と同じ部屋で 11:30 頃から 1 時間程度 Mario Ivan Lopez 准教授による、映像ドキュメンタリーの紹介がありました。

今回は「多元共生」「ジェンダー」をテーマとし、東南アジアの若手映像作家の短編ドキュメンタリー映画 2 本を上映し解説するという企画でした。

セックスワーカーとして、トランスジェンダーとして、カンボジア・プノンペンに生きる男性の日常の映像と独白による“Live under the Red Light”、タイを舞台に教師の虐めが原因で自殺未遂にまで追い込まれた「第 3 の性」の少年と、母親、転校先の友人やトランスジェンダーの教師を取材した“Consider”を鑑賞しました。短い上映時間ながらセクシャルマイノリティへの理解と容認に関する現状と課題が克明に映し出されていたと思います。

聴衆は高校生や大学生など、比較的若い層が多かったと思います。2 本の映像を見終わった高校生女子から「学校の授業ではまず学ばないようなことが、ダイレクトに表現されていました。こんな世界があるなんて…」という声も。研究者側も、「今後似たようなテーマで高校生に向けて公演してみてもいいかも？」という今後の展望が見えてきたようです。

企画タイトルの「東南アジア研究所の—」では実際の内容が分かりづらいという指摘もいただきました。

（倉田康平）

● ミニトーク「お伽草子の世界 ―奈良絵本・絵巻を楽しむ―」

日時 9月28日（日曜日）13時30分～14時00分

会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 会議室Ⅲ

本を読む喜びを、古人はどのように味わってきたのでしょうか。四百年前の人々に愛読された挿絵入りの本が、京都大学には多数残されています。そうした書物との出会いを通して、純粹に本を読む喜びを追体験したいと思います。古典文学とは、麗々しい装幀に包まれて書棚を飾るだけのものではないのです。

話し手 金光桂子（京都大学大学院文学研究科 准教授）



「お伽草子の世界 ー奈良絵本・絵巻を楽しむー」レポート

本棚コーナーでは『お伽草子の世界 ー奈良絵本・絵巻を楽しむー』の 30 分ほどのミニトークが行われました。「お伽草子とは何であるか」というところから始まり、実際の絵本・絵巻の内容解説をしていただきました。また、絵本・絵巻が作られた目的や、昔の絵本・絵巻から学べることも話していただき、ただ昔話をするのではなく、現代にもつながることがあって興味を持ちやすかったです。

はじめはお客さんが 5~6 人ほどで少なかったのですが、だんだんと増えて最後は 15 人程度いました。みんな静かに集中して先生のお話を聞いていました。

企画が「トーク」形式だったため、多少仕方のないことなのかもしれませんが、研究者と一般の人が関わるという観点から見ると、少し一方通行のコミュニケーションになっていたかもしれません。もちろん、最後に質問を受け付ける時間はありましたが、教室での先生と生徒のように一対大勢になってしまうとどうしても質問しづらい雰囲気が流れてしまうと感じました。研究者と参加者がもっと近くに感じられるような形式で行うことができれば、双方にとってより一層良い時間になったのではないかと思います。

(金岡歩美)

■ 2-4-3. 関連企画

アカデミックデイ参加研究者のお勧めの本について、他の施設でも特設コーナーが設置されました。

● 京都府立図書館



● 京大生協ショップルネ（書籍コーナー）

アカデミックデイ開催の次の日（9月29日）から約2週間、ルネー階イベントコーナーにて「研究者の本棚」が再現され、展示されていた本の販売が行われました。

2-5. 対話マラソンのための給水ポイント（カフェコーナー）

■ 2-5-1. 概要

日時 9月28日（日曜日）10時00分～15時30分

会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 国際交流ホール

「京都大学アカデミックデイ」では、コーヒーやお茶を提供するカフェコーナーを用意しました。このコーナーには、「好きなお飲物を片手に、対話の場へお戻りください」と記したサインを置きました。昼のコーナーやトークライブでは、飲み物も楽しみながら、来場者と研究者が対話をする場面が見られました。



〈来場者の声〉

- 飲みもの等もあって長時間楽しむことができた（高校生）
- ドリンクを飲みながらゆっくりと話を聞ける（20代）
- アンケートと交換でドリンクや記念品がもらえるシステムとてもよいと思います（30代）

〈出展者の声〉

- 飲み物が出るのがありがたかったです（大学院生）
- 予想以上の来場者でのがれが枯れました。飲み物の提供は大変ありがたかったです（研究員）

3. アンケート

3-1. 来場者アンケート

■ 3-1-1. アンケートの設計とねらい

「京都大学アカデミックデイ」では、来場者のみなさまに2種類のアンケートにご協力いただきました。

1種類目は、「対話マラソンのための給水ポイント（カフェコーナー）」でお使いいただいた「ドリンクと交換アンケート」。「京都大学アカデミックデイ」をどこで知ったのか？ どのような方にお越しいただいたのか？ を主催者が知ることがこのアンケートの目的でした。

もう1種類は、お帰りの際にご協力いただいた「記念品と交換アンケート」です。「京都大学アカデミックデイ」の満足度や研究者との対話で印象に残ったことなどをご記入いただきました。



● ドリンクと交換アンケート（A5 サイズ：148×210mm）



京都大学アカデミックデイ 2014

ドリンクと交換アンケート

早めに記入！

以下のアンケートにご記入いただくと、「対話マラソンのための給水ポイント」(カフェコーナー)でご使用いただけるドリンクチケットになります。15:30までにカフェコーナーにお持ちください。ドリンクチケットと交換させていただきます。

※15:30を過ぎてもアンケートは受付にて回収しておりますので、ぜひご記入ください

2014.9.28

それぞれ、最も近いものを 1つだけ お選びください。

Q 1. 「京都大学アカデミックデイ」の開催を最初にどこで知りましたか？

ポスター・チラシを見て ① 高校で ② 大学で ③ 地下鉄で ④ 市バスで
 ⑤ 図書館で ⑥ その他の場所()

⑦ 新聞(紙名:)
 ⑧ ラジオ
 ⑨ 京都大学ホームページ ⑩ ツイッター・フェイスブックなど
 ⑪ メーリングリスト・メルマガなど
 ⑫ 「京都大学アカデミックデイ」関係者からの紹介 ⑬ 会場に来て初めて知った
 ⑭ その他()

Q 2. 科学・技術に関心がありますか？

① とても関心がある ② 関心がある ③ 関心があるともないとも言えない
 ④ 関心がない ⑤ 全く関心がない ⑥ わからない

Q 3. 科学・技術に関する情報を積極的に調べることはありますか？

① はい ② いいえ ③ わからない

Q 4. 過去、科学・技術に関する情報を調べた際に、探している情報を見つけることができましたか？

① 見つけれられた。大抵、その内容は容易に理解できる。
 ② 見つけれられた。しかし、ほとんどの場合、その内容を理解することは難しい。
 ③ 見つけれられなかった。ほとんどの場合、探している情報は見つけれられない。
 ④ わからない

Q 5. ご自身について教えてください。

① 小学生 ② 中学生 ③ 高校生 ④ 高等専門学校生
 ⑤ 京大生 ⑥ 京大生以外の大学生など学生
 ⑦ 京大教職員(年齢 代) ⑧ その他(年齢 代)

ご協力、ありがとうございました。



Dialog with the Public

● ドリンクチケット（名刺サイズ：55×91mm）



何度でも使える ドリンクチケット

*対話マラソンのための給水ポイント(カフェコーナー)で、
ご提示ください。

京都大学アカデミックデイ

● 記念品と交換アンケート (A5 サイズ : 148×210mm)



京都大学アカデミックデイ 2014

記念品と交換アンケート

帰る前に記入!

以下のアンケートにご記入いただき、受付にお持ちください。京都大学アカデミックデイ特製クリアファイルを差し上げます。※品切れの場合はご容赦ください

2014.9.28

本日はご来場ありがとうございました。今後の企画のためにご協力をお願いします。

Q1. 本日の「京都大学アカデミックデイ」は、総合的にみて満足できましたか？

最も近いものを1つだけお答えください。

- ① 満足できた ② どちらともいえない ③ 満足できなかった

Q2. 来年の「京都大学アカデミックデイ」に、また来たいと思いますか？

最も近いものを1つだけお答えください。

- ① そう思う ② どちらともいえない ③ そう思わない

Q3. 本日の「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話」と「研究者と立ち話」の中で、あなたが良かったと思うのはどの出展ですか？もしその出展になにか「賞」をプレゼントするなら、どんな名前の賞にしますか？

例：「ワクワクしたで賞」、「ばくの話をよく聞いてくれたで賞」、「研究のウラ話を赤裸々に話してくれたで賞」、「これから研究をがんばってほしいで賞」など

出展番号(出展番号はパンフレットを参照)

賞の名前

賞

賞

賞

Q4. 「京都大学アカデミックデイ」の、良かった点・悪かった点をおしえてください。

良かった点

悪かった点

ご協力、ありがとうございました。





国民との科学・技術対話
Kyoto University

京都大学アカデミックデイ
みんなで対話する京都大学の日

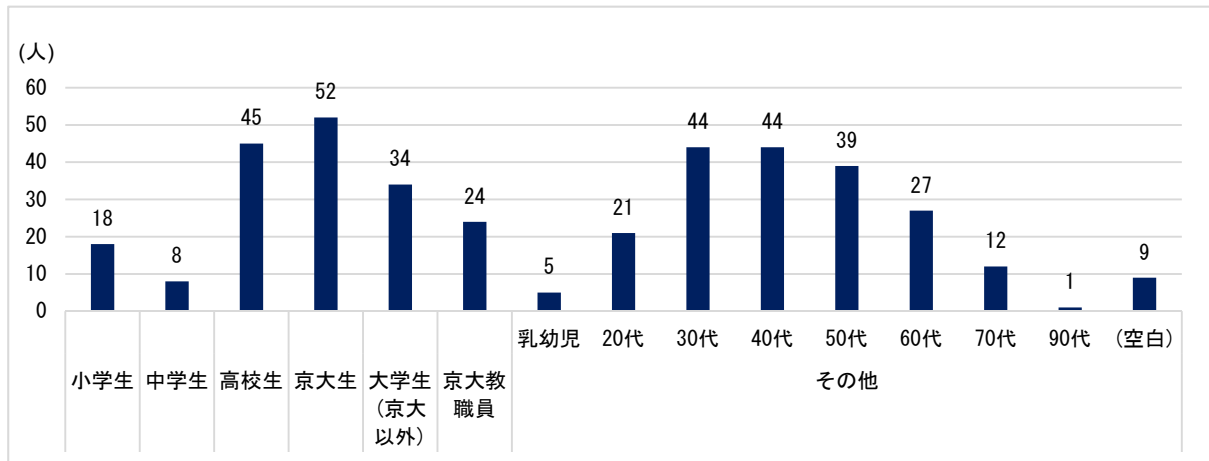
■ 3-1-2. 「ドリンクと交換アンケート」の結果

来場者 487 人

回答者数 383 人（回収率 79%）

● 来場者はどのような方だったのか？

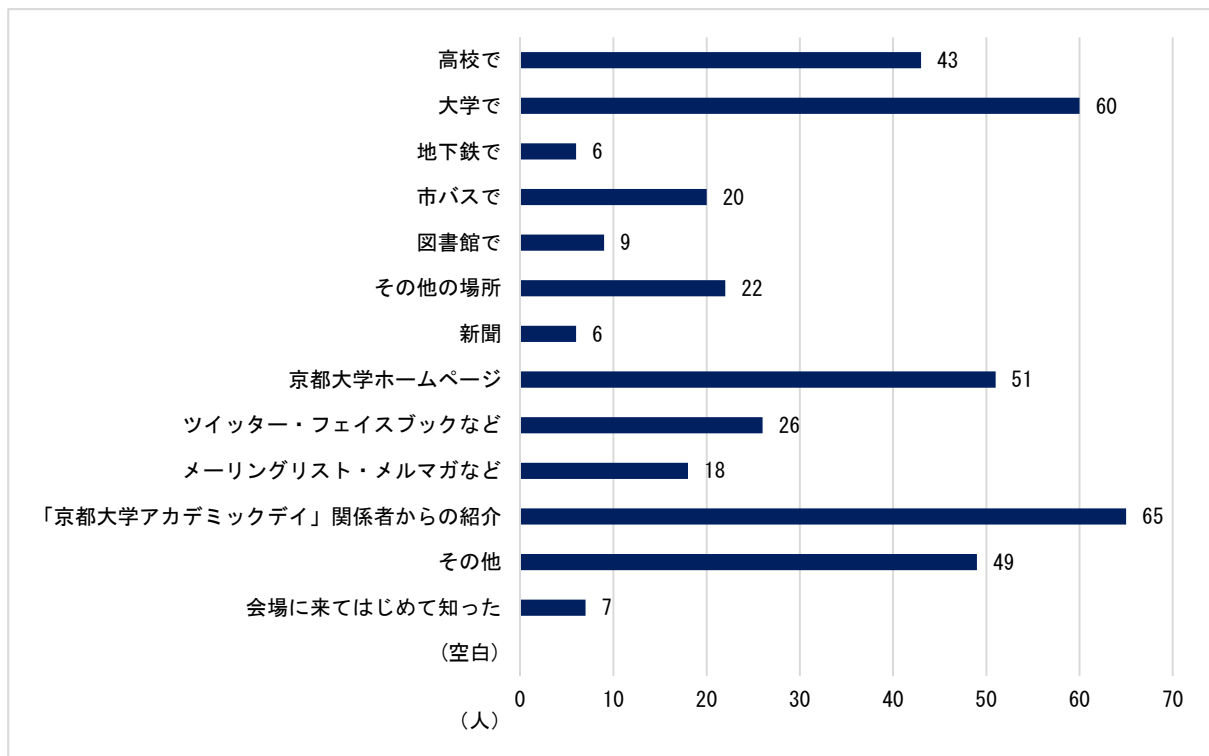
・年齢層



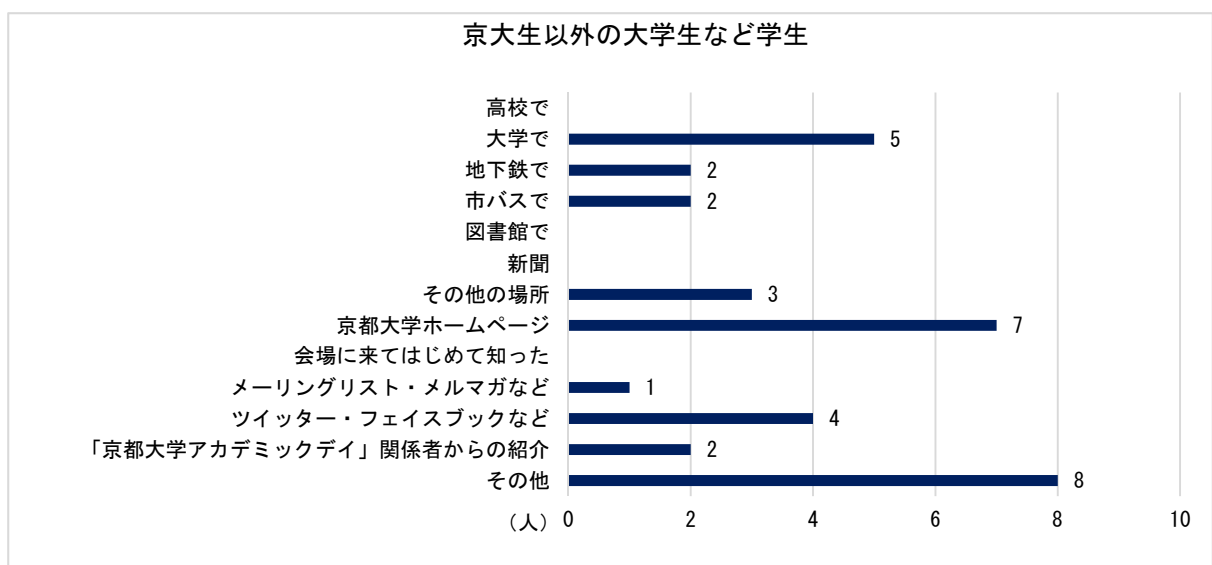
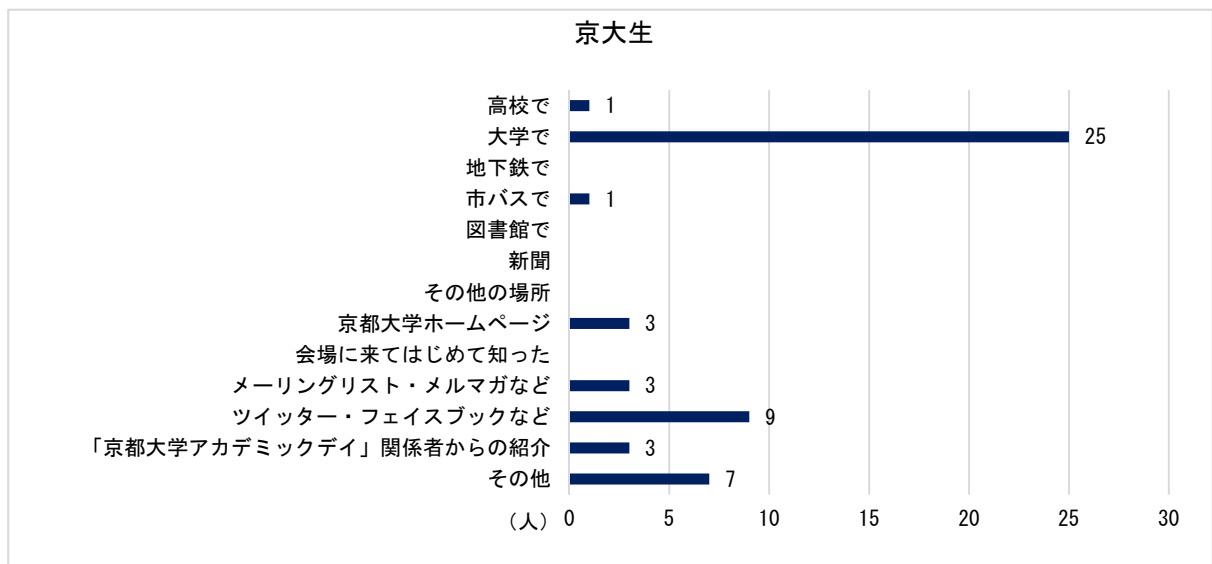
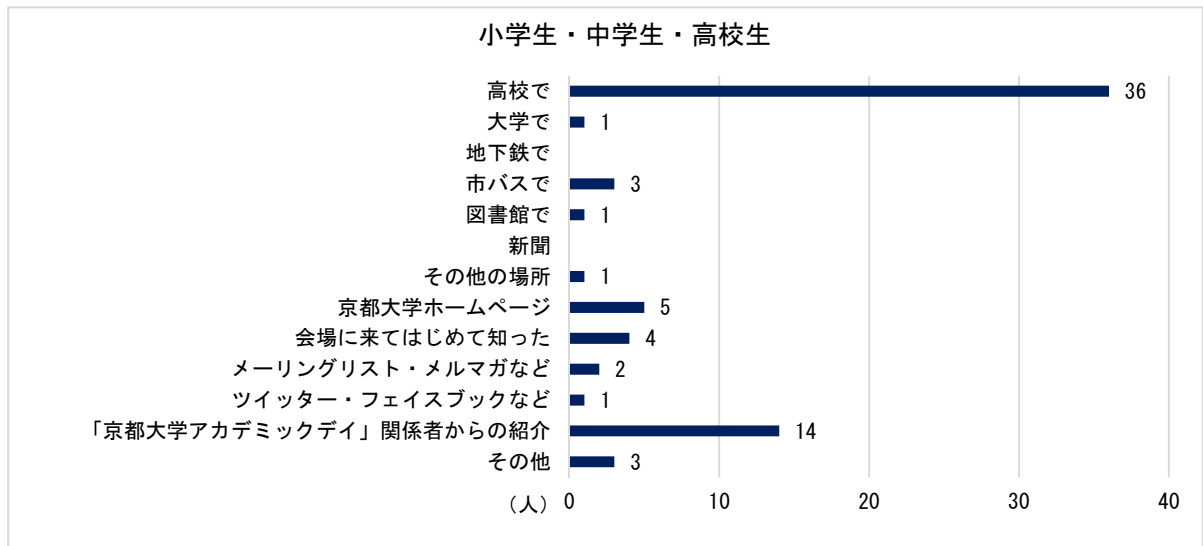
● 来場者は「京都大学アカデミックデイ」をどこで知ったのか？

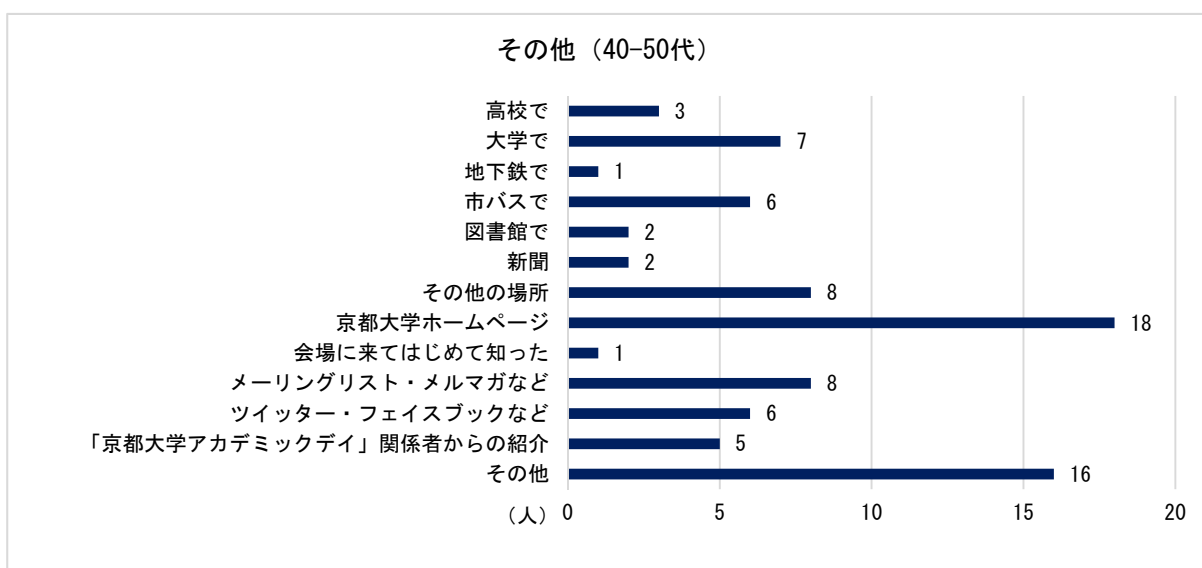
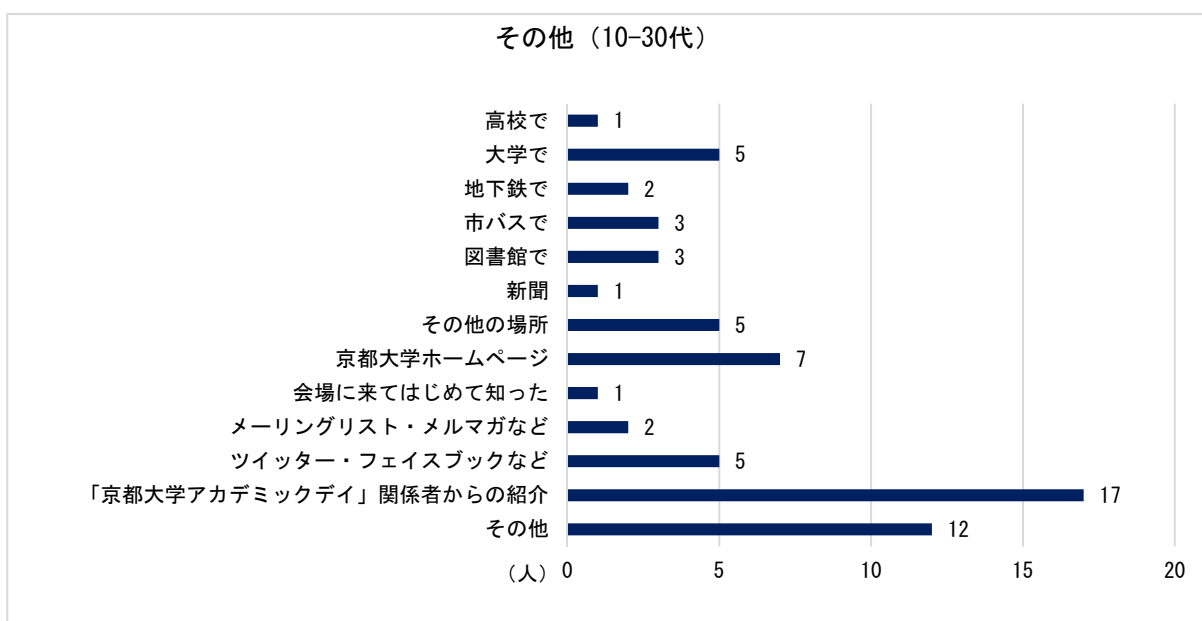
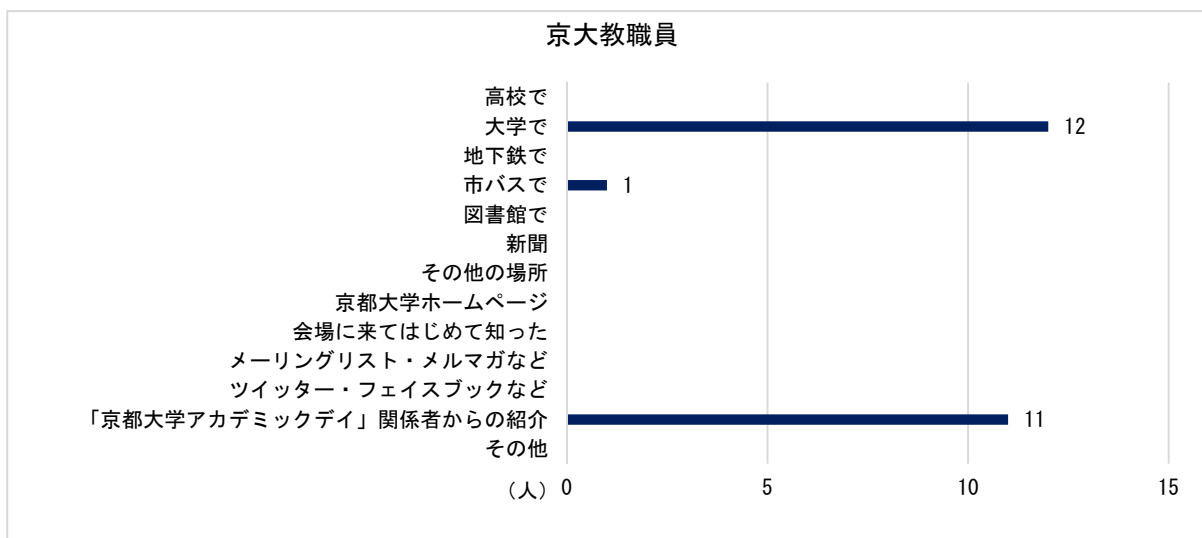
・「京都大学アカデミックデイ」の開催を最初に知ったところ

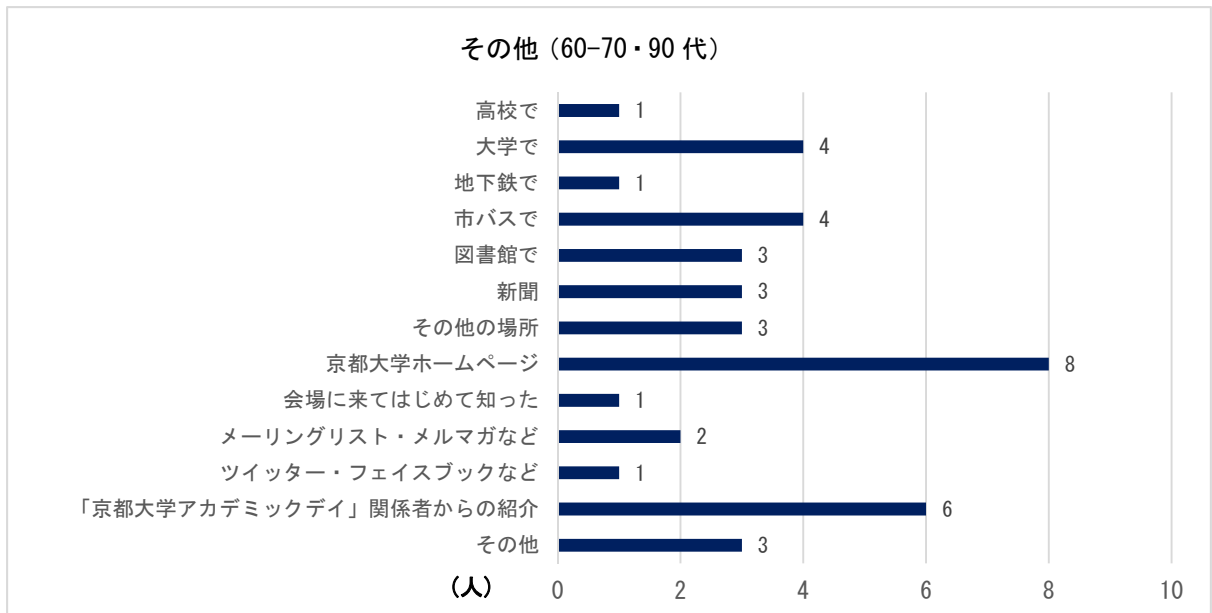
【全体】



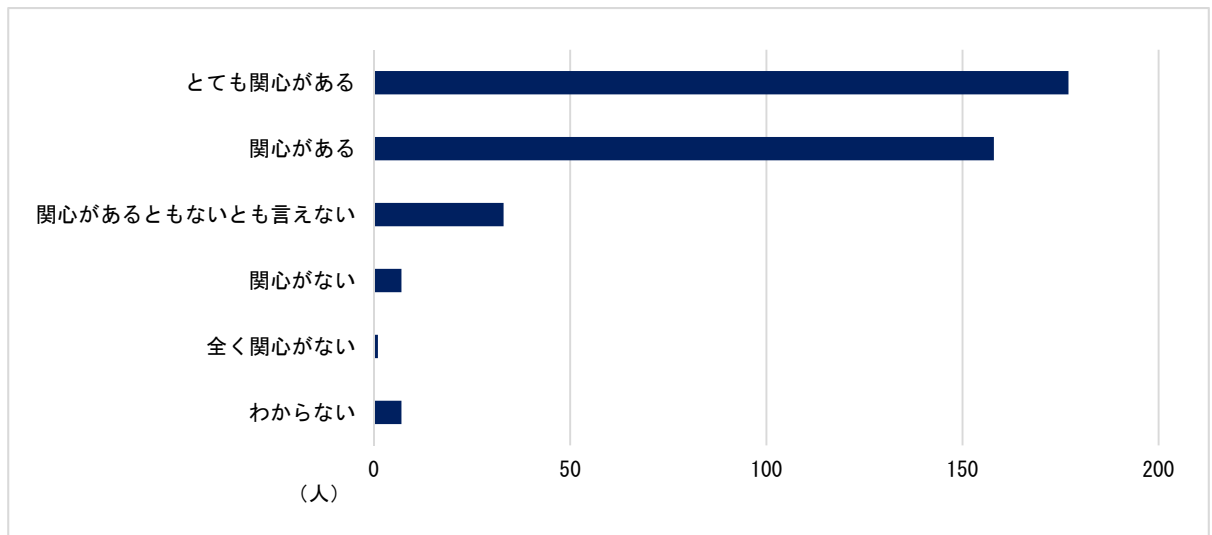
【職種別】



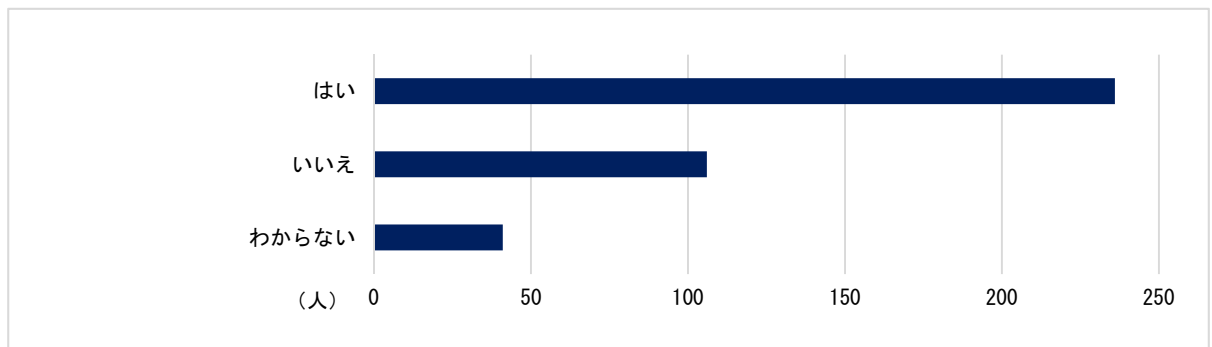




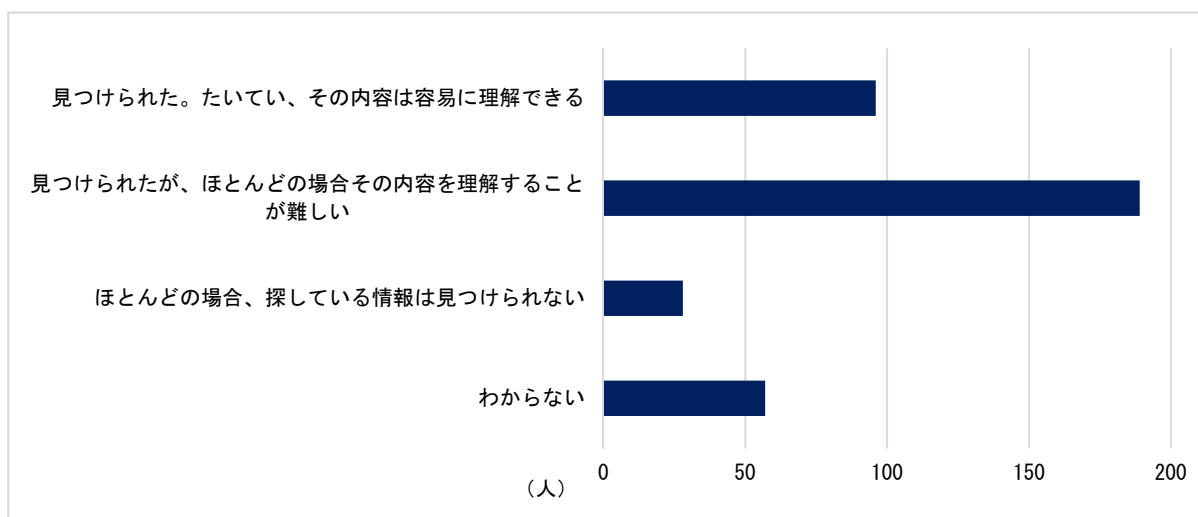
● 科学・技術に関心がありますか



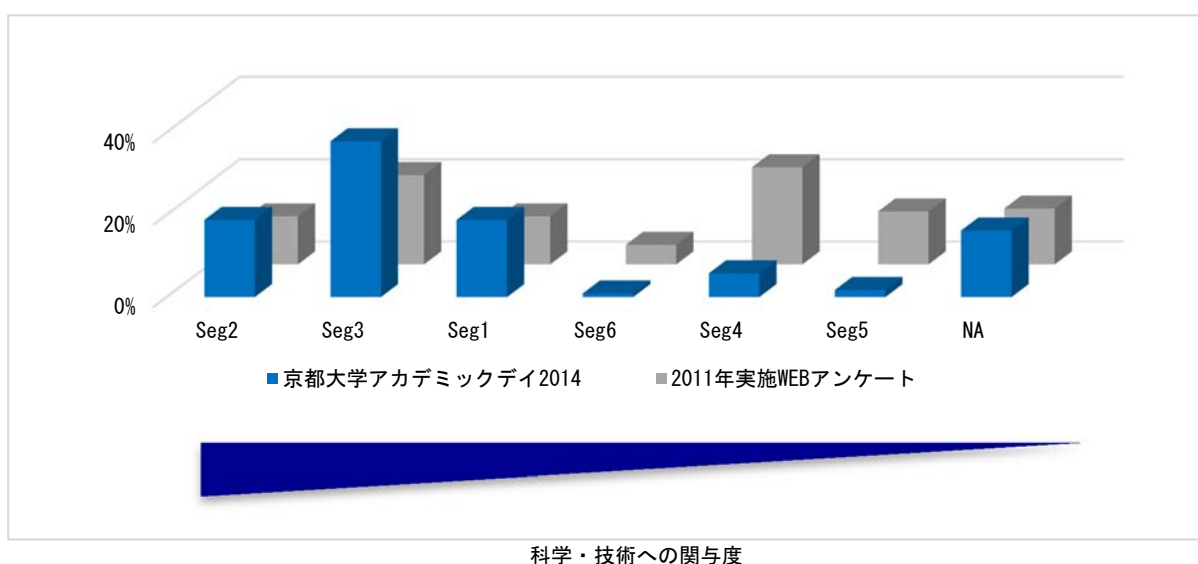
● 科学・技術に関する情報を積極的に調べることはありますか？



● 科学・技術に関する情報を調べた際に、探している情報を見つけることができましたか？



● 過去、科学・技術にかんする情報を調べた際に、探している情報を見つけることができましたか？
・ 科学への関与度別セグメント（2014 年）



● 分類表（回答パターンによる分類）

京都大学ブースにどのような方が訪れたのかを把握するために、オーストラリアで実施された調査に基づいて、Q8 から Q10 の3つの質問をアンケートに組み込みました（アンケート用紙参照）。それぞれの質問への回答パターンによって、来場者を6タイプ（セグメント）に分けることができます。

Q8. 関心がありますか？	Q9. 調べますか？	Q10. 見つけられましたか？	セグメント
1 or 2	1	1	2
1 or 2	1	2 or 3	3
1 or 2	2	–	1
3 or 4 or 5	1	–	6
3	2	–	4
4 or 5	2	–	5
セグメント1: Interested in science but not active in searching for science information. セグメント2: Interested in science, active in searching for science information and able to find information that they can easily understand. セグメント3: Interested in science, active in searching for science information but either unable to find it or when they do find it have difficulty understanding it. セグメント4: Neutral towards science and not actively searching for science information. セグメント5: Disinterested in science and not actively searching for science information. セグメント6: Neutral or disinterested towards science but active in searching for science information.			

参考文献

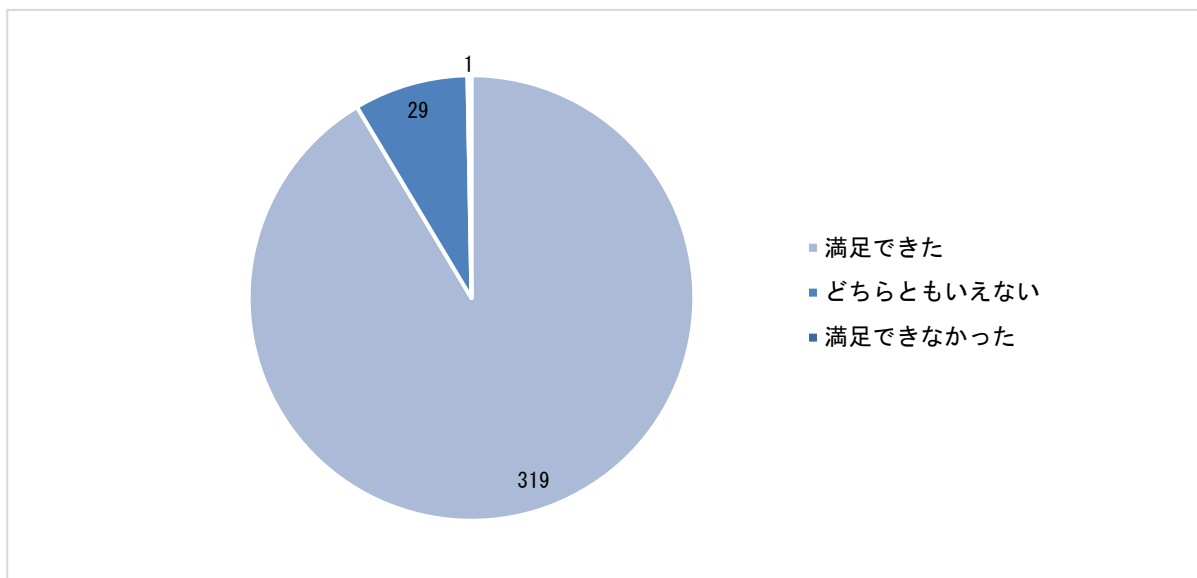
Community Interest and Engagement with Science and Technology in Victoria Research Report - June 2007.

■ 3-1-3. 「記念品と交換アンケート」の結果

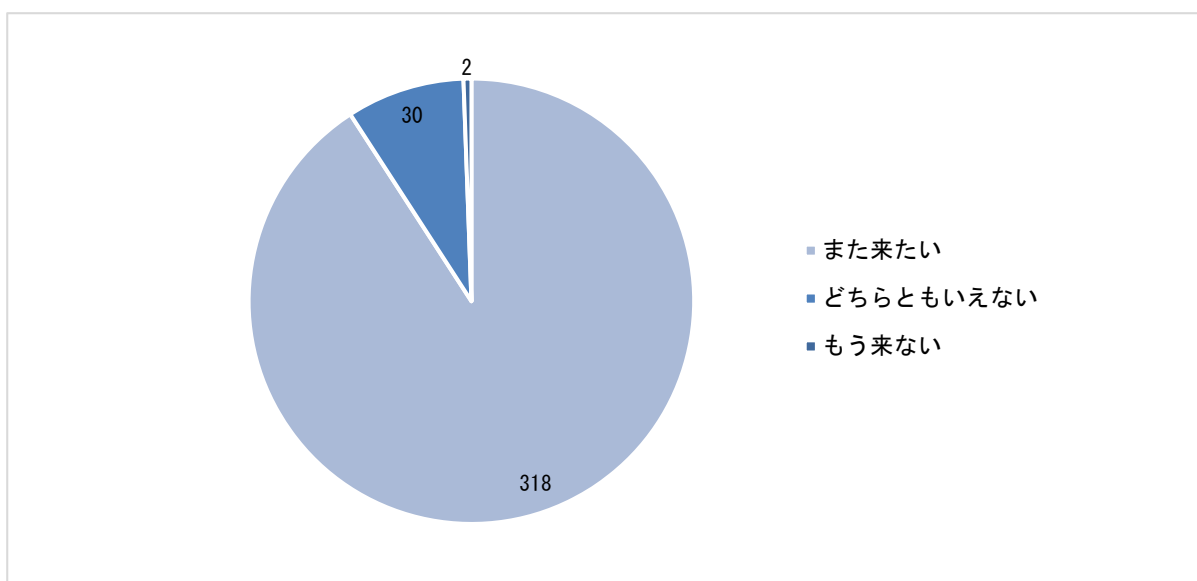
来場者 487 人

回答者数 350 人（回収率 72%）

● 今日の「京都大学アカデミックデイ」は、総合的にみて満足できましたか？



● 来年の「京都大学アカデミックデイ」に、また来たいと思いますか？



- 「京都大学アカデミックデイ」の、良かった点・悪かった点をおしえてください。

〈良かった点〉

- 話の内容が充実していて良かった（中学生）
- いろいろあり、高校生などの発表もありよかった（中学生）
- くわしく教えてくれた（中学生）
- いろいろな人のいろいろな話を一度に聞くことができ、とても良かった（高校生）
- くわしく説明してくれてたのしかった（高校生）
- 積極的に話しかけてくれて、こちらの話も真剣に聞いてくれてとても落ちついた気持ちでいられた（高校生）
- 自分の意見を伝えられる（高校生）
- 研究してる人たちが、「立ち話」ですごく丁寧に説明してくださったこと。話をするのはとても楽しかったです（高校生）
- 質問をしやすかった。自由にディスカッションしやすかった（京大生）
- 研究者との距離が近く、1対1で話をするのができた。（京大生）
- 前日にこのイベントのことを知ったが普段は話すことのできない多くの研究者の方々と会話することができ、とても楽しかった（京大生）
- いろいろなコーナーを自由気ままに回れるところ。こちらの立場によりそうように話をして下さる姿勢（大学生：京大外）
- 色々な分野の研究のことが知れてとても面白かった。又、興味をそそる話を1：1や少人数でして下さって質問しやすかったです。一対一での対話ができ（大学生：京大外）
- 様々なジャンルがあるので、興味をもてる話題がいくつかあった。物をみてみせてくれるのがよかった（20代）
- 日ごろ、接することがない技術に触れることができた（20代）
- 皆さん丁寧に声をかけて下さって話しやすかったです（30代）
- 話を聞いて深いところまで教えてくれて良かった（30代）
- 先生も参加者もたのしそうです（40代）
- 京都大学の先生方の研究の今が見れて良かったと思います。来て良かったです。もう少し文系の先生の研究を知りたかったです。ありがとうございました（40代）
- 最先端研究をわかりやすく解説してくれるのが好感が持てた（40代）
- いろいろなことが身近なものに感じた（50代）
- 多様な内容のプレゼンがあり、大いに刺激を受けた（50代）
- 専門の研究者から話をきくことができた。聞く者の基礎知識によって深度が違うのは良くもあり悪くもあり。しかし時間的なことを考えると仕方がない（50代）
- とても知的です。そして、とてもわかりやすいです（60代）
- 今、どのような研究テーマがメインになっているのか良く分かる（60代）
- 研究者と身近に接せられたこと（不明）

〈悪かった点〉

- 聞き出すタイミングをつかめない（高校生）
- たくさんありすぎて迷ったところ（高校生）
- ネットで、サイトが探しにくかった（高校生）
- ちゃぶ台のところに行きにくかった（高校生）
- 人が多かったので十分に話を聞けなかったブースがあったので少しもったいなかったです（京大生）

- 休憩中でいなくてもパネルだけでだいたい内容わかるようにしてほしい（京大生）
- 2階へ上がる階段の案内を1階エントランスに置くべき（京大生）
- 農林水産・土木工学の分野のブースがもっとほしいです（京大生）
- 受付にブースのパンフレット等を入れるための袋をおいて下さると助かります（大学生：京大外）
- もう少し文系の研究も増やしてほしいです（大学生：京大外）
- 悪かったというよりも、希望ですが数学関連の発が、来年はあれば嬉しいなと思います（大学生：京大外）
- 短い。2日くらいやってほしい。研究者との対話は面白い（大学生：京大外）
- 経済系も欲しい（20代）
- たまに、ボードに貼ってある資料が長文のため読みにくかった。（プレゼンと同じように、見やすさを重視するといいかもしれない）（20代）
- 1つ1つのスペースが狭かった（30代）
- 話を聞こうとするとかなり接近しないと聞きとりづらいことがある。単日開催では話を聞きに行くには時間が足りない（40代）
- パンフレットが置いていないブースがあるので、パンフレットがあるブースを増やしてほしい（40代）
- 前情報が無く来ました。つまり、広報力が弱かったのかなと思いました（40代）
- 歴史系のブースがほしかった（50代）
- バリアフリーの点も考えて頂きたいです（50代）
- 記念館に入る入口で案内の看板かポスターがほしかったです。ここでいいのーと思いました。（初めてだったので）（50代）
- 時間が不足したのは展示物が多かったので止むを得ませんが（60代）
- 研究の良し悪しをもっと一般的に（広めなくてもよいが）いる人々の目で Check をうけると、より研究は前進する（60代）
- 座って聞きたかった（70代）

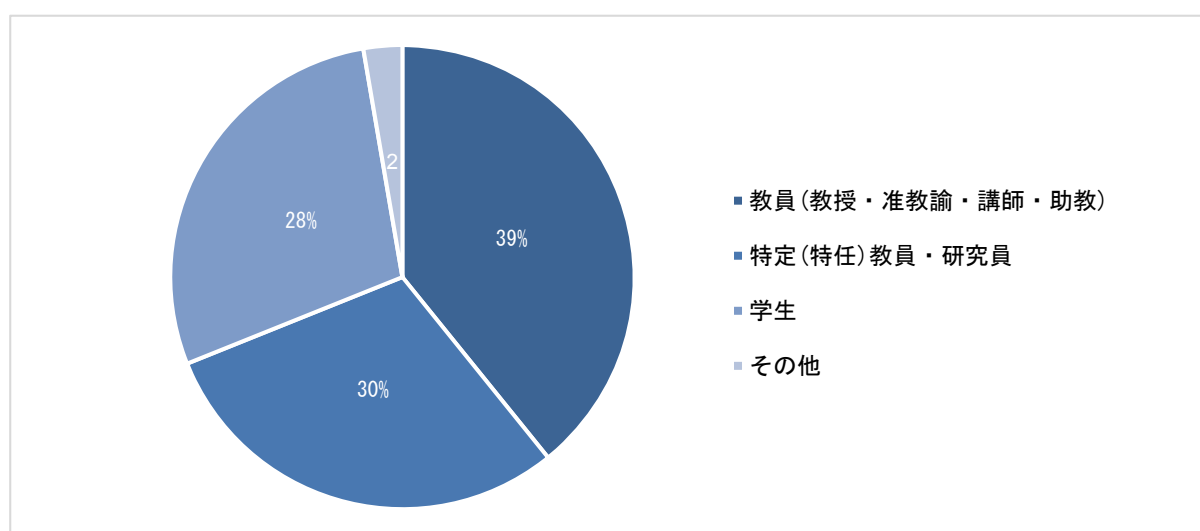
3-2. 出展者アンケート

■ 3-2-1. アンケートの設計とねらい

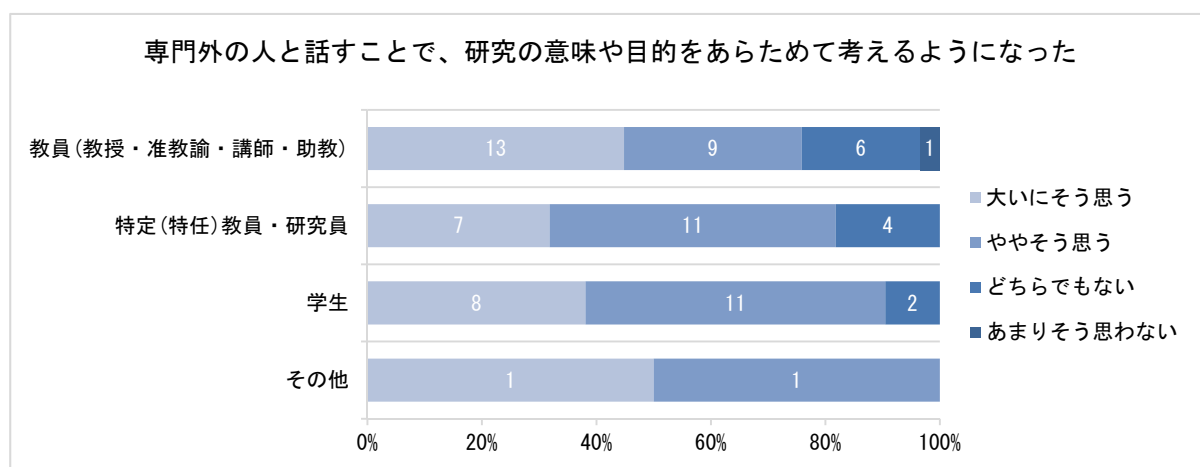
「京都大学アカデミックデイ」では、京都大学の出展者のみなさまに開催後 Web によるアンケートにご協力いただきました。「京都大学アカデミックデイ」に参加した感想、印象に残ったことをご記入いただきました。また、今後の開催にあたってのご意見・ご提案や、研究者による広報活動の本学での支援についての意見・ご提案もご記入いただきました。

● 回答者の属性

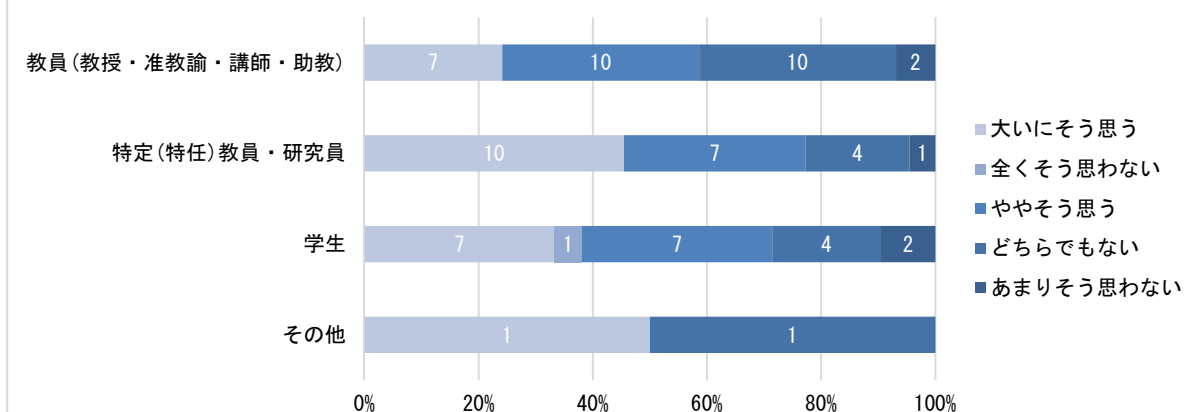
参加研究者 224 名
回答者数 74 名（回収率 約 33%）



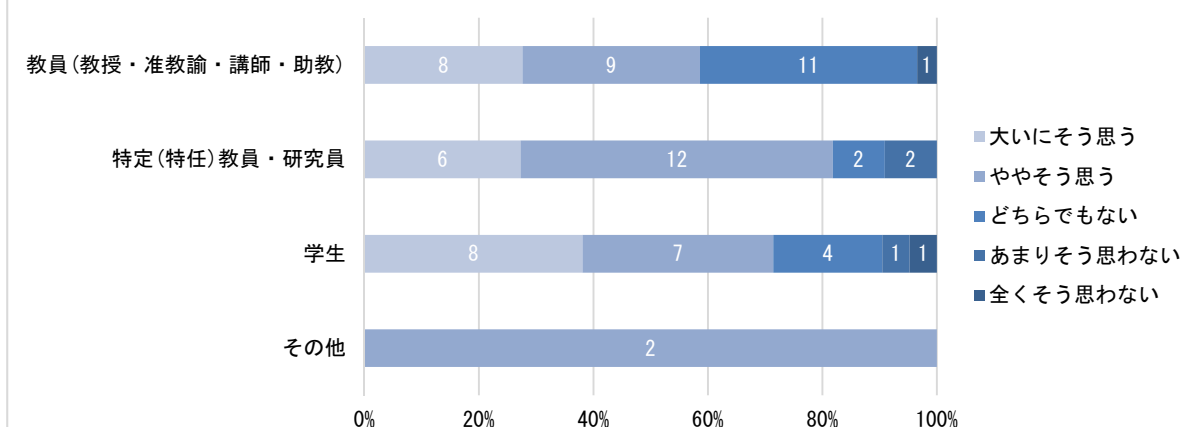
● 「京都大学アカデミックデイ」に参加した感想



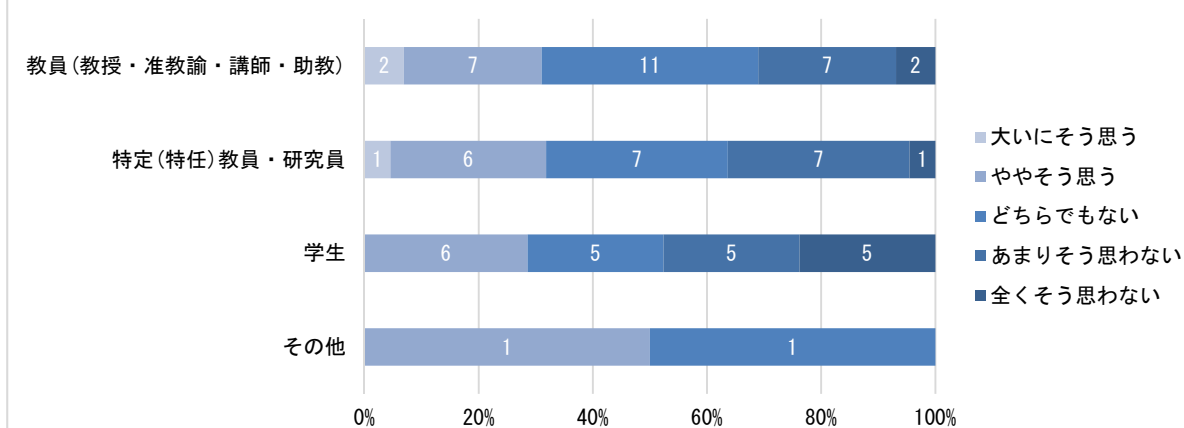
自分の研究と人々の生活との関わりを意識するようになった

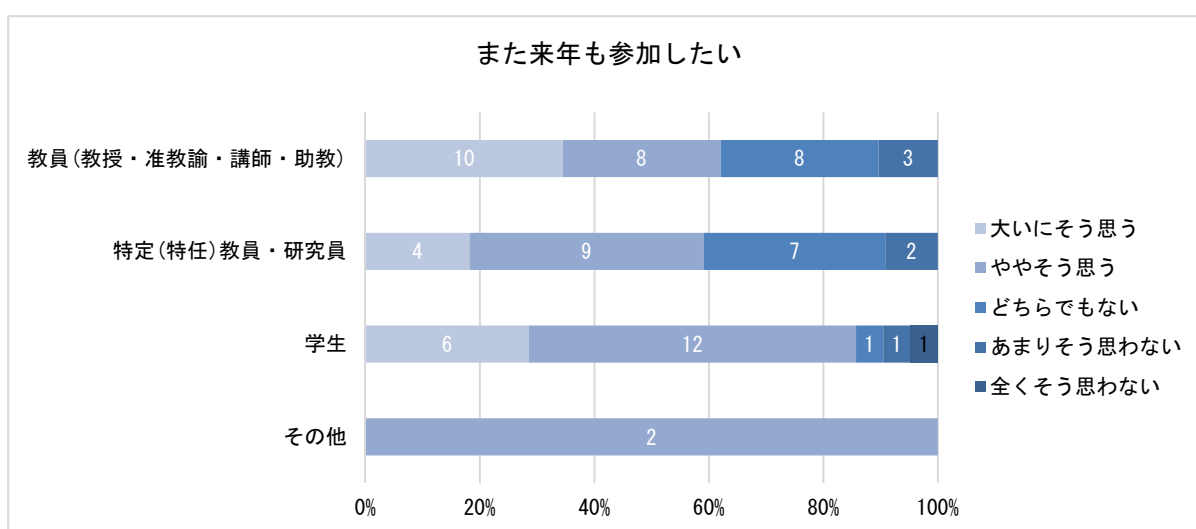
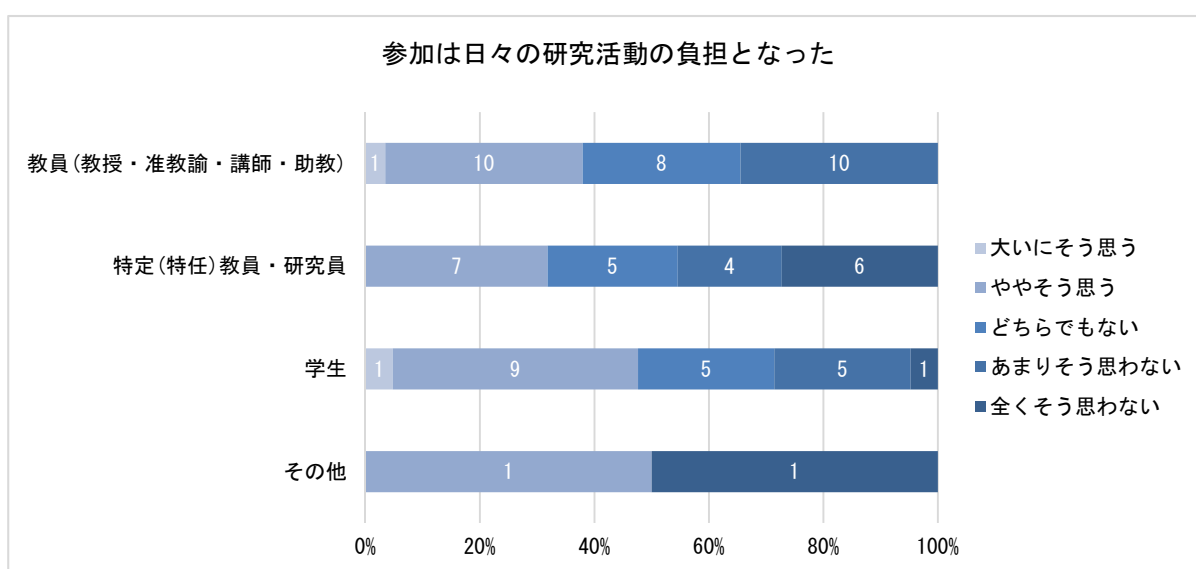
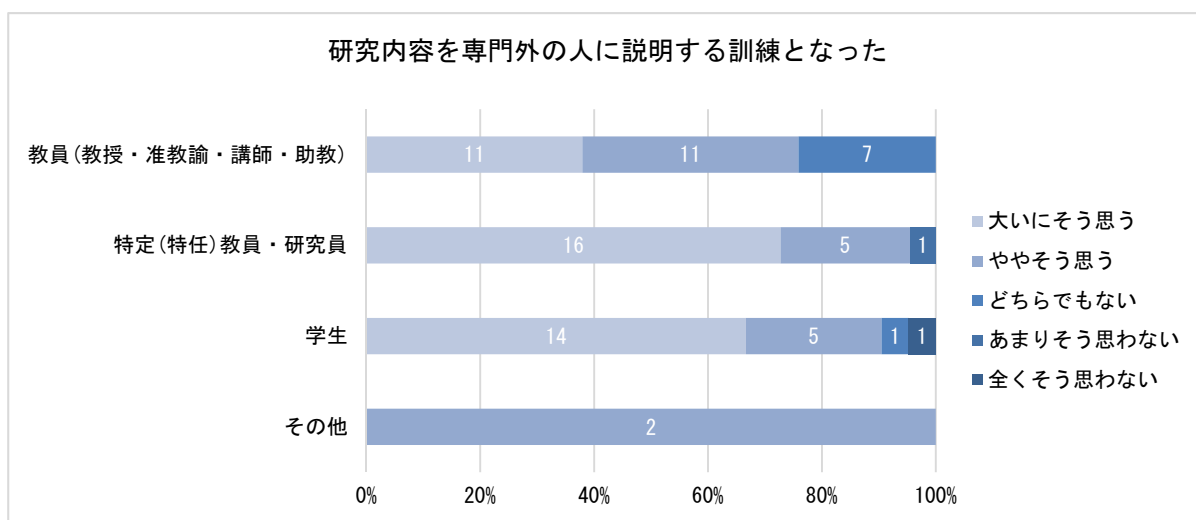


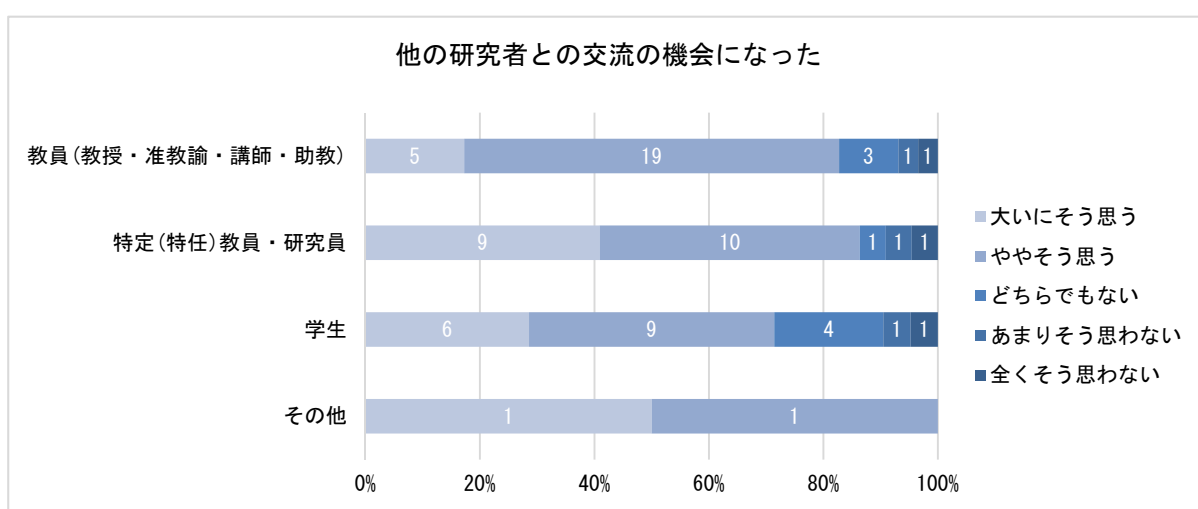
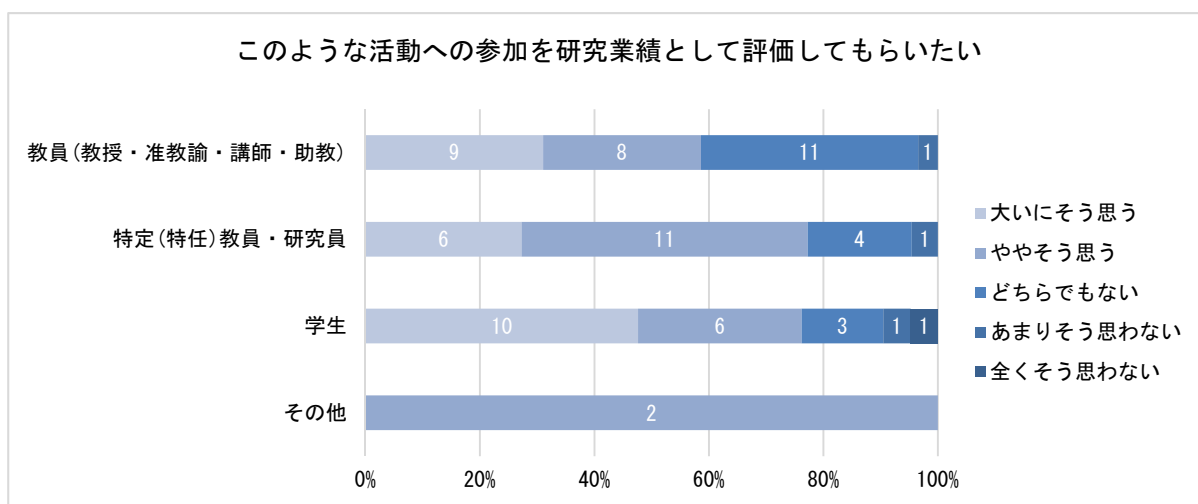
自分の研究に対する説明責任の重要性に気付いた



他の研究グループから、今後の研究方針に関する示唆を得ることができた







● 来場者との対話でどのようなことが特に印象に残りましたか？

〈京都大学研究者の声〉

来場者に対して

- 研究の進展に対する期待度が高いこと
- 研究内容を理解したいというよりも、やはり、自分の健康や、生活に密着する視点が多かったと感じます
- 当然のことだけれども、それぞれに関心が異なる
- 発表内容そのものではなく所属部局名に関心を持って「どのような研究をしているのか」と問われたこと。また、少数ながら、来場者の中には自分の知識や見解を「大学教授」に対してぶつけてみたいと考えている人もいるということ
- 食に関する期待度が高いこと
- 素直に感心してくださる人が多くて嬉しかったです
- 我々の研究価値が関連事業者にとって、たとえば金額としてどれくらいの価値があるかを議論することができた
- 高校生が興味をもったこと

- 来場者の方が自論を展開されて、こちら思わず本気モードで議論になったことが非常に楽しかったです
- 事前に教室の取り組みについて調べてからご来場くださった方が、数名ですがいらっしゃいました
- 意外と一般の方が専門的な研究に興味を持っていること。これから研究者になろうとしている人が、研究とはどういうものなのか？のヒントを得に来ていること
- 小学生くらいの子どもが、実験の体験（乳鉢で粉をすり潰す）を非常に楽しそうにやっていたこと。少しでも理科に興味を持ってもらえたらうれしい
- 参加者が幅広い年齢層であった

対話から感じたこと

- 一般人に研究内容を説明するのが難しかった
- とても深い部分までつっこんでこられる方がおられる。日常の話はもりあがる。予想以上に予備知識が豊富
- STAP 細胞の話をする来場者もあり、研究者に対する批判の目が高まっていると感じました
- 自身の研究の細かな話ではなく、社会全体の中でどのようにそれを活かすか？またその求められる技術は？といったことを議論することができた。研究者の多くが自身の研究“だけで”世の中をよくできると考えがちだが、私自身、アカデミアは中立的な立場で科学技術を市民に発信するべきと考えているので、今回は自身の技術の長所短所と他の競合技術をありのまま説明し、来場者の方が今後考えるきっかけになればと考えそのように準備した。実際そういう話ができよかった
- 来場者にとっての利益より、自分たち研究者が励まされたり、自分の研究の意義や社会における位置づけを再認識することのほうが大きな利益なのではと感じるほど、大変よい機会になりました
- 研究の将来的な進行方向に関する質問が多かった
- 研究内容の説明の難しさ
- 古文書を趣味として読んでいる方が、いっしょにできることはないかと声をかけてくださった。古文書を読む会に参加したい申し出てくれた学生さんがいた。以上は、研究を紹介することのほかに期待していたことだったので、狙いどおりでした
- 東日本大震災など、過去のご自分の経験を話してくださり、それを聞くことができた。少しは対話になったのかもしれませんが
- 話をした高校生が、「けっこうおもしろい」と評価してくれ、友だちを連れてきてくれた
- 多くの場合、ひとりずつ順番に話をするような形態になり、来場者の方が順番待ちのようになってしまったのは残念でした。こちらの力量不足でしょうか。
- ネットやTVで聞いた情報は本当ですか？みたいな質問がかなりあった。大学のイベントはそうした日常の小さな疑問、質問に答えられるよい機会だと思いました
- 一般の来場者には、研究の話よりも、ノーベル賞受賞者のトリビアの方が、受けが良いように感じた
- 「研究＝世の中に立つこと」と考えている方が予想していたよりも多かった。中高年の方ほどそのような傾向が強かったと感じました。「図鑑の記載を増やすような（すぐに役には立たない）基礎研究」という説明には、中高生など若い層が一番関心を示してくれたと感じました
- 自分達が考えていることとは、全く異なる観点からの質問が出てくることが多いのが印象的でした
- 親子連れの方が多く、話をメインで聞いてくださる方は親御さんのほうなのですが、子供がこちらに興味をもってくれずにそわそわしていると親御さんのほうもこちらの発表をなかなかじっくり聞いてくださるだけの余裕が作れないので、子供をどうやってひきつけるかがブース作りの重要な点だと感じました
- 説明にくらいついでずーっと質問される方々がおられ、一般の方々の科学への関心の高さが印象に残りました。また、幼稚園ぐらいの子供さんたちも展示物（トマトなど）を触って、持参した絵本（トマト

の)と見比べたりしていました。こんなきっかけで、こんな小さな子供たちが、将来、科学者になるのかもしれない、と思ったりしました

- 「ベニクラゲのふつうの繁殖で増える子供数と若返る数とどちらが多いか」という難問など
- 子供（小学校低学年以下）との対話が非常に難しい
- 一般の方にとっては、高校の化学くらいの内容でも専門的に感じるようだ、ということを実感した
- 幼稚園児・小学3年生に説明をしようとしたとき、彼らがどの程度の知識を持っているか推測もできなかったこと。しかし、将来の科学者勧誘という意味ではこういう小さいときに憧れを与えられると大きいんだと思います
- このような機会に参加する来場者は意識の高い人が多いと感じた
- 来場者は、一般人の中でも特に研究に対する興味や知識を持っていて、驚いた
- わずかな情報しか示していないにも関わらず、鋭い質問やコメントがいくつかあった。とくに、高校生から自分の今後の研究に関わる質問があったことが印象的だった。それとは逆に、こちらにとっては当然であることを聴衆が知らないことも多かったので、今後、発表するさいに参考にしたい
- 来場者自身に話したいこと、伝えたいことがあり、研究者のパネルは来場者が自分自身の意見を話し出す一つのきっかけとして活用されているのが印象的だった
- 胎生魚は普段なかなか目にすることがないうえ、哺乳類と似たしくみで稚魚を育てているのがおもしろいといっていたことが印象に残った
- 研究のモチベーション上昇につながった

必要だと感じたこと

- ポスター以外の小道具（模型のようなもの）が、非常に役立った。来年はさらに小道具を充実させ、わかりやすい説明を心がけたい
- 身近なもの、最近話題になったトピックと絡めた導入用の説明
- 展示物（実際には、生薬、薬用植物等の現物）
- 実験のデモ
- 子供向けのクイズ
- 自分が普段使っている実験器具
- 自分の研究のポイントを単純に表すゲーム
- 今回、光の性質を説明するための「おもちゃ」を用意したが、一般の方に説明する際、予想どおり大変役にたった
- 一般の方向けの簡単なパンフレットを用意しておけば良かったと思いました
- パソコンのモニターで動画などを見せること。対話の最中に見せるのにも役立つが、一時的に席を外しているときもパソコンが動画を見せていると愛想がある
- ポスター展示と違って、ちゃぶ台は聞き手大勢の方との対話だと考えていて、会話のネタになる材料(模型、実物、本、数値データ)を多く机上に準備し、それが良かった。決してこちらの一方通行になるようにはせず、聴講者の方のご意見を引き出すように努めた。その専門のプロ（企業の方）も聞きに来られ、こちらが勉強になることもあった
- ポスターを印刷したものは声かけするとき、複数名に対して説明するとき、活動の情報提供サイトを伝えるといった面で役立ちました
- 研究対象の一部でも現物を展示することで、来訪者との問題意識の共通化がとれる
- 興味のきっかけになりそうなものがもっとあってもよかったかもしれないと感じた

- アメリカでこのような活動をしていた時から、宇宙の発表を聞きに来られる方の多くが、最先端の研究結果だけでなく、普段感じている宇宙の疑問を解決するために来場されていると感じていたので、コンテンツの3分の2を最先端ではない一般的な内容のポスターを作製しました
- 史料（古文書）の実物。実物はやはりウケがよい。また、人数が多くなったときのためのコピーを用意しておいたのも役にたった。
- コンピュータシミュレーションが専門なので、来場者が触れて楽しめる小物（？）がなく、非常に困っていたが、50年以上前の手回し計算機を持参したところ、思いの外、受けが良かった
- 現在使っているものでなくても、何かしら、触れられるものを用意することは、とても大切だと思った
- ポスター内容は全年齢層向け（小学生～大人）を意識してイラスト付きの簡単な解説で作りました
- 専門的過ぎる内容をポスターに書くと理解できない人が置いてきぼりになるので、スライド形式でiPadに入れておいて必要や要求に応じて提示しました
- 未就学児の興味を引くよう（親御さんへの説明の間、いい子にしてもらえよう）に、魚の現物展示と、チロルチョコを用意しました
- 実感できるデモ課題を準備したことが、研究内容の紹介に非常に役立ちました
- 研究室の取り組みや研究についてまとめたパンフレットのようなものがあると、お話をする際の資料になり、そのまま持ち帰っていただける。お話ができなかった方に対しても資料だけはお渡しできるので、準備しておくの良いのではないかと思います
- iPadによる説明動画や写真
- 展示物（トマトなど）を準備しておいたことが役に立ちました。写真よりも実物があつたほうが来場者に説明しやすいと思いました。やはり、文章や図、写真だけでは、限界があるように思いました。学会でのポスター発表とは大きく異なると実感しました
- 標本（ベニクラゲは生きていないが。。。）
- ビデオを作成したのは正解だった
- ずっと話しては体がもたないし、聞いている方も、説明を聞いているだけでなく、実際の作業を映像で見ることができるのは良いことだろうと感じた。音量が小さかったのが反省点である
- ふだん基礎研究を行っているが、このような場面ではその基礎研究が実ったときに形（製品）となる「もの」を見せられればよかったと思う
- 工学系の場合、話して聞かせるより実物のデバイスを目の前で動かした方が理解度も高く印象に残りやすい
- 文字を大きく、少なくするように心がけたつもりだったが、文字はもっと少なくする必要があると感じた
- 一般来場者には、初心者向けポスターを用い、京大関係者（？）には、詳しい内容のポスターを用いるというように分けることができたので、話をしやすかった

研究者間の交流で感じたこと

- 文系理系を問わずに幅広い研究者が生き生きと展示をしている様子を見て、自分の研究の原典を見直す機会になるとともに、改めて頑張ろうという気になれた
- 普段交流しない研究者の研究内容を聞くことができ、よい刺激になった
- 研究者の人との対話で、いろいろ研究上のつながりがあると感じました
- 異分野の研究者と交流を深められた
- 小生もトマトとキノコに興味をもって説明と写真をとらせてもらった
- 「今の大学：学問論、大学論、政策哲学」の掲示は深い納得がありました。盲目的に情報公開を是とせず、その意味を考えることこそ学者の在り方のように思いました。また、御影高校のキノコの展示は、今の研究者が政策の影響で見向きしにくくなった、「個々では大した意味を持たないように見える（興味

本位に過ぎない)内容を、多次元で編みあげて(この場合は採取数と継続年数)意味を見出す」という厚みある考究の良いお手本に思いました。これらを含め、何か自分の研究の役に立つ話が出来れば良いな、という了見で参加した自分の狭量を思い知った次第です

● 今後「京都大学アカデミックデイ」開催にあつたてのご意見・ご提案

〈京都大学研究者の声〉

良かった点

- こういう機会があったということは、大型研究費において要求されているアウトリーチ活動に対応できるという点でよかったです
- 普段交流しない研究者の研究内容を聞くことができ、よい刺激になった
- いろいろな年齢層の来場者から様々な視点からの質問をうけることができ、参考になった
- 普段接することのないいろんな話が聞けた
- 評価コンクールはプレゼンのあり方を知るうえで重要である。今回、カゴメさんがTopを取られたのは、企業人はどうしたら顧客に受けるかを知っているからである
- 自分の研究が市民の期待を背負っていると認識することができた
- 休み無しの6時間で非常に充実していたのが良かったです
- 社会（一般の方）との接点をつくってくださったこと
- 事前の説明会（見出しに数字を入れたこと、ポスターの文字を大きくしたこと）およびコミュニケーションのトレーニング
- 中高生、大人、年寄り、また男女のそれぞれの問題意識や感覚的なものの違いを肌で感じとれたことがとても良かったです。結構話したのでペットボトルの水は助かりました。URAの人が聞きにきてくれて、一般人（お客さん）として科学について話ができただけのもとても良かったです。普通の大学事務の人も、業務でなく話せると、非常に距離感が減ってよいと思いました。また、このイベントは文系理系問わずなので、そういう点でもお互いが話せて分野間の距離感がつかめるのはよいと思いました
- 一般の方との交流が深められたこと。異分野の研究者と交流を深められたこと
- 一般の人に対する研究内容の説明責任を果たす機会をあたえてもらえたことは大変よかった。一から自分でこれを企画するのは大変である。ただ、それでもエネルギーはかなり使うので毎年参加するということはないと思う
- いろんな若い方々が見に来てくれたこと（もちろん、お年寄りも少々。。。）
- 自分たちの研究について少しでも関心を持ってもらえた
- 他分野の研究者や一般の来場者などの、さまざまな人と対話や意見交換ができたこと。とくに高校生との交流は、お互いに刺激を与える点でいい企画だと思う
- 平易な表現を使いながらも研究のエッセンスを伝えるためのヒントを得たこと
- 二枚のポスターにまとめる作業はプロジェクトの全体像を整理する上で役に立った

改善点・課題

- もう少し説明・展示スペースに余裕があったほうがよかった
- 受付が9時開始でしたが、9時まで時計台に入れませんでした。雨で無くてよかったですが、15分前くらいには、あけておいて頂けるとたすかります。もし、9時にしか時計台を空けられないのであれば、9時15分受付開始でもよいようにおもいます

- 9時から16時まで、たちっぱなしで説明にあたるのは、ちょっと難しいです。ありがたいことに来場者もおおいたため、休憩も交替でとりましたが、正直大変つかれました。たとえば、11時から15時くらいでもよいのではないのでしょうか（それでも、準備をいれると10時から16時の6時間）
- ポスターを貼るパネルが固くてピンを刺すのに苦労した
- 別室の企画にも興味深いものがいくつかあったが、お客さんが来てくれたためにポスターの前を離れることができず、別室の企画はほとんど聞けなかったのが残念
- 文系はポスター発表になじまない分野も多いので（ものによっては、パワーポイントによるプレゼンも）、文系の研究者が参加しやすいようなやり方について検討していただければと思います
- 市民との対話を「興味ある人と深く」の姿勢なのか？「大勢と浅く」の姿勢なのか？教えてほしかった。来場者の方と大いに盛り上がり話をしていたが、ちゃぶ台で時間の都合打ち切られることがあり、仕方ないといえども、今後なんとかならないかと思った
- ポスターパネルの高さが少し短かったので、A0がぎりぎり入らなかった。上部のタイトル部分を少し小さくしてもらえればよいと思います
- 余りにも多くの市民を対象にしているのでターゲットを絞り込めるような方法を考えてほしい
- 3位の高校生には特別に賞状をあげてもよかったと思います
- 過去のアカデミックデイの状況はグーグルなどで調べたが、京大としてそれら全てにリンクされたアカデミックデイのページがなくて少し不便でした。4年目だしいろいろと過去のデータもまとめたり、過去の参加者のラボのページなどにリンクさせたり、来場してくれた中学高校などの先生や生徒、または一般の人の意見などをまとめたページを作ったりして公開すると宣伝効果もあり、かつ次回以降の参加者にも便利なページになると思います。URA スタッフの苦労話やうれしかったことなどの運営コメントコーナーもあると、全体的な親密感もあがって、来場者がより増えるのではないかと思います
- 去年と開催時期が変わったので、可能であれば固定してもらった方が参加計画を立て易い
- 学内限定タイムに入っても来場者の方々と話し込んでいたりしてなかなか学内限定タイムを楽しめなかったのもう少し早めに蛍の光を流す、学内限定タイムの時間をもう少し延ばすなどしてほしい
- 午後からスタートでよいのではないかと思います。少々長い
- 展示の代表者だけが、ポスター上部に示されていましたが、展示に関わった先生方、院生などの名前もだしてもいいのではないかと思います
- 今回の私が出来たことは、「不特定多数の一般」向けに、「研究者との共感」を目的として、「エンタテインメントもどき」を提供するに留まりました。対話ができたとはいえ難い状況です
- 年配の来場者もあり、「立ち話」でどれくらいの時間、もつか気になった
- 来場者と研究者がともに座って話ができるような簡単なブース形式にすることはできないか

今後に向けた提案

- 学会での取組みですが、1人3分以内で口頭発表をしたあと、ポスター閲覧するという仕組みをとっています。ポスターが多くなると、実施が難しいかもしれませんが、ある程度の規模であれば、こうしたやり方も、全体像を把握する上で、有効と思われます
- 学内出展者向けに、（開示希望のある人について）代表者とメールアドレスの一覧があると、研究交流を発展させる上でたすかります
- 人文社会系の研究発表が少ない。自然科学系は最先端の研究を発表するのがよいと思うが、人文社会系には最先端の研究を求めるのではなく原論や基礎論を紹介してもらうというのも意義がある気がする
- ちゃぶ台もいいですが、黒板（ホワイトボード）を使ったミニ授業形式（数学の研究者の方も、黒板を好まれるそうですね）のようなものがあったもいいかと思います

- 来場者にも簡単な紹介を記した名札をつけてもらえると、話し始めやすかったと思う。たとえば、属性（大学生（〇〇学部）、主婦）や興味のあること、など
- タイトルが「アカデミック」なら何がアカデミックだったか顧客に評価を頂き表彰するのもよい。人気ではなくサイエンスとしての価値評価に限定したものである
- アウトリーチ活動として申告できるような形を整えてほしい。たとえば参加メンバーの氏名を web にのせるなど。その際、代表者となる教員名だけでなく、院生などのメンバーも。また会場アンケートの上位入賞チームについても、公式に残るものにしてほしい。準備や当日の業務に思いのほかコストがかかるため、それなりの報いが欲しい
- 年齢層を定めた発表等があっても良いと思います
- ポスター展示の内容（PDF あるいは内容を編集したもの）を ウェブで公開して、より多くのひと（京都にいないひと）にみてもらうことはできないでしょうか。説明者がいること自体が重要ともいえますが、コミュニケーションがとれるような工夫もありえると思います。この日のために準備した材料を活用できたらよいと思います。ほかに京都大学を知るためのイベント（オープンキャンパスや講演会など）の紹介。1 年に 1 回のアカデミックデイだけでなく、ほかに何かあれば参加したいと考えておられる方がいました
- 1 展示あたり 1 万円程度で、ポスター印刷や小物の作製に使える予算が頂けると嬉しい
- 年 1 回のアカデミックデイほど大掛かりでなくていいので、例えば「隔月の第〇日曜（年 6 回開催）のように固定した日程で、ポスター出展 10 件程度の小規模アウトリーチイベント」を恒例化すれば地域に根付くいてよいかも
- 託児所や子どもの遊び場があると、家族連れがより来やすいのではないかと思います
- どうしても人気のあるところとないところできてしまうのは、ある程度は仕方ないのですが、風船を持った方が人気の少ない展示にうまく案内していただいてもいいかもしれませんね。（そのようにされていたのかもしれませんが）
- 靴を脱いで畳に上がるのは非常に抵抗がある人が多いのではないかと
- 一般来場者の方にも、職業や身分を示すネームプレートを配布してほしい（医師、薬剤師、理系の研究者など、こちらの研究分野に詳しい方も一般でたくさんいらっしゃったので、初めからそうと分かればこちらも説明しやすい）
- 対話するには今回はブースが狭かったと思います。ちゃぶ台とまでは言いませんが、机・椅子とお菓子と飲み物（しかも各ブースごとに違う＝全部回るモチベーション）を置いておいて、話をする環境を整えた方が「対話」にはなると思います。そのためには出展数を制限した方が良いのではないのでしょうか
- 情報公開の目的を絞って開催すると良いと思います。漠然と「一般」に向けて会を行うより、目的を絞った方が来場者の心に残ると思いますし、展示側も準備をし易いと思います。幼稚園児や小学生を主たる対象として「学問へのあこがれ」を持ってもらうことを目的とする会、中学生や高校生を主たる対象として「学者という将来像」をイメージしてもらうことを目的とする会、いろいろな背景のひとびとを対象に異業種・異文化間の異なるアイディアの交流を目的とした会、などがあるように思います。何度も開催するのが大変ならば、各展示の対象年齢を明確にしても良いかもしれません。
- 「国民との科学・技術対話」というタイトルには抵抗がある。いろいろと説明はあるのかもしれないが、常識的なセンスではとても気になるので、やめた方が良くと思う
- イベント企画は 15 分程度の短いものをもっと用意してもよいのではないかと。長時間の企画だと参加する時間がとれない。短時間の帯企画を複数回やればよいのではと思う
- ポスター展示のコンテストについて、参加研究者による投票の部というのがあってもよいと思う

3-3. 京都大学アカデミックデイ賞

「京都大学アカデミックデイ」では、出展研究者に贈られる「京都大学アカデミックデイ賞」を設けています。賞を設けた理由は、こういった活動に参加し、さらによりよい対話を目指した研究者が評価される（価値をつけられる）仕組みを作ることです。今後、研究活動の一環として「国民との科学・技術対話」活動が普及・定着すること、また活動が研究者にとって負担にならないことを目指し、試みを始めた企画です。

来場者アンケートの中に、こんな質問を設けました。「本日の『ちゃぶ台囲んで膝詰め対話』と『研究者と立ち話』の中で、あなたがよかったと思うのはどの出展ですか？もしその出展になにか「賞」をプレゼントするなら、どんな名前の賞にしますか？」この質問で一番コメントを多く集めた出展研究者が、今年度の「京都大学アカデミックデイ賞」の受賞者です。

■ 3-3-1. 2014 年度「京都大学アカデミックデイ賞」受賞者

出展名：「トマトって、なに？」

出展代表者：柴田大輔さん

（京都大学大学院農学研究科「カゴメ」トマト・ディスカバリーズ講座 特任教授）



受賞者の柴田教授へのインタビューと出展ポスターを以下のサイトで公開しています。

<http://www.kura.kyoto-u.ac.jp/act/79>



Dialog with the Public

表彰状

京都大学アカデミックデイ賞

出展名:「トマトって、なに？」

出展代表者: 柴田大輔 殿

貴殿の出展は、京都大学の「国民との科学・技術対話」事業の一環として行われた「京都大学アカデミックデイ2014」において、来場者による投票の結果、もっとも多くの評価を受けました。

このことは、自ら研究を紹介し来場者からの声を聞く取り組みとして実施されている、本事業の趣旨を体現されたものであります。ここに、その功績をたたえます。

平成26年9月28日

京都大学

「国民との科学・技術対話」ワーキンググループ

京都大学アカデミックデイ 2014

■ 3-3-2. アンケートの上位の展

来場者からの賞についてのアンケートでコメント数の多かった上位 10 件は以下の展でした。

「トマトって、なに?」: 出展代表者 柴田大輔 (京都大学大学院農学研究科 特任教授)	
・ トマトが食べたくなくて賞	・ これからの進路に大きく影響を与えてくれたで賞
・ 面白い研究で賞	・ 研究動機が素晴らしいで賞
・ 意外でした賞	・ ワクワクしたで賞
「お腹の中で子供を育てるサカナ」: 出展代表者 飯田敦夫 (京都大学再生医科学研究所 助教)	
・ これからの発見が楽しみで賞	・ 人間と魚の共通点を知ることができたで賞
「六甲山には何種類のキノコがある?」: 兵庫県立御影高等学校 環境科学部生物班	
・ 今も未来も輝いていますね賞	・ キノコによく向き合ってるで賞
「心の構えを切り替える心の働き」: 出展代表者 齊藤智 (京都大学大学院教育研究科 准教授)	
・ 前頭葉の“反射神経”すごい賞	・ 人間のチャレンジ意欲を再生するきっかけ研究賞
「不老不死のウルトラ動物ベニクラゲ」: 出展代表者 久保田信 (京都大学フィールド科学教育研究センター 瀬戸臨海実験所 准教授)	
・ ふわふわワクワクするで賞	・ 生命の不思議賞
「プラスチックでつくる太陽電池」: 出展代表者 大北英生 (京都大学大学院工学研究科 准教授)	
・ 早く実用化してほしいで賞	・ 難しいことわかりやすく説明してくれたで賞
「重力波物理学の未来」: 出展代表者 田中貴浩 (京都大学大学院理学研究科 教授)	
・ ロマンがあるで賞	・ 研究内容が本当におもしろかったで賞
「東アフリカ牧畜民: サバンナを生きる」: 出展代表者 田曉潔 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究 研究科 5 年一貫博士課程)、泉直亮 (京都大学アフリカ地域研究資料センター 研究員)	
・ もっと知りたくなくて賞	・ アフリカを身近にしま賞
「DNA オリガミを使ってできること」: 出展代表者 板東俊和 (京都大学大学院理学研究科 准教授)	
・ オリジナルな視点にびっくり賞	・ オリガミってすごい賞

4. 出展者情報

以下、各出展の「〇〇〇で賞」は、来場者のアンケート用紙に設けた質問「あなたがよかったと思うのはどの出展ですか？もしその出展になにか『賞』をプレゼントするなら、どんな名前の賞にしますか？」の回答の中から特徴的なものを標記しました。

4-1. 研究者と立ち話（ポスター／展示）

01

「食と生薬による健康」

後藤幸織（京都大学霊長類研究所 准教授）

健康に対する食の役割は、我々の日常生活と深い関わりがある。とりわけ東洋では、食品に含まれる天然由来成分を「生薬」と称して、伝統的に病気の治療や健康維持に用いてきた。このような食と生薬による健康への影響の最新の研究などを紹介したい。



どんどん研究をすすめてほしいで賞



02

「脳刺激で、運動・認知機能を取り戻す」

小金丸聡子（京都大学大学院医学研究科 研究員）

脳卒中などの脳や神経の病気の患者さんでは、病気のある大脳半球の活動は低下し、一方、病気のない大脳半球の活動は過剰になっています。このような状態のときに、頭皮の上から微弱な電流刺激を与えることで、脳神経の活動を変え、正常な状態に近づけることができます。さらに、このような刺激とリハビリ訓練を組み合わせることで、より効果的に機能を回復させることができることが分かってきました。私たちはこのような電流刺激と訓練を組み合わせた、より効率的なリハビリテーションアプローチを開発するための研究をしています。



もっともっと役立つで賞



03

「過去の地震にまなぶ」

加納靖之（京都大学防災研究所地震予知研究センター 助教）

地震は繰り返し発生する性質があることから、未来の地震とそれによる災害に対応するためのひとつの手掛りは、過去にどのような地震が起きたのかを知ることです。さまざまな調査方法のなかから、古文書をつかって、過去の地震を調べる方法とその成果について紹介します。



ドキドキしたで賞



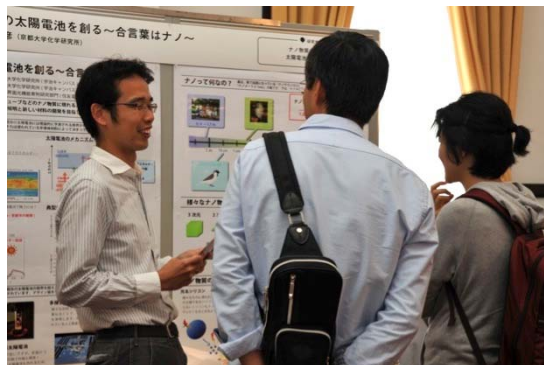
04 「未来の太陽電池を創る～合言葉はナノ～」

金光義彦（京都大学化学研究所 教授）

自然エネルギーの有効活用が叫ばれる中、太陽光は重要なエネルギー源の一つです。太陽光を使って電気が作られる仕組みや、より高い効率を目指すための最新の技術についてお話しします。また、実際に太陽電池が発電する様子を見てもらいます。



日本の科学ってすごいで賞



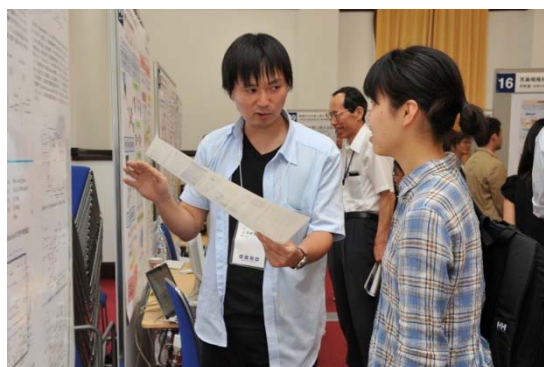
05 「100℃でも生育可能な超好熱菌」

跡見晴幸（京都大学大学院工学研究科 教授）

超好熱菌は 80℃以上の至適生育温度を示す微生物であり、現存する生物の中では原始生命体に最も近い生物群として提えられている。ここではこれらが高温環境下でどのような機構で生命を維持しているかについて説明します。



探求心が深かったで賞



06 「心の構えを切り替える心の働き」

齊藤智（京都大学大学院教育学研究科 准教授）

私たちががある課題に臨む時、「心の構え（心の準備）ができていない」あるいは「できていない」と感じる場合があります。このような「心の構え」を形成する心の働きを、「心の構えを切り替える」認知心理学の実験によって検討しています。



前頭葉の“反射神経”すごいで賞



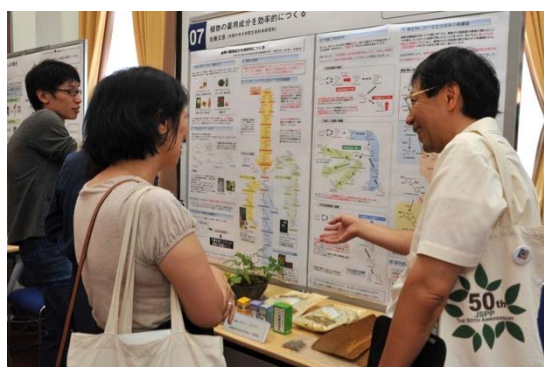
07 「植物の薬用成分を効率的につくる」

佐藤文彦（京都大学大学院生命科学研究科 教授）

植物は様々な低分子化合物をつくっています。これらは、植物の環境応答やストレス耐性に役立つだけでなく、我々の生活にも様々な利用されています。ここでは、植物が薬用成分をつくる能力を如何に改変するかという話を紹介します。



夢を広げるで賞



08

「ナノサイズの材料の強さを知ろう！！」

澄川貴志（京都大学大学院工学研究科 准教授）

材料がナノメートル（100万分の1ミリ）オーダーまで小さくなると、原子の世界が見えてきます。すると、これまでの材料とは全く違う強さや壊れ方を示すと考えられています。優れたナノデバイスやナノマシンを設計・実現するために、世界最先端の実験と解析を駆使してナノ材料の強さの解明を行っています。



京大で学びたいと思わせてくれたで賞



09

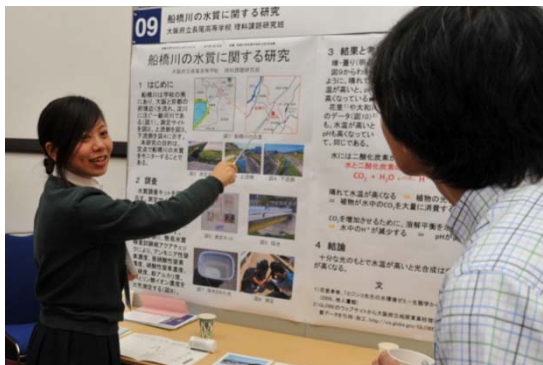
「船橋川の水質に関する研究」

大阪府立長尾高等学校 理科課題研究班

学校から徒歩約5分のところにある船橋川の水質調査をこの4月から始めた。水温が上昇すると、水が緑色になってpHも上がった。水温とpHの関係について、植物プランクトンなどの光合成の観点から検討したい。



これからの継続的な取り組みに期待するで賞



10

「音楽から地域を語れるか？」

福田宏（京都大学地域研究統合情報センター助教）

世界には様々な音楽があります。日本的な音楽としては、例えば民謡が思い浮かびますが、近隣のアジア諸国、アメリカ、アフリカなど、どこにいてもその地域を特徴づける音楽を見出すことができます。ここでは、音楽学・歴史学・情報学の専門家が集まり、主に中央ヨーロッパの音楽に注目し、音という側面から地域の特性を読み取ることが可能かどうかについて検討しています。



話を聞いてみると意外にも深いで賞



11

「重力波物理学の未来」

田中貴浩（京都大学大学院理学研究科 教授）

一般相対論が予言する時空のさざ波である重力波が、数年後には直接検出されると期待されています。私たちは重力波の直接検出後に得られる科学的成果を最大化するように、重力波源の研究や重力理論の研究をさまざまな視点で進めています。



ロマンがあるで賞



12

「トマトって、なに？」

柴田大輔（京都大学大学院農学研究科 特任教授）

「トマトが赤くなると医者が青くなる」と言われるほど体に良いトマト。しかし、トマトにはまだわかっていない成分がたくさん入っています。トマトの全容解明に向けた研究内容とトマトの雑学をご紹介します。



トマトが食べたくなるで賞



13

「お腹の中で子供を育てるサカナ」

飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所 助教）

多くの魚は子供を卵で産みます。しかし一部には、お母さんがお腹の中で赤ちゃんを育てて産む魚がいます。今回はメキシコ産の胎生魚ハイランドカープの“赤ちゃんを育てる仕組み”を紹介します。



これからの発見が楽しみで賞



14

「東アフリカ牧畜民：サバンナを生きる」

田暁潔（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 5年一貫制博士課程）

東アフリカのサバンナには、家畜とともに生きる牧畜民がいる。近代化が進む現代、タンザニアのスクマとケニアのマサイ、二つの牧畜社会において、人びとが自然環境や社会変化のなかをどのように生きるのかを紹介する。



もっと知りたくなるで賞



15

「材料開発のフロンティア：ナノ構造」

田中功（京都大学大学院工学研究科 教授）

結晶のなかで原子は整然と並んでいますが、ところどころで原子レベルでの乱れが生じています。これを的確に利用すると、環境やエネルギー問題を解決する革新的な材料開発が可能になります。その最先端をお見せします。



小さい世界をがんばって見えていますで賞



16

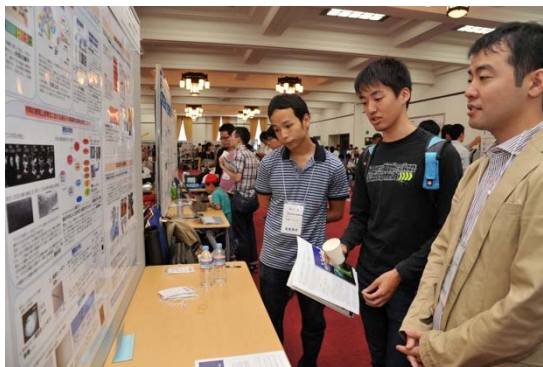
「耳鼻咽喉科領域における先進的研究」

平野滋（京都大学大学院医学研究科 講師）

耳鼻咽喉科領域の特徴としてコミュニケーション障害に対する医療とがん治療がある。いずれも重要な分野であり、当教室では公的資金の援助を受けて、（１）内耳の発生と再生のための基礎的研究、（２）声帯（音声）再生のための医師主導治験、（３）咽頭癌・喉頭癌に対するロボット手術の先進医療をすすめている。



研究が人々を救うで賞



17

「コンピュータで化学反応の世界を探る」

諸熊奎治（京都大学福井謙一記念研究センターシニアリサーチフェロー）

コンピュータの進歩により、分子の世界で起こる化学反応の様子が量子力学を使った計算によって目で見たようにわかるようになってきています。このような例を行いくつかお話ししたいと思います。



私の興味をめっちゃ引き出してくれたで賞



18

「今の大学：学問論、大学論、政策哲学」

宮野公樹（京都大学学際融合教育研究推進センター 准教授）

今日に至るまで「大学は二度死んだ」と言われています。昨今のグローバルゼーション、遠隔授業、入試制度改革などなど、今まさに三度目の死を迎えようとしているとも言えるのでは？ 政策哲学を軸に、学問論、大学論の観点から今日的な大学を論じます。



斬新かつ鋭い思想の持ち主でした賞



19

「淀川水系のヌマチチブは外来種？」

京都府立嵯峨野高等学校 スーパーサイエンスラボ

ヌマチチブは琵琶湖淀川水系いたる所にいるハゼ科魚類です。私たちは、琵琶湖淀川水系のヌマチチブのミトコンドリア DNA を調べました。結果から、淀川水系のヌマチチブは外部から侵入したものと考えられました。



将来有望で賞



20

「太陽エネルギー変換に挑戦」

今堀博（京都大学物質－細胞統合システム拠点 教授）

本研究紹介では光により開始される電子移動に焦点を当て、その基本的な考え方を説明します。さらにその応用展開として高効率な人工光合成・有機太陽電池の開発や新規な細胞工学への展開を紹介します。



光合成すごいで賞



21

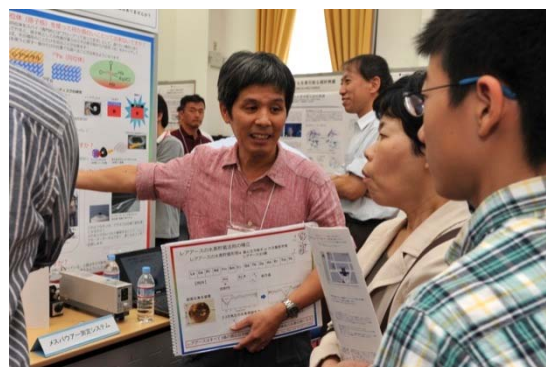
「原子核からのぞく世界」

増田亮（京都大学原子炉実験所 研究員）

物質を構成する原子。原子の中心にある、原子核。原子核からのぞくことで、磁石の材料や生体反応をつかさどる酵素など、さまざまな物質の有益な機能のしくみをナノスケールで調べた研究についてご紹介します。



鉄の可能性がよくわかったで賞



22

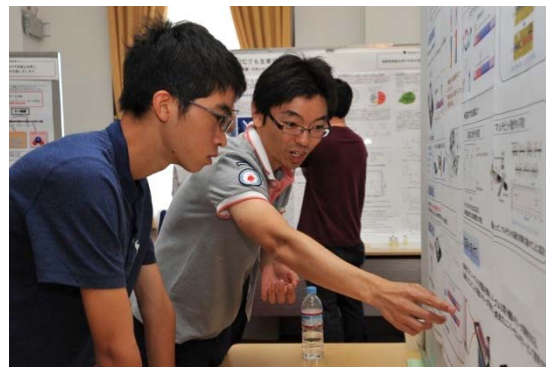
「新規スピンドYNAMICSデバイスの研究」

小野輝男（京都大学化学研究所 教授）

本研究の目的は、磁壁や磁気渦の電流誘起スピンドYNAMICSを利用した新規省エネルギーデバイスを作製し基本動作を確認することである。



電流で bit を動かすで賞



23

「英語で学ぶ大学授業が変える英語学習」

丁愛美（京都大学大学院教育学研究科 修士課程）

グローバル化が進む中で京都大学の学生にも習得が期待される英語力やコミュニケーション力。英語で行われる専門科目授業の実践研究を基に、どのように学生の英語学習観や思考・態度が変化していくかを調査しました。



ワクワクしたで賞



24

「不老不死のウルトラ動物ベニクラゲ」

久保田信（京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所 准教授）

私たち動物は、みな子供をつくって、死んでゆきます。しかし、ベニクラゲ *Turritopsis* だけは、子供もつくりませんが、親は死なないで若返ることができます。つまり、永遠に生きられる可能性を大いに秘めています。どんな風にそんな凄いことを実行しているかを、今回、実物などを見ながら説明します。本やDVDなどの映像でも紹介します。ベニクラゲは、iPS 細胞や問題の STAP 細胞の様なことを、個体丸ごとでやり遂げており、まさに「人類の夢をかなえている」動物なのですね！



ふわふわワクワクするで賞



25

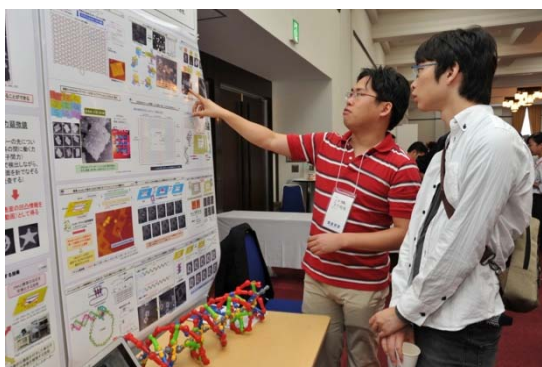
「DNA オリガミを使ってできること」

板東俊和（京都大学大学院理学研究科 准教授）

DNA オリガミと呼ばれる技術によって、色々なかたちや働きを持った DNA 構造体を創造することができる。私たちのグループでは、この技術を駆使して、様々なタンパク質や核酸などの分子の動きを解析している。



オリジナルな視点にびっくり賞



26

「開花の季節同調：花が一斉に咲くしくみ」

工藤洋（京都大学生態学研究センター 教授）

花は決まった季節にそろって咲きます。それでは、花はどのように季節を知るのでしょうか？ここでは、遺伝子の働きを測る最新技術によって明らかになった、植物体内の季節変化についてお話しします。



自分も携わってみたい研究で賞



27

「六甲山には何種類のキノコがある？」

兵庫県立御影高等学校 環境科学部生物班

六甲山の再度公園（ふたたびこうえん）のキノコの種数を、過去の観察記録から予測しました。また統計的な分析からキノコの出現頻度をもとめ、標本で展示したいと思います。発表や展示から六甲山のキノコの多様性を実感してください！



今も未来も輝いていますねで賞



28

「アジア・移動・インターネットカフェ」

平田知久（京都大学大学院人間・環境学研究科 特別研究員（PD））

皆さんはアジアのインターネット利用についてどのようなイメージを持っていますか？情報先進国／発展途上国が混在する東アジア・東南アジアの国々を「インターネットカフェ」と「移動」というキーワードから探ってみたいと思います。



移動×インターネットというテーマが面白い！賞



29

「ニュートリノ最先端」

中村輝石（京都大学大学院理学研究科 特定研究員）

「物質を細かくしていくとどうなるのか？」その問いにせまるのが素粒子物理学です。特に私たちが研究している”ニュートリノ”という素粒子は、現在かなりの精度で正しいとされている素粒子標準模型でさえ十分に記述することのできない”未知な”粒子であり、ニュートリノ実験は新物理へ向けた最前線の一つです。



こんなおもしろい研究をもっと世間に広めてほしいで賞



30

「プラスチックでつくる太陽電池」

大北英生（京都大学大学院工学研究科 准教授）

身の回りにある太陽電池は堅いシリコンでできたものがほとんどですが、われわれの研究グループでは、軽くて柔らかいプラスチックでつくる次世代の太陽電池の研究をしています。光から電流が発生する様子を分子レベルで直接観る方法も紹介します。



早く実用化してほしいで賞



31

「医療や科学技術の倫理について考える」

児玉聡（京都大学大学院文学研究科 准教授）

このごろ、新型出生前診断や代理出産が新聞やテレビでよく取り上げられています。これらは倫理的に問題なのでしょうか。あるいは個人の自由に任せるべきなのでしょうか。また、尊厳死や胃ろう設置の是非などの終末期医療の問題も大きな問題として取り上げられています。国民の合意をとるのが難しいこれらの問題について、みなさんと一緒に考えてみたいと思います。



みんなの意見をもっとききたい賞



32

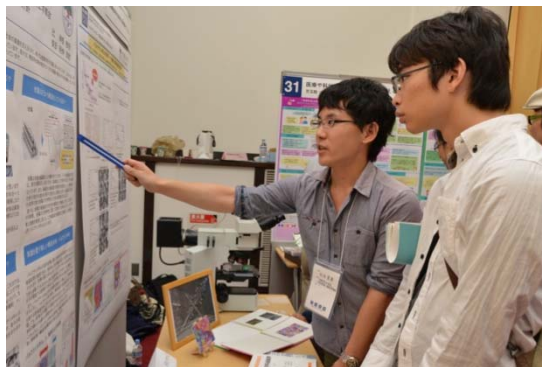
「バルクナノメタルの科学」

辻伸泰（京都大学大学院工学研究科 教授）

構造材料は、我々の文明社会を支える縁の下の力持ちです。単純な化学組成で従来材の4倍以上の強度を示すバルクナノメタルなど、革新的な構造材料の科学を紹介します。



夢があるで賞



33

「東南アジア研究所は何を研究している？」

伊賀司（京都大学東南アジア研究所 機関研究員）

今村真央（京都大学東南アジア研究所 機関研究員）

伊賀は、マレーシアを題材にオンライン・メディアの登場がマレーシアの政治体制に与えた影響について、今村はミャンマー山地でのキリスト教を題材に、宗教の言語観について話します。



すごく情熱的に話してくれてワクワクしたで賞



34

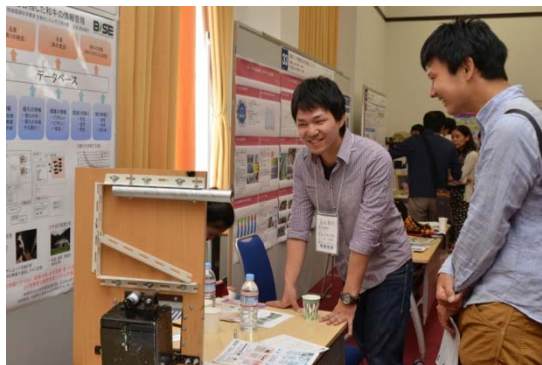
「精密畜産を目指した和牛の情報管理」

近藤直（京都大学大学院農学研究科 教授）

情報化が遅れている肉用牛生産においては、正確なデータに基づく対象物のばらつき管理により、各牛へ最適な給餌を行うことが最重要の課題である。その肥育管理では血中ビタミンA濃度の制御が最も重要であるため、まずビタミンAの非侵襲計測装置の開発を行い、給餌、牛の健康状態、環境条件との関係を明らかにするセンサ群を整え、データベースに基づく和牛の肥育を目指す。



食料を技術で支える大事さが分かったで賞



35

「元素戦略プロジェクト」

田中庸裕（京都大学 実験と理論計算科学のインタープレイによる触媒・電池の元素戦略研究拠点 拠点長）

田中功（京都大学 構造材料元素戦略研究拠点 拠点長）

「元素戦略」耳慣れないことばだと思いますが、今、世界から注目されているプロジェクトです。京都大学では2つの研究拠点を設置し、産官学が密接に連携して研究を行っています。その取組みについてお話しします。



研究を頑張って実用化してほしいで賞



36

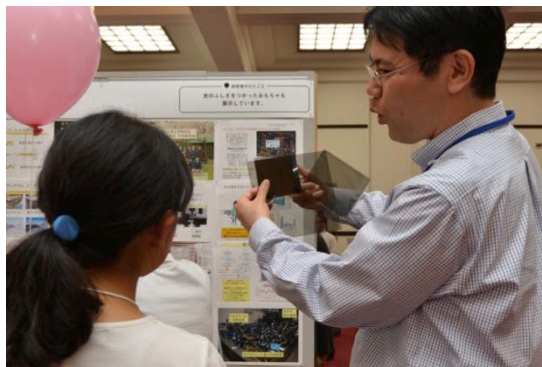
「光子のふしぎと量子情報科学」

竹内繁樹（京都大学大学院工学研究科 教授）

光は、「光子（こうし）」と呼ばれるエネルギーの粒から出来ています。私たちの研究室では、その光子を一粒ずつ、自在に操ることで、光子の持つ不思議な性質の解明を目指すと共に、量子コンピューターや新しい計測技術などの応用について研究しています。今回の立ち話では、ぜひ、この「光子」の不思議な性質、面白さについてお話できればと思っています。



未来を楽しくしてください賞



37

「宇宙で電波をとらえる小型センサー」

小嶋浩嗣（京都大学生存圏研究所 准教授）

宇宙空間を満たしている薄いプラズマからは、電波が自然に放射されており、それが宇宙環境変化を敏感に反映しています。この電波を捉える観測器を非常に小型化して、宇宙空間にたくさん配置できる小型のセンサーを私たちは開発しています。宇宙空間で発生する電波現象とそれをとらえる小型の観測器について解説します。



ものすごくワクワクしたで賞



38

「化学を武器にアルツハイマー病に挑む」

入江一浩（京都大学大学院農学研究科 教授）

アルツハイマー病の原因物質と考えられているアミロイドβタンパク質の毒性を緩和する抗体の開発や天然物の探索を行っています。化学的手法に基づくアルツハイマー病の新しい予防戦略についてお話します。



しっかり向き合って話をしてくれたで賞



39

「炎を制する一超耐熱構造材料」

乾晴行（京都大学大学院工学研究科 教授）

高融点、高温強度に優れたMoSi₂基軸材料と他のシリサイドからなるBrittle/Brittle複相材料(融点約2000℃)中の界面の高機能化により、高温高強度、高靱性を兼ね備えた1800℃級ガスタービンで使用可能な超耐熱材料の開発を目指しています。



機械がおもしろかった賞



40

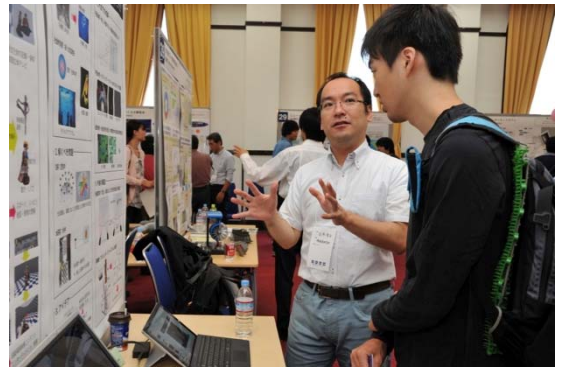
「水中生物の3次元自由視点映像」

延原章平（京都大学大学院情報学研究科 講師）

この研究では水中生物を撮影した映像から、その3次元形状を計算し、好きな方向からその動きを観察したり、大きさや姿勢を自動的に計算することを目標として、特に光の屈折や吸収、散乱といった光学現象をコンピュータビジョンの視点でモデル化することに取り組んでいます。



ぜひ実用化してほしいで賞



41

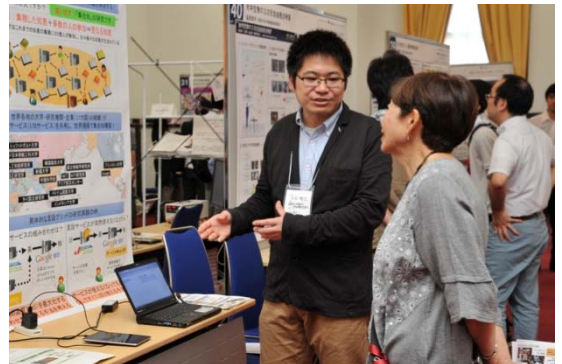
「世界の言葉を繋ぐ『言語グリッド』」

大谷雅之（京都大学大学院情報学研究科 特定研究員）

国際化によって異文化交流が盛んですが、同時に言葉の壁が大きな問題となっています。「言語グリッド」はインターネット上の辞書や翻訳機などを組み合わせることで、世界中の人とのコミュニケーションを実現します。



将来そうなってほしいで賞



42

「『ある』の謎—フランス現象学の挑戦」

服部敬弘（京都大学大学院文学研究科 特別研究員）

なぜ何もないのではなく、何かがあるのでしょうか。何かがあるという、このあまりに単純な事態こそ、数々の哲学者を悩ませてきた問題でした。「ある」をめぐる哲学の知的格闘を振り返りながら、現代フランス現象学からの解答をご紹介しますと思います。



もっと語り合いたいで賞



43

「津波被災者からのメッセージを読み解け」

山本博之（京都大学地域研究統合情報センター 准教授）

災害時の被災者支援では、生活再建などの直接的な支援だけでなく、被災者が発するメッセージを受け止め、伝えていくことも大切です。スマトラ島の巨大津波から10年。一人一人異なる復興過程から時代や地域を越えて成り立つ意味を読み解きます。



本当に大切な研究で賞



44

「火山大国インドネシアの噴火災害に学ぶ」

中道治久（京都大学防災研究所附属火山活動研究センター 准教授）

インドネシアでは火山噴火とそれに伴う災害が頻繁に起こります。私たちは現地観測・調査とシミュレーションにより災害発生の早期警戒を支援するとともに、研究成果を日本の災害対策に還元します。



予知出来たらいいで賞



45

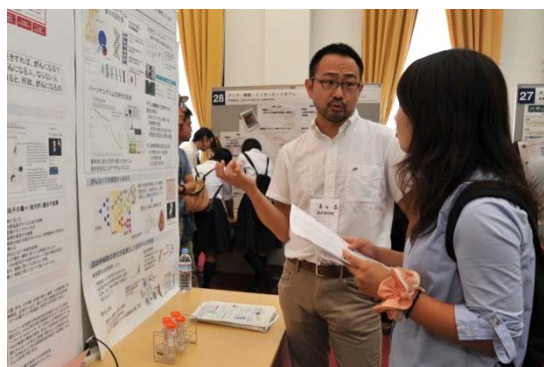
「遺伝子からみた老化とがん」

真田昌（京都大学大学院医学研究科 助教）

高齢化社会を迎えつつある日本において、2人に1人はがんになり、3人に1人はがんで亡くなっています。がんは、我々の身体的设计図である遺伝子に傷がつくことが主たる原因と考えられていますが、なぜ、年を取るとがんになりやすくなるのか、最新の遺伝子解析方法を用いて、遺伝子から明らかにすることを目指しています。



人間をみつめる学問で賞



46

「遺跡の桃から日本の桃のルーツにせまる」

奈良県立青翔高等学校 理数科

奈良県御所市の名柄遺跡（5紀後半）の桃を核の形態から分類し、2種類の桃が存在したことを明らかにした。他の遺跡からはこの2種類以外の桃が出土しているため、年代と支配豪族の違いがモモの種類の違いになったと考えられる。



高校生なのに頼もしいで賞



47

「言語多様性 vs. 生物多様性」

西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所 特定助教）

生物多様性の重要性はよく語られている一方、言語多様性の重要性はあまり知られていません。世界の言語の多様な語形、語順、発音、話者の価値観や自然との共存、文化・自然・社会背景を紹介しながら、「科学として言語を研究することで解明されることは何か」を一緒に考えます。



マダガスカルに興味が出たで賞



4-2. ちゃぶ台囲んで膝詰め対話（サイエンスカフェ）

48

「いのちのバトン―体験型ヒト遺伝教室―」

和田敬仁（京都大学大学院医学研究科 准教授）

私たちは「いでん」といういのちのリレーで、祖先から子孫にバトンを受け継ぎます。バトンの色はたった4種類の色の組み合わせでも、多様な個性を作り出します。小中学生、親子も大歓迎！一緒にヒトの遺伝を考えましょう！



聞く側の話も取り入れてくれたで賞



49

「日本でヨーロッパについて語る？」

西村周浩（京都大学白眉センター 特定助教）

かつてヨーロッパの大言語であったラテン語。その語彙の歴史に関する研究を糸口に、ヨーロッパからはるか遠くはなれた日本において、ヨーロッパ研究全般が今後どのように存続しえるのか、一緒に考えてみませんか？



わかりやすかったで賞



50

「統合知―新たな学問の創成に向けて―」

村瀬雅俊（京都大学基礎物理学研究所 准教授）

現代は、政治・経済・医療・教育・高齢化社会等において、ますます混沌とした時代になっており、私たちはさまざまな危機に直面している。このような時代にこそ、今日の危機を未来への好機と捉え直す、新たな学問の創成が望まれる。アルバート・アインシュタインは、「さまざまな問題を生み出してきた時代においては、その時代精神の常識的な考え方自体を抜本的に改める必要がある」と説いている。従来までの、客観主義科学の現状と課題を踏まえながら、新たな「ものの見方」に基づく、文理融合的な学問の創造を目指す。これが、京都大学統合創造学創成プロジェクトの目的である。



政治家をまきこんで広めてほしいで賞



51

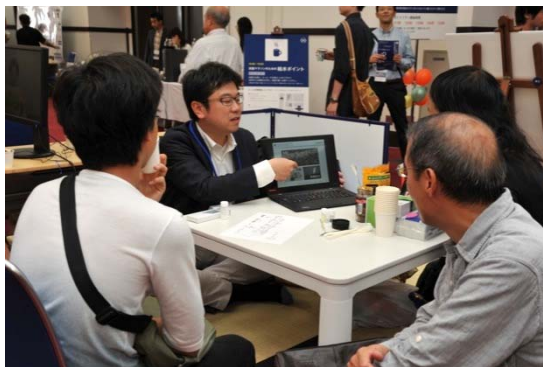
「CO₂を“ひかり”と“みず”でリサイクル!？」

寺村謙太郎（京都大学大学院工学研究科 准教授）

石炭・石油・天然ガスなどの化石燃料を燃やすと最終的には二酸化炭素（CO₂）と水（H₂O）になります。このCO₂とH₂Oを光触媒を使って人類に有用な資源にする研究をしています。



これから世界にはばたいてほしい技術で賞



52

「言語から考える世界」

ネイサン・パデノック（京都大学白眉センター／東南アジア研究所 特定准教授）

言語が100以上あるラオスで、常にいくつもの言語を操りながら生活する人々がつくる多言語社会を調べています。言語の多様性に関する研究を通して、言語は人間社会にとってどういう価値をもつか、問い続けています。



新しい発見があったで賞



53

「未来の“クルマ”とその“社会”」

井上元（京都大学大学院工学研究科 助教）

未来の“クルマ”を想像できますか？その時はどんな社会でしょう？現在、自動車は国内エネルギー消費の20%を占め、次世代自動車が注目されています。その鍵となる二次電池、燃料電池に関する私たちの研究を紹介し、また未来の社会でのあるべき姿について考えてみましょう。



未来に大事で賞



54

「分子画像と四次元放射線治療の融合」

平岡真寛（京都大学大学院医学研究科 教授）

原田浩（京都大学医学部附属病院 特定准教授）

京都大学の医学分野の2つの最新研究成果（分子イメージングによるがんの個別特性把握と、体内で動くがんを追尾しながら照射を行う放射線治療）の融合による新しい放射線治療を分かりやすく紹介致します。



現場の生々しさと未来に期待したで賞



4-3. 出展参加者一覧

ブース 番号	代表者 ○	氏名・所属	職名又は学年等
1	○	後藤幸織・京都大学霊長類研究所	准教授
2	○	小金丸聡子・京都大学大学院医学研究科 三上佑介・京都大学大学院医学研究科	研究員 博士後期課程1年
3	○	加納靖之・京都大学防災研究所地震予知研究センター	助教
4	○	金光義彦・京都大学大学院化学研究所 山田泰裕・京都大学大学院化学研究所 岡野真人・京都大学大学院化学研究所	教授 特定准教授 特定助教
5	○	跡見晴幸・京都大学大学院工学研究科 金井保・京都大学大学院工学研究科 佐藤喬章・京都大学大学院工学研究科	教授 講師 助教
6	○	齊藤智・京都大学大学院教育学研究科 佐伯恵里奈・京都大学大学院教育学研究科 谷田勇樹・京都大学大学院教育学研究科	准教授 研究員 博士後期課程3年
7	○	佐藤文彦・京都大学大学院生命科学研究科 山田泰之・京都大学大学院生命科学研究科 堀健太郎・京都大学大学院生命科学研究科	教授 教務補佐員 博士後期課程2年
8	○	澄川貴志・京都大学大学院工学研究科 芦田晋作・京都大学大学院工学研究科 山本幹也・京都大学大学院工学研究科	准教授 修士課程2年 修士課程1年
9	○	平井俊男・大阪府立長尾高等学校理科課題研究班 笹部純史・大阪府立長尾高等学校理科課題研究班 水上紀幸・大阪府立長尾高等学校理科課題研究班 伊藤絢菜・大阪府立長尾高等学校理科課題研究班 内田早紀・大阪府立長尾高等学校理科課題研究班 中原広晴・大阪府立長尾高等学校理科課題研究班 恒吉将也・大阪府立長尾高等学校理科課題研究班 刀禰太暢・大阪府立長尾高等学校理科課題研究班 後藤大河・大阪府立長尾高等学校理科課題研究班 原陽宏・大阪府立長尾高等学校理科課題研究班	教諭 教諭 3年 3年 3年 1年 1年 1年 1年 1年
10	○	福田宏・京都大学地域研究統合情報センター	助教
11	○	田中貴浩・京都大学大学院理学研究科 瀬戸直樹・京都大学大学院理学研究科 中野寛之・京都大学大学院理学研究科	教授 助教 PD研究員
12	○	柴田大輔・京都大学大学院農学研究科 荒武・京都大学大学院農学研究科 高橋慎吾・京都大学大学院農学研究科 高橋春弥・京都大学大学院農学研究科 毛利晋輔・京都大学大学院農学研究科	特任教授 特定准教授 特定助教 博士研究員 博士後期課程2年
13	○	飯田敦夫・京都大学再生医科学研究所 徳増雄大・京都大学大学院医学研究科 脇華菜・京都大学大学院理学研究科	助教 修士課程2年 博士後期課程1年
14	○ ○	田曉潔・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 泉直亮・京都大学アフリカ地域研究資料センター	5年一貫制博士課程3年 研究員

15	○	田中功・京都大学大学院工学研究科 大学院生 5 名・京都大学大学院工学研究科	教授 院生
16	○	平野滋・京都大学大学院医学研究科 楯谷一郎・京都大学大学院医学研究科 山本典生・京都大学大学院医学研究科	講師 講師 助教
17	○	諸熊奎治・京都大学福井謙一記念研究センター 畑中美穂・京都大学福井謙一記念研究センター 鈴木聡・京都大学福井謙一記念研究センター Sameera W. M. C. ・京都大学福井謙一記念研究センター Ramoszi Romain ・京都大学福井謙一記念研究センター Jiang Julong ・京都大学福井謙一記念研究センター	シニアリサーチフェロー 福井センターフェロー 研究フェロー 学振外国人特別研究員 学振外国人特別研究員 研究フェロー
18	○	宮野公樹・京都大学学際融合教育研究推進センター	准教授
19	○	林博之・京都府立嵯峨野高等学校スーパーサイエンスラボ 井上和樹・京都府立嵯峨野高等学校スーパーサイエンスラボ 鎌田知希・京都府立嵯峨野高等学校スーパーサイエンスラボ 田中佑季・京都府立嵯峨野高等学校スーパーサイエンスラボ	教諭 3 年 3 年 3 年
20	○	今堀博・京都大学物質-細胞統合システム拠点 梅山有和・京都大学大学院工学研究科 東野智洋・京都大学大学院工学研究科	教授 准教授 助教
21	○	増田亮・京都大学原子炉実験所 瀬戸誠・京都大学原子炉実験所 黒葛真行・京都大学原子炉実験所 齋藤真器名・京都大学原子炉実験所	研究員 教授 研究員 助教
22	○	小野輝男・京都大学化学研究所 KIM Kab-Jin・京都大学化学研究所	教授 助教
23	○	丁愛美・京都大学大学院教育学研究科	修士課程
24	○	久保田信・京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所 朝倉彰・京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所	准教授 教授
25	○	板東俊和・京都大学大学院理学研究科 杉山弘・京都大学大学院理学研究科 朴昭映・京都大学大学院理学研究科 山本清義・京都大学大学院理学研究科 谷口純一・京都大学大学院理学研究科	准教授 教授 助教 博士後期課程 2 年 修士課程 2 年
26	○	工藤洋・京都大学生態学研究センター 西尾治幾・京都大学大学院理学研究科 神谷麻梨・京都大学大学院理学研究科	教授 博士後期課程 3 年 博士後期課程 1 年
27	○	河合祐介・兵庫県立御影高等学校環境科学部生物班 小野高滉・兵庫県立御影高等学校環境科学部生物班 石丸明日菜・兵庫県立御影高等学校環境科学部生物班 鶴岡脩真・兵庫県立御影高等学校環境科学部生物班 阿波田みのり・兵庫県立御影高等学校環境科学部生物班 新保悠里乃・兵庫県立御影高等学校環境科学部生物班 高岡まりあ・兵庫県立御影高等学校環境科学部生物班 河合智也・兵庫県立御影高等学校環境科学部生物班 中村雄太郎・兵庫県立御影高等学校環境科学部生物班	主幹教諭（顧問） 2 年 2 年 2 年 1 年 1 年 1 年 1 年 1 年
28	○	平田知久・京都大学大学院人間・環境学研究科	学振特別研究員（PD）
29	○	中村輝石・京都大学大学院理学研究科 石山優貴・京都大学大学院理学研究科	特定研究員 修士課程 2 年

		羽田顕人・京都大学大学院理学研究科 柳田沙緒里・京都大学大学院理学研究科	修士課程 1 年 修士課程 1 年
30	○	大北英生・京都大学大学院工学研究科 辨天宏明・京都大学大学院工学研究科 玉井康成・京都大学大学院工学研究科	准教授 助教 博士研究員
31	○	児玉聡・京都大学大学院文学研究科 佐藤恵子・京都大学医学部附属病院臨床研究総合センター 鈴木美香・京都大学 iPS 細胞研究所 田中創一朗・京都大学文学部	准教授 准教授 特定研究員 聴講生
32	○	辻伸泰・京都大学大学院工学研究科 柴田暁伸・京都大学大学院工学研究科 坪井瑞記・京都大学大学院工学研究科 松本晃英・京都大学大学院工学研究科 勝野友之・京都大学大学院工学研究科	教授 助教 博士後期課程 1 年 修士課程 2 年 修士課程 1 年
33	○ ○	伊賀司・京都大学東南アジア研究所 今村真央・京都大学東南アジア研究所	機関研究員 機関研究員
34	○	近藤直・京都大学大学院農学研究科 木地厚良・京都大学大学院農学研究科 森迫龍也・京都大学大学院農学研究科 Peng Yingqi・京都大学大学院農学研究科 増本忠久・京都大学農学部	教授 研究生 修士課程 2 年 特別研究学生 4 回生
35	○ ○	田中庸裕・京都大学実験と理論計算科学のインタープレイによる触媒・電池 の元素戦略研究拠点 田中功・京都大学構造材料元素戦略研究拠点 大石毅一郎・京都大学学際融合教育研究推進センター構造材料元素戦略研究 拠点ユニット 落合庄治郎・京都大学学際融合教育研究推進センター構造材料元素戦略研究 拠点ユニット 太田浩二・京都大学学際融合教育研究推進センター構造材料元素戦略研究 拠点ユニット	拠点長 拠点長 特定准教授 特任教授 特任教授
36	○	竹内繁樹・京都大学大学院工学研究科 岡本亮・京都大学大学院工学研究科 高島秀聡・北海道大学電子科学研究所	教授 非常勤講師 博士研究員
37	○	小嶋浩嗣・京都大学生存圏研究所 頭師孝拓・京都大学大学院工学研究科 大西啓介・京都大学大学院工学研究科	准教授 修士課程 2 年 修士課程 1 年
38	○	入江一浩・京都大学大学院農学研究科 久米利明・京都大学大学院薬学研究科 村上一馬・京都大学大学院農学研究科	教授 准教授 准教授
39	○	乾晴行・京都大学大学院工学研究科 岸田恭輔・京都大学大学院工学研究科 岡本範彦・京都大学大学院工学研究科 松野下裕貴・京都大学大学院工学研究科 近土雄一郎・京都大学大学院工学研究科	教授 准教授 助教 博士後期課程 2 年 修士課程 1 年
40	○	延原章平・京都大学大学院情報学研究科	講師
41	○	大谷雅之・京都大学大学院情報学研究科	特定研究員
42	○	服部敬弘・京都大学大学院文学研究科	特別研究員
43	○	山本博之・京都大学地域研究統合情報センター	准教授

		西芳実・京都大学地域研究統合情報センター	准教授
44	○	中道治久・京都大学防災研究所附属火山活動研究センター	准教授
45	○	眞田昌・京都大学大学院医学研究科	助教
46	○	生田依子・奈良県立青翔高等学校理数科 鶴田昂平・奈良県立青翔高等学校理数科 藤麗咲・奈良県立青翔高等学校理数科 森裕司・奈良県立青翔高等学校理数科 吉川悠・奈良県立青翔高等学校理数科	教諭 2年生 2年生 2年生 2年生
47	○	西本希呼・京都大学白眉センター／東南アジア研究所	特定助教
48	○	和田敬仁・京都大学大学院医学研究科 秋山奈々・京都大学大学院医学研究科	准教授 修士課程2年
49	○	西村周浩・京都大学白眉センター	特定助教
50	○	村瀬雅俊・京都大学基礎物理学研究所 村瀬智子・日本赤十字豊田看護大学	准教授 教授
51	○	寺村謙太郎・京都大学大学院工学研究科 井口翔之・京都大学大学院工学研究科 巽浩之・京都大学大学院工学研究科	准教授 博士後期課程2年 修士課程1年
52	○	ネイサン・パデノック・京都大学白眉センター／東南アジア研究所	特定准教授
53	○	井上元・京都大学大学院工学研究科 伊藤郁哉・京都大学大学院工学研究科 安東恵・京都大学工学部 矢田部翔多・京都大学工学部 大津啓幸・京都大学大学院工学研究科	助教 修士課程1年 4回生 4回生 修士課程1年
54	○ ○	平岡真寛・京都大学大学院医学研究科 原田浩・京都大学医学部附属病院 横田憲治・京都大学医学部附属病院 石原佳知・京都大学医学部附属病院 岸徳子・京都大学医学部附属病院 武野慧・京都大学医学部附属病院 他2名	教授 特定准教授 特定講師 特定助教 修練医 修練医

5. その他

5-1. 出展研究者向け事前説明会

■ 概要

2014年9月1日・5日に「京都大学アカデミックデイ」に参加予定の研究者を対象とした事前説明会を開催しました（参加は任意）。参加研究者の“負担感”を軽減し、事前準備をサポートすることがこの事前説明会の主なねらいでした。

まずは、学術研究支援室の白井哲哉より「京都大学アカデミックデイ」開催の目的や背景、前回の様子を紹介しました。どのような場で、どのような人たちと対話をするようになるのかを事前にお伝えすることで、準備がしやすくなることを狙っています。その後、専門外の人に研究を紹介する方法・対話のコツ・ポスター作りのポイントについてのレクチャーを行いました。学会発表との違いをもとに紹介をしました。

次に、情報環境機構／学術情報メディアセンター コンテンツ作成室の元木環より、“対話ツール”について紹介をしました。コンテンツ作成室の協力も得て、これまで実際に使われた“対話ツール”の具体例をいくつかお伝えしました。

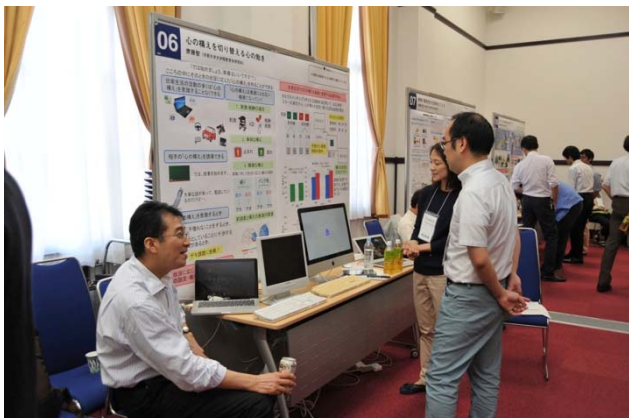
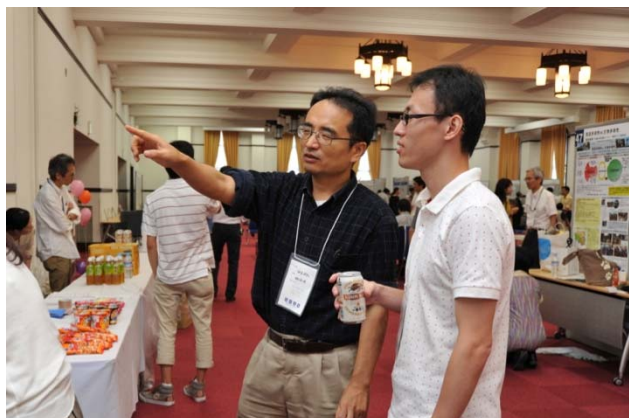
その他、物質-細胞統合システム拠点（iCeMS）科学コミュニケーショングループ（秋谷直矩、加納圭）による「対話力トレーニングプログラム」というワークショップも実施しました。簡単なゲームを通じて対話の中で起こりうるコミュニケーションのギャップを体験したり、実際の対話の場面のビデオ映像を見たりしながら、「対話」の目的を改めて捉え直す機会を提供しました。



5-2. イベント終了後の学内限定タイム（出展者交流）

■ 概要

アカデミックデイ閉幕後、参加研究者どうしの交流の場として出展者や出展者の研究室の学生などを対象とした学内限定タイムを設けました。参加研究者どうしでポスターを見たり、対話したりするなど研究者間の異分野交流のほか、アカデミックデイ賞の発表も行いました。



5-3. 広報物

「京都大学アカデミックデイ」のポスターとチラシを作成し、京都市を中心に関西圏の教育関係機関及び公共機関等に配布を行いました。また、京都市バス・地下鉄及び京都新聞へ広告掲載を行いました。

■ 5-3-1. ポスター（A2 サイズ）

これを発見するまでには、色々あって...
研究って、山あり谷ありなんだ！

なぜこの研究をひらいたと思ったの？
元々、こんなことに興味を持っていたの？

いま、こんな研究をしています。

研究にも色々あるんだなあ。

なんでこの研究を始めたのですか？
子供の頃にね...

百年後のことを考えてます。
え?! そんな研究があるの？



京都大学アカデミックデイ2014 みんなで対話する京都大学の日

100名以上の京都大学の研究者が集い、自らの研究についてお話をします。
たくさんの分野の専門とその魅力を感じていただけるよう、いくつかの対話の形を用意しています。
素朴な疑問や質問も大歓迎。ふと思ったことや気づいたことから、多くの出会いと発見のある対話が始まるはずですよ。
高校生でも、大学生でも、ご家族連れでも、お一人でも、この日はどうぞ京都大学にお越しください。

2014年9月28日(日) 10:00-16:00 京都大学百周年時計台記念館 無料・申込不要

 研究者と立ち話 ポスター／展示 10:00-16:00 ＊ガイドツアーあり(随時開催)	約 50件 大学研究者、高校生による研究紹介です。ポスターの前にいる研究者に話しかけてみてください。気の向くまま、あちこちのぞくもよし。一人とじっくり語るもよし。 出展予定タイトル：「老化とがん」、「トマトって、なに?」、「不老不死のウルトラ動物ペニクラグ」、「プラスティックでつくる太陽電池」、「お腹の中で子供を育てるサカナ」、「化学を武器にアルツハイマー病に挑む」、「英語で学ぶ授業が楽しめる英語学習」、「津波被災者からのメッセージを読み解け」ほか
 ちゃぶ台囲んで膝詰め対話 サイエンスカフェ 10:30-12:00 13:30-15:00	7件 ひとつのテーブルを囲んで研究にまつわるあんな話、こんな話。 お茶の間気分、ほっこりお話ししましょう。 出展予定タイトル：「CO₂を“ひかり”と“みず”でリサイクル?」、「いのちのボタン型録音型ヒト遺伝子教室」、「日本でヨーロッパについて語る?」、「未来の“クルマ”とその“社会”」ほか
 お茶を片手に座談会 トークライブ 10:30-11:30 12:00-13:30 14:30-16:00	3本 10:30-11:30 「宇宙を見てゴカイを食べる?〜人類学×生物学×天文学〜」 古澤祐郎(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授/人類学) × 佐藤正典(東京大学大学院理学系研究科 教授/生物学) × 磯部洋明(京都大学宇治総合学術センター 特定准教授/宇宙物理学) 12:00-13:30 「震災映像の想像力と市井の人々〜京大所蔵東大震災記録フィルムをめぐって〜」 田中俊(京都大学文学部 特任准教授/都市計画史、災害史) × 大澤淳(東京国立近代美術館フィルムセンター 研究員) × 小川直人(せんだいメディアタック 学芸員) × 佐藤守弘(京都府立総合政策センター 准教授/芸術学、後援文化員) 14:30-16:00 「コトバのデータベースが社会を変える?：コーパスの意義と可能性を探る」 家入葉子(京都大学大学院文学研究科 教授/英語学、コーパス言語学) × 風橋裕夫(京都大学大学院情報科学部 教授/自然言語処理、知識情報処理) × 佐藤恵子(京都大学文学部国語学系国語学センター 特任准教授/生命倫理学、文学)
 研究者の本棚 特設図書室 10:00-16:00	京大研究者お好みの本を紹介・展示します。展示の他に、午前中は映像の上映・解説、午後はミニトークを予定。本や映像を介して研究者と対話してみませんか。 11:30-12:30 「東南アジア研究所の「映像ドキュメンタリー・プロジェクト」の紹介」 Mario Ivan Lopez / マリオ・アイバン・ロペス(京都大学東南アジア研究所 准教授/人文学、比較文化論) 13:30-14:00 「お伽草子の世界 -奈良絵本・絵巻を楽しむ-」 金光桂子(京都大学文学部文学研究科 准教授/国文学)



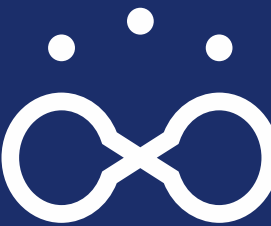

お問い合わせ：京都大学研究国際部「国民との科学・技術対話」担当
TEL：075-753-2579 E-mail：kenkyu-taiwa@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
<http://www.kura.kyoto-u.ac.jp/event/27>



主催：京都大学「学術研究支援室、研究国際部研究推進課、[国民との科学・技術対話]ワーキンググループ」
後援：京大生生活協同組合、京都府教育委員会、大府教育委員会、京都市教育委員会、滋賀県教育委員会

■ 5-3-2. チラシ (A4 サイズ)

● オモテ面



百年後のこと考えてます。
え?! そんな研究があるの?

これを発見するまでには、色々あって...
研究って、山あり谷ありなんだ!

いま、こんな研究をしています。

なぜこの研究をしようと思ったの?
元々、こんなことに興味を持って...

研究にも色々あるんだなあ。

なんでこの研究を始めたのですか?
子供の頃にね...

京都大学アカデミックデイ2014 みんなで対話する京都大学の日

2014年9月28日(日)10:00-16:00 京都大学百周年時計台記念館 参加費無料・申込不要

http://www.kura.kyoto-u.ac.jp/event/27 ※最新情報はWEBをご覧ください 高校生でも大学生でも家族でもお一人でも大歓迎!

主催: 京都大学(学術研究支援、研究開発部研究推進、国民との科学・技術対話)ワーキンググループ) 後援: 京都大学学生協同組合、京都府教育委員会、大阪府教育委員会、奈良県教育委員会、奈良県教育委員会


● ウラ面




100名以上の京都大学の研究者が集い、自らの研究についてお話をします。
たくさんの分野の学問とその魅力を感じていただけるよう、いくつかの対話の形を用意しています。
素朴な疑問や質問も大歓迎。ふと思ったことや気づいたことから、多くの出会いと発見のある対話が始まるはず。
高校生でも、大学生でも、ご家族連れでも、お一人でも、この日はどう京都大学にお越しください。

研究者と立ち話

ポスター・展示

10:00-16:00 ※ガイドツアーあり(随時開催)

約
50件

大学研究者、高校生による研究紹介です。ポスターの前の研究者に話しかけてみてください。気の向くまま、あちこちのぞくもよし。一人とじっくり語るもよし。
 出展予定タイトル:「老化とがん」、「トマトって、なに?」、「不老不死のワルト・動物ベニクラグ」、「プラスチックでつくる太陽電池」、「お腹の中で子供を育てるサカナ」、「化学を武器にアルツハイマー病に挑む」、「英語で学ぶ大学授業が変える英語学習」、「津波被災者からのメッセージを読み解く」、「音楽から地域を語れるか?」、「開花の季節開花:花が一斉に咲くくみ」、「太陽エネルギー変換に挑戦」、「100℃で生育する超好熱菌」、「世界の言葉を知ろう「言語グリッド」」ほか

ちゃぶ台囲んで膝詰め対話

サイエンスカフェ

10:30-12:00 | 13:30-15:00

7件

ひとつのテーブルを囲んで研究にまつわるあんな話、こんな話。
お茶の気分で、ほっこりお話ししよう。
 出展予定タイトル:「CO₂を「ひかり」と「みず」でリサイクル!」、「いのちのバトン-体験型ヒト遺伝教室-」、「日本でヨーロッパについて語る?」、「未来の「クルマ」とその「社会」」ほか

お茶を片手に座談会

トークライブ

10:30-11:30 | 12:00-13:30 | 14:30-16:00

3本

それぞれのテーマに沿って、みんなで語り合しましょう。
 10:30-11:30「宇宙を見てゴカイを食べる?〜人類学×生物学×天文学〜」
 古澤拓郎(京都大学文学部アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授・人類学)×佐藤正典(鹿児島大学工学部理工学研究所 教授・生物学)×磯部洋明(京都大学宇部総合学術研究センター 特任准教授・宇宙物理学)
 12:00-13:30「震災映像の想像力と市井の人々〜京都府東大震災記録フィルムをめぐって〜」
 田中俊(京都大学防災研究所 特任助教・都市(計画)学・災害学)×大澤淳(東京国立近代美術館フィルムセンター 研究員)×小川貴人(せんだいメディアタクト 学芸員)×佐藤守弘(京都府立大学デザイン学部 教授・芸術学・視覚文化論)
 14:30-16:00「コトバのデータベースが社会を変える?：コーパスの意義と可能性を探る」
 荒川重子(京都大学文学部文学研究科 教授・言語学、コーパス言語学)×黒橋祐典(京都大学大学院情報科学部 教授・自然言語処理、知識情報処理)×佐藤恵子(京都大学文学部国語学・国語学総合センター 特任准教授・生命倫理学、漢学)

研究者の本棚

特設図書室

10:00-16:00

京大研究者お勧めの本を紹介・展示します。展示の他に、午前中は映像の上映・解説、午後はミニトークを予定。本や映像を介して研究者と対話してみませんか。
 11:30-12:30「東南アジア研究所の「映像ドキュメンタリー・プロジェクト」の紹介」
 Mario Ivan Lopez / マリオ・イバニ・ロペス(京都大学東南アジア研究科 准教授・人文学、比較文化論)
 13:30-14:00「お伽草子の世界〜常良結本・結巻を楽しむ〜」
 金光桂子(京都大学文学部国語学 准教授・国文学)

お問い合わせ
 京都大学研究開発部「国民との科学・技術対話」担当
 TEL: 075-753-2579
 E-mail: kenkyu-taiwa@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
 最新情報はWEBをご覧ください <http://www.kura.kyoto-u.ac.jp/event/27>

京都大学アカデミックデイ2014

みんなで対話する京都大学の日

2014年9月28日(日) 10:00-16:00

京都大学百周年時計台記念館




国民との科学・技術対話
Kyoto University

102 京都大学アカデミックデイ (2014年9月28日) 報告書


 Dialog with the Public

■ 5-3-3. 車内掲示ポスター（B3 サイズ）京都市バス・地下鉄



研究にも色々あるんだなあ。
なんでもこの研究を始めたのですか？
子供の頃にな...
え?! そんな研究があるの？

いま、こんな研究をしています。

これを発見するまでには、色々あって...
研究って、山あり谷ありなんだ！
なぜこの研究をしようと思ったの？
元々、こんなことに興味を持って...

京都大学アカデミックデイ2014
みんなで対話する京都大学の日
2014年9月28日(日)10:00-16:00
京都大学百周年時計台記念館 無料・申込不要
問合せ：京都大学研究国際部「国民との科学・技術対話」担当 TEL: 075-753-2579
最新情報はWEBをご覧ください「京都大学アカデミックデイ2014」で検索





研究者と立ち話 約 50件

ポスター／展示 *ガイドツアーあり(随時開催)

大学研究者、高校生による研究紹介です。
ポスターの前にいる研究者に話しかけてみてください。
気の向くまま、あちこちのぞくもよし。一人とじっくり語るもよし。
出展予定タイトル：「老化とがん」、「トマトって、なに?」、「不老不死のウルトラ動物ベニクラゲ」、「プラスチックでつくる太陽電池」、「お腹の中で子供を育てるサカナ」、「化学を武器にアルツハイマー病に挑む」、「津波被災者からのメッセージを読み解け」ほか

ちゃぶ台囲んで膝詰め対話 7件

サイエンスカフェ

ひとつのテーブルを囲んで研究にまつわるあんな話、こんな話。
お茶の間気分、ほっこりお話ししましょう。
出展予定タイトル：「CO₂を「ひかり」と「みず」でリサイクル!」、「いのちのボタン一体成型ヒト遺伝子室-」、「日本でヨーロッパについて語る?」、「未来の「クルマ」とその「社会」」ほか

お茶を片手に座談会 3本

トークライブ

「宇宙を見てゴカイを食べる?〜人類学×生物学×天文学〜」
「震災映像の想像力と市井の人々〜京大所蔵関東大震災記録フィルムをめぐって〜」
「コトバのデータベースが社会を変える?: コーパスの意義と可能性を探る」

研究者の本棚

特設図書室

京大研究者お勧めの本を紹介・展示します。展示の他に、午前中は映像の上映・解説、午後はミニトークを予定。本や映像を介して研究者と対話してみませんか。
映像上映・解説：「東南アジア研究所の「映像ドキュメンタリー・プロジェクト」の紹介」
ミニトーク：「お伽草子の世界 -奈良絵本・絵巻を楽しむ-」

主催：京都大学「学術研究支援室、研究国際部研究推進課、国民との科学・技術対話」ワーキンググループ）
後援：京都大学生涯協同組合、京都府教育委員会、大阪府教育委員会、奈良県教育委員会、滋賀県教育委員会

■ 5-3-4. ウェブサイト、フェイスブック等

- 京都大学学術研究支援室ホームページ
<http://www.kura.kyoto-u.ac.jp/event/27>
 開催案内とともに出展者リストを掲載しました。
- 京都大学学術研究支援室フェイスブック
<https://ja-jp.facebook.com/kuraoffice>
- 京都大学「研究大学強化促進事業」ホームページ（K. U. Research）およびフェイスブック
<http://research.kyoto-u.ac.jp/news/academic-supporter/>
<https://www.facebook.com/k.u.research>
 アカデミックデイ2014のブログ・レポートをしてくれる学生サポーター（K. U. Research 公式サポーター）を募集しました。

5-4. 報道・開催報告等

■ 5-4-1. 新聞

- 京都新聞 2014 年 9 月 29 日（月）社会
- 京都大学新聞 2014 年 10 月 16 日（木）

■ 5-4-2. ウェブサイト

- 京都大学学術研究支援室ホームページ
<http://www.kura.kyoto-u.ac.jp/act/79>
開催時の写真やアカデミックデイ賞の受賞者コメント、受賞ポスターを掲載しました。
- 京都大学「研究大学強化促進事業」ホームページ（K. U. Research）
http://research.kyoto-u.ac.jp/news/academicday_report/
アカデミックデイ 2014 に関するブログ・レポートを公開し、K. U. Research 編集部のコメントを掲載しました。
- やまざきゆにこ「グラフィックファシリテーション.jp」
<http://www.graphic-facilitation.jp/cp-bin/blog/index.php?eid=340>
グラフィックファシリテーターのやまざきゆにこさんが、座談会で作成された絵巻物を中心にアカデミックデイ 2014 の様子を紹介してくださいました。

6. 支援体制・準備スケジュール

6-1. 支援体制

「京都大学アカデミックデイ」は、京都大学による「国民との科学・技術対話」事業の一環として実施しています。支援体制は以下の通りです。

「国民との科学・技術対話」ワーキンググループ委員

中辻憲夫	物質－細胞統合システム拠点 (iCeMS)	教授
西村いくこ	理学研究科	教授
北野正雄	工学研究科	教授
植田和弘	経済学研究科	教授
楠見孝	教育学研究科	教授
伊勢田哲治	文学研究科	准教授
田中耕司	学術研究支援室	室長
川崎宏	研究国際部研究推進課	課長
中村一也	広報・社会連携推進室	室長

「国民との科学・技術対話」若手ワーキンググループ委員

水町衣里	物質－細胞統合システム拠点 (iCeMS)	特定研究員
元木環	情報環境機構／学術情報メディアセンター	助教
磯部洋明	宇宙総合学研究ユニット	特定准教授
江間有沙	白眉センター／情報学研究科	特定助教
白井哲哉	学術研究支援室	URA

京都大学URAネットワーク

神谷俊郎	南西地区URA室	URA
荒井祐介	本部構内（文系）URA室	URA
森下明子	学術研究支援室	URA
仲野安紗	学術研究支援室	URA
白井哲哉	学術研究支援室	URA
田中耕司	学術研究支援室	室長

研究国際部研究推進課

福元隆	研究国際部研究推進課研究助成掛
樺島彩波	研究国際部研究推進課研究助成掛

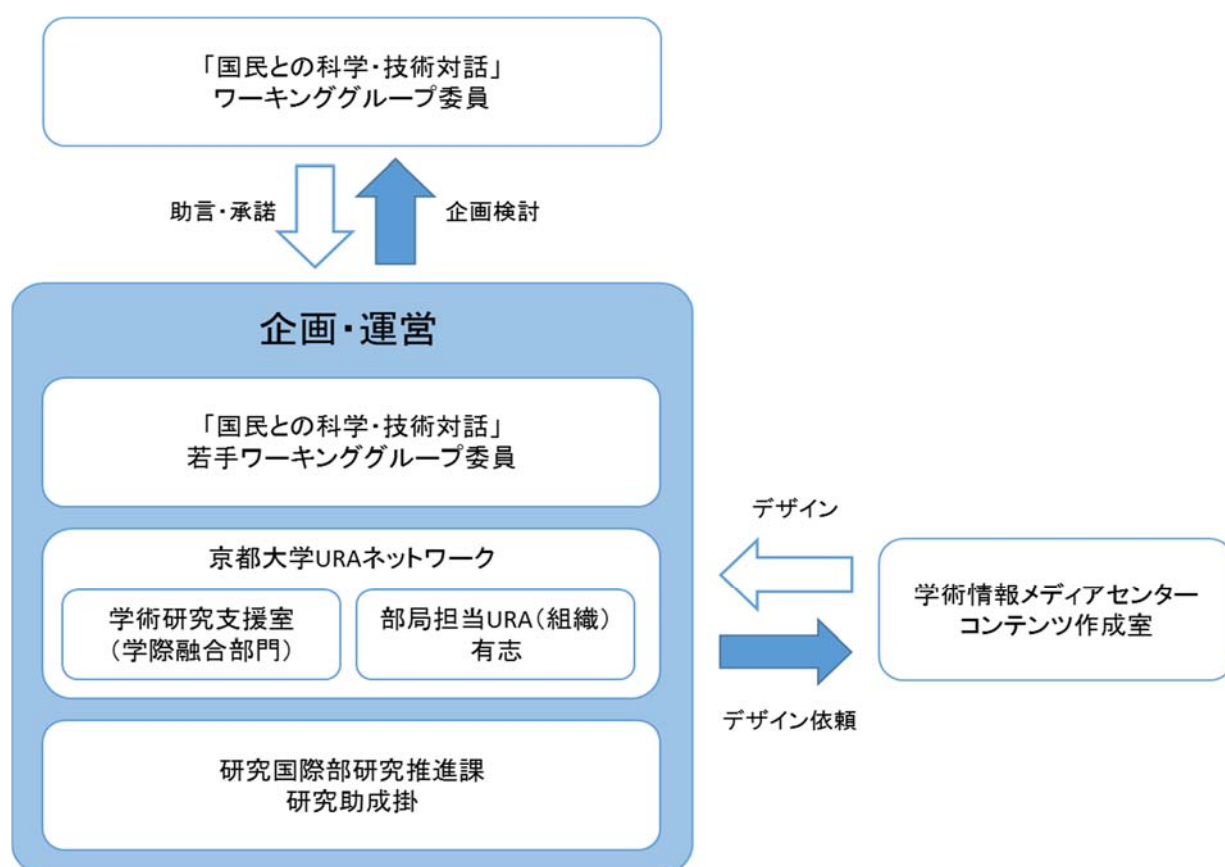
学術情報メディアセンター コンテンツ作成室

永田奈緒美	学術情報メディアセンター 教務補佐員
-------	--------------------

6-2. スタッフリスト

企画	「国民との科学・技術対話」若手 WG 京都大学URAネットワーク 研究国際部研究推進課
デザイン（広報・サイン・記念品）	学術情報メディアセンター コンテンツ作成室 元木環、永田奈緒美、奥村昭夫
学生サポーター	草場哲（大学院理学研究科 修士1回生） 倉田康平（農学部 3回生） 才木真太郎（生態学研究センター 博士課程1回生） 金岡歩美（理学部 2回生） 降旗大岳（理学部 2回生） 秋柴美沙穂（大学院薬学研究科 修士1回生）
写真撮影	大森貴生
監修	「国民との科学・技術対話」WG

図：運営体制



6-3. 準備スケジュール

2014 年	1 月	会場予約（京都大学百周年時計台記念館）
	5 月 上旬	第 1 回ミーティング（昨年度振り返り、今年度企画検討）
	6 月 上旬	第 2 回ミーティング（企画検討）
	中旬	出展要項作成
	下旬	出展公募開始
	7 月 上旬	京都大学ホームページ掲載依頼（開催告知）
	中旬	座談会登壇者・タイトル決定
	下旬	公募締切、高校出展審査 第 3 回ミーティング（参加研究者決定、参加高校決定） 高校への結果通知 参加研究者・高校への出展要項・出展申込書送付
	8 月 上旬	研究者公募最終締切 推薦図書リスト作成開始 学生アルバイトの募集
	中旬	出展申込書締切 学術研究支援室ホームページ開催告知
	下旬	ポスター・ツアーの詳細決定 出展ブースの配置決定 第 4 回ミーティング（進捗状況）
	9 月 上旬	事前説明会・アルバイト説明会（1 日、5 日） 生協打ち合わせ（研究者の本棚） 第 5 回ミーティング（進捗状況、最終案内確認） 最終案内作成
	中旬	最終案内送付 推薦図書リスト作成 参加研究者 WEB アンケートのデザイン作成 当日運営スタッフ人数・役割調整
	下旬	当日運営スタッフ事前説明会 当日配布資料作成（諸注意事項、ドリンクチケット、名札）
	27 日	夕方設営準備
	28 日	京都大学アカデミックデイ 2014
	10 月 上旬	報告書たたき台作成開始 学生レポート提出 参加研究者 WEB アンケート
	中旬	来場者アンケート・参加研究者アンケート集計 WEB にて開催報告簡易版掲載（京都大学ホームページ、京都大学学術研究支援室ホームページ）
	下旬	出展高校に参加証送付
	11 月	WEB にて座談会レポート掲載（KU Research）
	12 月	報告書送付

6-4. デザイン・制作物スケジュール

		出展募集チラシ	ノベルティ	開催チラシ ・ ポスター	会場配置案 ・ 会場サイン ・ 当日プログラム	来場者アンケート
2014 年	1 月					
	5 月 上旬					
	6 月 上旬					
	中旬	作成 ↓				
	下旬	納品				
	7 月 上旬		作成 ↓			
	中旬			作成 ↓		
	下旬		外部発注 ↓			
	8 月 上旬			入稿・印刷 (外部発注) ↓		
	中旬			納品	作成 ↓	
	下旬					
	9 月 上旬				入稿 ↓	作成 ↓
	中旬					入稿 ↓
	下旬		納品		納品	納品

京都大学アカデミックデイ 2014

『研究者の本棚』ブックリスト

〈目次〉

A 今の仕事（研究、進路）を選ぶきっかけになった本	p. 109
B 今ハマっている本（誰かこの本について話したい）	p. 113
C 若者にお勧めしたい本	p. 116
D 自分の研究に関連して紹介したい本	p. 120
座談会・本トークの登壇者からの推薦図書	p. 125
もっと知りたい！研究者の本棚 ～人文・社会科学者（地域研究者）の本棚～	p. 131

後援：京都大学生協同組合

協力：京都府立図書館、京都大学附属図書館

A 今の仕事（研究、進路）を選ぶきっかけになった本

凡例

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

①推薦者のコメント

②出展代表者（所属）「出展ブース番号：出展タイトル」

『黒い虹―阪神大震災遺児たちの一年』（あしなが育英会編、廣済堂出版）※

①兵庫県南部地震の被害を目の当たりにしたことは、地震の研究をすることへの大きな動機づけになりました。

②加納靖之（京都大学防災研究所地震予知研究センター）「No.3：過去の地震にまなぶ」

『地震と断層の力学 第二版』（C.H.ショルツ著、柳谷俊・中谷正生訳、古今書院）※

①英語版はゼミで必死に勉強した。自分の指導教員が思いを込めて翻訳している。

②加納靖之（京都大学防災研究所地震予知研究センター）「No.3：過去の地震にまなぶ」

『精神と物質―分子生物学はどこまで生命の謎を解けるか』（立花隆・利根川進、文春文庫）※

推薦者1：

①ノーベル医学生理学賞を受賞した利根川進氏の研究内容を、立花隆氏がインタビュー形式でわかりやすく解説している好著。分子生物学のすごさを体感し、これを用いた研究をしたいと強く思ったきっかけとなった本です。

②跡見晴幸（京都大学大学院工学研究科）「No.5：100℃でも生育可能な超好熱菌」

推薦者2：

①分子生物学への興味を誘ってくれたとともに、研究者に対する憧れを抱かせてくれた本です。

②眞田昌（京都大学大学院医学研究科）「No.45：遺伝子からみた老化とがん」

推薦者3：

①一流のジャーナリストが一流の科学者にインタビューをした貴重な一冊。

②寺村謙太郎（京都大学大学院工学研究科）「No.51：CO2を”ひかり”と”みず”でリサイクル！」

『沈黙の春』（レイチェル・カールソン著、青樹繁一訳、新潮社）※

①低リスクであり、便利で使いやすいと考えられていたものが、場合によっては、生体濃縮され、人間を含めた生態系に毒性をもたらす可能性を示唆した歴史的な名著。批判もあるが、一度は読んでおきたい。

②佐藤文彦（京都大学大学院生命科学研究科）「No.7：植物の薬用成分を効率的につくる」

『「中央ヨーロッパ」を求めて：東欧革命の根源を探る』（ジャック・ルブニク著、浦田誠親翻訳、時事通信社）※

①1989年に大学に入学し、東欧革命を見て旧東ヨーロッパの勉強を始めました。本書は、その頃に読んだ本ですが、今見ても読むに値する書物だと思います。

②福田宏（京都大学地域研究統合情報センター）「No.10：音楽から地域を語れるか？」

『春の祭典：第一次世界大戦とモダン・エイジの誕生』（モードリス・エクスタインズ著、金利光訳、みすず書房）※

①第一次世界大戦がヨーロッパ世界に与えた衝撃を、音楽などの文化の側面から捉えた本。悲惨な戦争体験が人々の心にいかに強い影響を与えるかという点が印象的でした。

②福田宏（京都大学地域研究統合情報センター）「No.10：音楽から地域を語れるか？」

『時空のさざ波―重力波を求めて―』（坪野公夫著、丸善）

①この本がきっかけで、大学院の入試の面接で重力波の話をしました。そのときは自分が重力波の研究をすることになるとは思ってもいなかったのですが。

②田中貴浩（京都大学大学院理学研究科）「No.11：重力波物理学の未来」

『学研の図鑑 宇宙』（学習研究社）

①宇宙すげー、ロケット格好良いなあ。小学校の理科の授業での太陽観測と合わせて、非常に刺激になった。天文ガイド（誠文堂新光社）を買うようになり、下手な天体写真を撮るようになった。

②田中貴浩（京都大学大学院理学研究科）「No.11：重力波物理学の未来」

『てんぎゃん』(岸大武郎著、集英社)

①「純粋な知的好奇心で動く！」ということの素晴らしさを教えてくれた本。南方熊楠は英科学誌 Nature に 51 報の掲載実績を持つ、現在においても日本人のレコードホルダー！和歌山県白浜町の「南方熊楠記念館」(隣の「京都大学付属白浜水族館」も併せて)は生物系研究者なら一度は行くべき聖地巡礼です。

②飯田敦夫(京都大学再生医科学研究所)「No.13: お腹の中で子供を育てるサカナ」

『生態人類学を学ぶ人のために』(秋道智彌・市川光雄・大塚柳太郎編、世界思想社) ※

①世界各地で人びとが自然環境とどう関わり生きてきたのかを、多くの研究者がフィールドワークをもとに描いた本です。高校生のときに本書を読んだことがきっかけで、発表者(泉)は大学や大学院で人類学を学びました。

②田嶋潔／泉直明(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科／京都大学アフリカ地域研究資料センター)「No.14: 東アフリカ牧畜民: サバンナを生きる」

『死の病原体 プリオン』(リチャード・ローズ著、桃井健司・網屋慎哉訳、草思社) ※

①狂牛病が猛威を振るった時代に出版された本。プリオンという未知の「何か」を探るべく、科学者たちが名探偵のようにパズルのピースを集めていく様は、まるでサスペンスのよう。これをきっかけに、科学者という仕事に興味を持った。

②諸熊奎治(京都大学福井謙一記念研究センター)「No. 17: コンピュータで化学反応の世界を探る」

『ドラえもん』(藤子・F・不二雄著、小学館) ※

①振り返ってみると、科学へのあこがれは小さい時に読んだドラえもんが最初のような気がします。2112 年のドラえもん完成までに、タケコプターは完成するのでしょうか？

②増田亮(京都大学原子炉実験所)「No.21: 原子核からのぞく世界」

『物理の散歩道』(ロゲルギスト著、岩波書店) ※

①日常の事象をさまざまな角度から考えることの面白さがわかります。お勧めです。

②増田亮(京都大学原子炉実験所)「No.21: 原子核からのぞく世界」

“L'écriture et la différence” (Derrida, J., Seuil) (『エクリチュールと差異』(ジャック・デリダ著、合田正人・谷口博史訳、法政大学出版局) ※

①この本に所収の「暴力と形而上学」という論文で、「他者の他者性を無視して、自らと同じものと見なすことは、他者に対する暴力ではないか」と考えた思想家 E. レヴィナスに対して、J. デリダは「そのような暴力がなければ、私たちは暴力があったということすら認知できないのではないか」と批判します。教員養成課程の大学に通っていた私は、この本を読んで「では教育とはいかなる営為なのか？」という疑問を持ち、研究を志しました。

②平田知久(京都大学大学院人間・環境学研究科)「No.28: アジア・移動・インターネットカフェ」

“L'apparition du Livre” (Febvre, L., and Martin, H-J., Albin Michel) (『書物の出現〈上〉〈下〉』(リュシアン・フェーブル、アンリ=ジャン・マルタン著、関根素子他訳、ちくま学芸文庫) ※

①書物というメディアがどのようにかたち作られたかを、社会史という視点から明らかにした古典とも言える本です。著者の L. フェーブルと H-J. マルタンは、私たちが知っているメディアが様々な「モノ」から出来ていることを、改めて気づかせてくれます。紙、インク、活版の歴史を辿るという彼らの視点は、私の研究では、パソコンやケータイ(そしてそれらが利用される場所)を「モノ」として捉えるという考え方に活かされています。

②平田知久(京都大学大学院人間・環境学研究科)「No.28: アジア・移動・インターネットカフェ」

『ホーキング、宇宙を語る』(スティーヴン・W・ホーキング著、林一訳、ハヤカワ文庫) ※

①なぜか家であって、高校の時によく分からないながらもワクワクしながら読んでいたのを覚えています。かろうじて分かった相対性理論によると面白い現象がたくさんあって、これが全て科学的に正しいのかと思うと胸が熱くなりました。

②中村輝石(京都大学大学院理学研究科)「No.29: ニュートリノ最先端」

『現代倫理学入門』(加藤尚武著、講談社学術文庫)

①学部生のときに読んで倫理学を学ぶことにしました。現代の社会的問題を考える上で哲学が重要であることを教え

てくれる本です。

②児玉聡（京都大学大学院文学研究科）「No. 31：医療や科学技術の倫理について考える」

『複合材料』（アンソニー・ケリー著、村上陽太郎訳、丸善出版）

①材料どうしを組み合わせると元の材料以上の性能が得られる仕組みが書かれている。

②田中庸裕／田中功（京都大学実験と理論計算科学のインタープレイによる触媒・電池の元素戦略研究拠点／京都大学構造材料元素戦略研究拠点）「No.35：元素戦略プロジェクト」

『耐熱合金のおはなし』（田中良平著、日本規格協会）

①高温耐熱材料がいかに CO2 削減、省エネルギーに寄与しているか、どのようにして材料設計が行われているのかなどについて初心者にもわかりやすく書かれた本で、非常に感銘を受けた。

②乾晴行（京都大学大学院工学研究科）「No.39：炎を制する一超耐熱構造材料」

『モモ』（ミハヤエル・エンデ著、大島かおり訳、岩波書店）※

①時間とは何か、クロノスとカイロスの違い、など子供のころは子供なりに、大人になってからも改めて考えさせられる本。

②延原章平（京都大学大学院情報学研究科）「No.40：水中生物の3次元自由視点映像」

『宇宙からの帰還』（立花隆著、中公文庫）※

①小学生の自分にとって、ロボットが戦う SF アニメの世界でしかなかった宇宙という環境について、まったく異なる見方を与えてくれたことを強く覚えている。

②延原章平（京都大学大学院情報学研究科）「No.40：水中生物の3次元自由視点映像」

『海底2万マイル』（ジュール・ベルヌ著、加藤まさし訳、講談社青い鳥文庫）※

①未知の領域である海底世界を、リアルに描写された潜水艦で冒険する SF 小説。後になって、約 150 年前に書かれた作品と知って驚いた。

②延原章平（京都大学大学院情報学研究科）「No.40：水中生物の3次元自由視点映像」

『感情の自然』（山形頼洋著、法政大学出版局）

①精緻な議論が端正な日本語によって展開され、それと同時に、批判的精神と哲学的独創性が見事に調和した著作です。

②服部敬弘（京都大学大学院文学研究科）「No.42：「ある」の謎—フランス現象学の挑戦—」

『若き数学者のアメリカ』（藤原正彦著、新潮文庫）※

①高校時代、1 年間のホームステイ留学中に読んだ本。自分が日本人であることを忘れて現地社会の一員になるぞという意気込みで留学したが、留学先は多民族社会のマレーシア、しかもホームステイ先は民族的マイノリティで、「現地社会の一員になる」というのはどの人たちと同じになることなのか悩んだ。本書で「アメリカでは日本人らしく振舞うのが現地社会に馴染むことだ」と読み、その意味を考えることが後の研究につながった。

②山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）「No.43：津波被災者からのメッセージを読み解け」

『殺される側の論理』（本多勝一著、朝日文庫）※

①子どもの頃から常識や慣例となっていた考え方や行動の一部は、実は米国の常識や慣例をそのまま持ち込んだものだという見方を本書で知った。ローマ字で名前を書くときに姓・名ではなく名・姓の順に書くこと、数字を書くときに4桁ごとではなく3桁ごとにカンマで区切ることなどはじめ、1つ1つの言葉をどう書くかに書き手の意識が反映されるという考え方を知り、発せられた言葉の行間を読む習慣が身についた。

②山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）「No.43：津波被災者からのメッセージを読み解け」

『利己的な遺伝子』（リチャード・ドーキンス著、日高敏隆他訳、紀伊國屋書店）※

①進化や自然選択を遺伝子の視点から解釈した有名な本。完読できたかの記憶は定かではないですが、「生物は遺伝子によって利用される"乗り物"に過ぎない」というセンセーショナルな表現に、生命の本質は何なんだろうという興味を抱いたのが、今の仕事につながっているかもしれません。

②眞田昌（京都大学大学院医学研究科）「No.45：遺伝子からみた老化とがん」

『ブワナ・トシの歌—東アフリカの湖と村びとたち』(片寄俊秀著、社会思想社) ※

① アフリカに興味を持ち始めた頃、この本をきっかけに、アフリカへの現地調査(フィールドワーク)への憧れをもつようになりました。フィールドワーカーが直面する、四苦八苦や、苦勞・感動の物語が描かれています。

② 西本希呼(京都大学白眉センター/東南アジア研究所)「No.47: 言語多様性 vs. 生物多様性」

『にほんご』(安野光雅編、福音館書店) ※

① 幼稚園の頃、この本を手に取り、多様な世界の文字と言語、世界の民族、日本手話、点字、識字の普及などを知り、言語に関心をもった最初の本です。

② 西本希呼(京都大学白眉センター/東南アジア研究所)「No.47: 言語多様性 vs. 生物多様性」

『言葉を復元する—比較言語学の世界』(吉田和彦著、三省堂)

① 私が京都大学にくるきっかけとなった本です。元指導教官による著作。

② 西村周浩(京都大学白眉センター)「No.49: 日本でヨーロッパについて語る？」

『サンスクリット文法』(辻直四郎著、岩波書店) ※

① インドの古典語サンスクリットの授業で参考図書だった本。担当の先生の丁寧な説明が忘れられません。

② 西村周浩(京都大学白眉センター)「No.49: 日本でヨーロッパについて語る？」

B 今ハマっている本（誰かはこの本について話したい）

凡例

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

- ① 推薦者のコメント
- ② 出展代表者（所属）「出展ブース番号：出展タイトル」

『病気はなぜ、あるのか—進化医学による新しい理解』（ランドルフ・M. ネシー、ジョージ・C. ウィリアムズ著、長谷川真理子他訳、新曜社）※

- ① 今回の出展のテーマと平行して、進化精神医学分野の研究をしており、そちらの研究に関連する文献。
- ② 後藤幸織（京都大学霊長類研究所）「No.1：食と生薬による健康」

“Textbook of Evolutionary Psychiatry: The Origins of Psychopathology” (Martin Brune, Oxford University Press)

- ① 今回の出展のテーマと平行して、進化精神医学分野の研究をしており、そちらの研究に関連する文献。
- ② 後藤幸織（京都大学霊長類研究所）「No.1：食と生薬による健康」

『進化精神医学—ダーウィンとユングが解き明かす心の病』（アンソニー スティーヴンズ、ジョン・スコット プライス著、小山毅他訳、世論時報社）※

- ① 今回の出展のテーマと平行して、進化精神医学分野の研究をしており、そちらの研究に関連する文献
- ② 後藤幸織（京都大学霊長類研究所）「No.1：食と生薬による健康」

『天才と分裂病の進化論』（デイヴィッド ホロビン著、金沢泰子訳、新潮社）※

- ① 今回の出展のテーマと平行して、進化精神医学分野の研究をしており、そちらの研究に関連する文献
- ② 後藤幸織（京都大学霊長類研究所）「No.1：食と生薬による健康」

『科学はどこまでいくのか』（池田清彦著、ちくま文庫）

- ① コメントなし。
- ② 加納靖之（京都大学防災研究所地震予知研究センター）「No.3：過去の地震にまなぶ」

『猫楠』（水木しげる著、角川書店）

- ① 和歌山県の「南方熊楠記念館」を訪れた際に購入した本。熊楠の奇人変人さが水木しげるによって更にアレンジされており、とても楽しんで読むことが出来ました。
- ② 飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所）「No. 13：お腹の中で子供を育てるサカナ」

『テラフォーマーズ』（作：貴家悠作、画：橘賢一、集英社）

- ① ストーリーについては言及しませんが、とにかく作中に珍獣が解説付きで登場するのがアツい！登場した生物は欠かさずネット検索で調べて、解説が本当かどうかを確認しています（笑）
- ② 飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所）「No. 13：お腹の中で子供を育てるサカナ」

『人と動物の人類学』（奥野克巳・山口未花子・近藤祉秋編、春風社）※

- ① 日本でも、アフリカでも、野生動物による被害や社会問題が増えています。それらの問題を解決するために、どのような対策をとったら良いのでしょうか。本書は人類学の視点から、世界各地のフィールドで得た一次資料によって、人と動物の関係を描いています。本書はわたし（田）に、歴史・文化・社会的な文脈のなかで本来あった、人と動物の多様なかわりを深く考えさせました。人と動物の関係について興味がある方におすすめします。
- ② 田嶋潔／泉直明（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科／京都大学アフリカ地域研究資料センター）「No.14：東アフリカ牧畜民：サバンナを生きる」

『ご冗談でしょう、ファインマンさん』（リチャード P ファインマン著、大貫昌子訳、岩波書店）※

- ① 研究って楽しいんだ！という純粋な気持ちを思い出させてくれる本。難しい話は出てきません。物理と縁遠い人にも楽しんでもらえる一冊。
- ② 諸熊奎治（京都大学福井謙一記念研究センター）「No. 17：コンピュータで化学反応の世界を探る」

『弱いつながり——検索ワードを探す旅』（東浩紀著、幻冬舎）※

①学術書として見た場合の細かい内容については措くとして、この本で東浩紀さんが現代社会に投じたメッセージは真剣に受け取られ、考えられるべきだと思います。そのメッセージは、「現代のインターネットの検索システムでは、世界は人々の関心の範囲に収束し、そのような世界で人々は充足してしまう。それがまずいと思う人は、検索ワードを拡げるために旅に出て、観光客になろう」というものです。皆さんは、これにどう応えますか？

②平田知久（京都大学大学院人間・環境学研究科）「No. 28：アジア・移動・インターネットカフェ」

“**Adieu: à Emmanuel Lévinas**” (Derrida, J., Galilée) (『アデュー—エマニュエル・レヴィナスへ』(ジャック・デリダ著、藤本一勇訳、岩波書店) ※

①E. レヴィナスの死を受けて、J. デリダがレヴィナスの思想を「歓待（他者の受け入れ）」というキーワードから考察した本です。私としては、この本に「ハマってる」というよりも、私を研究の途へと誘った二人が、紆余曲折を経た私の現在のネットカフェ研究で、最後に問題になることをあらかじめ知っていたかのように先回りされたという意味で、むしろ「ハメられた」気分です。しかし、改めて「おもてなし」とは何なのでしょう？ ① No. 28、②アジア・移動・インターネットカフェ

②平田知久（京都大学大学院人間・環境学研究科）「No. 28：アジア・移動・インターネットカフェ」

“**Christian Moderns : Freedom and Fetish in the Mission Encounter**” (Webb Keane, University of California Press)

① カルヴァン派の宣教師が東南アジアでの布教を通して直面した問題を分析していますが、この本を読むと今日プロテスタント的考え方がいかに広く（非キリスト教徒社会にも）行き渡っているか思い知らされます。わたしたちが日々にげなく使う「近代」や「自由」という言葉の裏にも、プロテスタント派キリスト教の言語観や世界観の影響を認めることができるかもしれません。（今村）

②今村真央（京都大学東南アジア研究所）「No.33：東南アジア研究所は何を研究している？」

“**The Language of the Gods in the World of Men: Sanskrit, Culture, and Power in Premodern India**” (Sheldon Pollock, University of California Press)

①近代以前、製本技術も未熟な時代に、サンスクリット語やラテン語は「神の言葉」もしくは「世界語」として特権的な立場にあり、極めて広い地域に及ぶ影響力を持っていました。しかしその後、近代においてそのような言語は一気に衰退してしまいます。この衰退とともに現れたのがいわゆる「現地語」や「国語」ですが、この歴史的変遷はいかにして可能になったのでしょうか。「現地語」がいかにして形成され公認されるようになったか、世界史的な視点から分析しています。（今村）

②今村真央、伊賀司（京都大学東南アジア研究所）「No.33：東南アジア研究所は何を研究している？」

『私とは何か「個人」から「分人」へ』（平野啓一郎著、講談社）

①「個人」とか「自分」ということについて、平易なことばで面白い着想点から考察している。

②田中庸裕／田中功（京都大学実験と理論計算科学のインタープレイによる触媒・電池の元素戦略研究拠点／京都大学構造材料元素戦略研究拠点）「No.35：元素戦略プロジェクト」

『ミツバチの会議—なぜ常に最良の意志決定ができるのか』（トーマス・シーリー著、片岡夏実訳、築地書館）※

①北野正雄先生からご紹介いただいたのですが、はまっています。100匹を超える探索ミツバチが、次の巣場所の候補を選んできて、それぞれが意見を出し合い、「議論」の上で、原則全員一致で決定しているなんて、驚きでしょう？

②竹内繁樹（京都大学大学院工学研究科）「No.36：光子のふしぎと量子情報科学」

『元素戦略』（中山智弘著、ダイヤモンド社）※

①「材料を制する者が世界を制する。」元素を原子スケールでマニピュレートすることで、これまでにない素晴らしい材料をいかに作り上げるかを考えさせられる。

②乾晴行（京都大学大学院工学研究科）「No. 39：炎を制する—超耐熱構造材料」

『ゴジラとヤマトとぼくらの民主主義』（佐藤健志著、文藝春秋）※

①子どもの頃から好きだったウルトラマンなどのテレビ番組や映画の背景に、アメリカの傘の下で平和を享受しているという日本社会の意識などが読み解けるという本。何気ない大衆娯楽でも分析の仕方しだい時代性や社会思想を

読み解くことができることに驚き、それまで考えもしなかった自分の意識を当てられたことやその手際の鮮やかさに驚く一方で、その読み解きに違和感が残り、別の読み解き方ができないかとずっと考えている。

②山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）「No.43：津波被災者からのメッセージを読み解け」

『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』（ベネディクト・アンダーソン著、白石さや・白石隆訳、NTT出版）※

①1990年代頃の大学生の必読書という雰囲気があった。中身をよく読まずに「国民とは幻想の共同体である」という主張だと誤読されたりもしたが、「正真正銘」のナショナリズムは排他的ではなく自己解放をもたらす原理であるとしてナショナリズムを肯定的に捉えている。21世紀に入って世界各地で排他的なナショナリズムが勢いを増しているように見えるが、それでも本書の議論はなお有効なのか、今こそ改めて考えてみたい。

②山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）「No.43：津波被災者からのメッセージを読み解け」

『数学はなぜ生まれたか？』（柳谷晃著、文春新書）※

①言語と数学、科学と言語、一見して遠い分野に聞こえるかもしれない。しかし、私が今挑んでいる研究は、無文字社会、伝統社会を維持している社会での数概念や、自然認識とその実生活への応用である。

②西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所）「No.47：言語多様性 vs.生物多様性」

『シャーマンの弟子になった民族植物学者の話 上・下』（マーク・プロトキシ著、屋代通子訳、築地書館）※

①民族植物学者である著者自身のフィールドワークに基づく物語。植物や自然を利用して食用や新薬にしていく過程、癒しの植物、現地の植物利用から現代社会の実例まで記述されている。呪医との出会いを求めて南米アマゾンを舞台にした物語。

②西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所）「No.47：言語多様性 vs.生物多様性」

『カラー図解 アメリカ版 大学生物学の教科書 第2巻 分子遺伝学（ブルーボックス）』（デイヴィッド・サダヴァ他著、石崎泰樹他監修、浅井将他訳、講談社）※

①アメリカの大学で使われている生物の教科書から分子遺伝学分野を抽出して翻訳したものです。え？大学の教科書？なんだか難しそう。と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、読んでみると以外にもすんなり内容が頭に入ってきます。高校の教科書や図説では物足りないと感じている高校生、高校で生物の勉強は終えてしまったけれどもちょっと興味があるな—という社会人の方、幅広い方に楽しんでいただければ一冊です。

②和田敬仁（京都大学大学院医学研究科）「No.48：いのちのバトナー体験型ヒト遺伝教室」

『宗教生活の原初形態＜上＞＜下＞』（エミル・デュルケム著、古野清人訳、岩波書店）※

①長らく読みかけの本。全体像がつかみにくくて悩んでいますが、個々の説明は考えさせられます。

②西村周浩（京都大学白眉センター）「No.49：日本でヨーロッパについて語る？」

『金枝篇』（J. G. フレイザー著、吉川信訳、筑摩書房）※

①民俗学者・柳田國男にも影響を与えた本。人類学の傑作と言われています。自ら現地調査を行っていない点がしばしば批判の対象となりますが、著者はギリシア・ローマの古典学者でもあります。その方面の知識量は絶大です。

②西村周浩（京都大学白眉センター）「No.49：日本でヨーロッパについて語る？」

C 若者にお勧めしたい本

凡例

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

- ① 推薦者のコメント
- ② 出展代表者（所属）「出展ブース番号：出展タイトル」

『縛られた巨人—南方熊楠の生涯』（神坂次郎著、新潮社）※

- ① 若者には、かつていた（または今もいる）すごい「学者」の人生伝を読んで触発してもらいたい。
- ② 後藤幸織（京都大学霊長類研究所）「No.1：食と生薬による健康」

『完全なる証明—100万ドルを拒否した天才数学者』（マーシャ・ガッセン著、青木薫訳、文藝春秋）※

- ① 若者には、かつていた（または今もいる）すごい「学者」の人生伝を読んで触発してもらいたい。
- ② 後藤幸織（京都大学霊長類研究所）「No.1：食と生薬による健康」

『岩波ジュニア科学講座〈第8巻〉変動する地球』（斎藤靖二・綱川秀夫著、岩波書店）※

- ① 地球科学の全体をざっくり学ぶのによいと思います。
- ② 加納靖之（京都大学防災研究所地震予知研究センター）「No.3：過去の地震にまなぶ」

『極限環境の生き物たち』（大島泰郎著、技術評論社）※

- ① 極限環境に生息する微生物を体系的に、専門外の方にもわかりやすくまとめられている。生物がいかに多様であるかが実感できる。
- ② 跡見晴幸（京都大学大学院工学研究科）「No.5：100℃でも生育可能な超好熱菌」

『文明崩壊』（ジャレド・ダイヤモンド著、楡井浩一訳、草思社文庫）※

- ① イースター島から現代中国までの世界中の社会・文明を取り上げ、文明崩壊の原因について縦横無尽に語る本。前作『銃・病原菌・鉄』と併せ、是非一読をお勧めしたい本。
- ② 福田宏（京都大学地域研究統合情報センター）「No.10：音楽から地域を語れるか？」

“On the Electrodynamics of Moving Bodies” (Albert Einstein)

- ① 本ではなく論文（原論文の英訳版）だが、こんな風に新しい理論が作られるのか！と感動する。
<http://www.fourmilab.ch/etexts/einstein/specrel/www/>
- ② 田中貴浩（京都大学大学院理学研究科）「No.11：重力波物理学の未来」

“Current Biology” (Cell press) ※

- ① 生物学全般を扱う隔週刊の学術雑誌です。なかなかの頻度で、一般目線からも興味深い論文（例、「フンコロガシは天の川を目印に移動する」「タコの足はなぜお互いに絡まらないのか？」「イカにも痛覚がある」「メスが雄性生殖器を持つ虫がいる」）が掲載されます。インターネット等で日本語の要約記事を読むのもいいですが、原著論文を英語で読むとまた違った味わいがあります。
- ② 飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所）「No.13：お腹の中で子供を育てるサカナ」

『ぞりん』（井口尊仁・石黒謙吾著、扶桑社）

- ① 「ぞりん」というのは、ゾウとキリンを組み合わせたCGのことです。この本は、そんな架空の動物の写真集です。これは若者というか、未就学のお子さんを持つお父さんお母さんにオススメです。以前、知り合いの子供（当時2歳くらい）にプレゼントしたら非常に気に入ってくれて、動物園に行くたびに「ぞりんはどこ？」と言って両親を困らせ、僕のところにクレームが入りました（笑）
- ② 飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所）「No.13：お腹の中で子供を育てるサカナ」

『京大式 フィールドワーク入門』（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・東南アジア研究所著、NTT出版）

- ① 人類学や地域研究のフィールドワークにおいて、自分の研究感心を解明するために、現場で得られた情報をどう整理すればよいのか。本書は、そのことを解説した入門書です。本書の大きな特徴は、論文を読んだだけではわからないような、研究者の試行錯誤のプロセスを示していることです。発表者（泉）は、大学院で本格的に研究やフィール

ドワークをはじめるときに本書を参考にしました。

- ②田曉潔／泉直明（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科／京都大学アフリカ地域研究資料センター）
「No.14：東アフリカ牧畜民：サバンナを生きる」

『二人で紡いだ物語』（米沢富美子著、中央公論新社）※

- ①元日本物理学会会長の米沢富美子先生の自伝（武勇伝）。研究に行き詰った時、研究と家庭の両立に悩んだ時、たくさんの勇気をくれる本です。たまに飛び出る旦那様の名言が秀逸。
②諸熊奎治（京都大学福井謙一記念研究センター）「No.17：コンピュータで化学反応の世界を探索」

『中学や高校の歴史の教科書・資料集・用語集』

- ①外国人さんと話すときに、自国の歴史や文化・その人の国や周辺国の歴史や文化を知っていると話が弾みます。理系文系関わらず、外国人さんと関わるならば、お勧めです。
②増田亮（京都大学原子炉実験所）「No.21：原子核からのぞく世界」

『虚数の情緒』（吉田武著、東海大学出版会）※

- ①考える力を持った人を鍛えたいと言う著者の情熱がほとばしる逸品です。
②増田亮（京都大学原子炉実験所）「No.21：原子核からのぞく世界」

『ウィーバー 分子生物学』（ロバート・F・ウィーバー著、杉山弘他監訳、伊藤伸子他訳、化学同人）※

- ①百科事典のように分子生物学に関する事項について、実験データに基づいて詳しく書かれた専門書です。特に、専門知識を深めるための指針として、分子生物学を志す若い研究者に本著を推薦します。
②板東俊和（京都大学大学院理学研究科）「No.25：DNAオリガミを使ってできること」

“The House of Earth” (Buck, P., S., Moyer Bell and its subsidiaries) (『大地（一）（二）（三）（四）』（小野寺健訳、岩波文庫）※

- ①著者のP.バックがノーベル文学賞を受賞した小説で、私は大学生のときに、一週間ばかり講義そっちのけでこの本を読んでいました。歴史に翻弄される近現代の中国の農民の生活と、彼らの生活の糧である大地や家をめぐる叙述の苛烈さについて様々に心を巡らせてみてください。加えて、インターネットで覆われたとされるこの世界で、人々の生活について知ったり考えたりする意味を、改めて考えてみてほしい、とも思っています。
②平田知久（京都大学大学院人間・環境学研究科）「No.28：アジア・移動・インターネットカフェ」

“Global Cinderellas: Migrant Domestic and Newly Rich Employers in Taiwan” (Lan, P-C., Duke University Press)

- ①台湾国立大学のP.C.ランさんによる、台湾の新中間層の家族と、そこで家政婦として雇われるフィリピン人・インドネシア人女性の生活についてのフィールド・インタビュー調査をまとめた本です。少子高齢化に歯止めがかからず、今まで家族が担ってきた様々な機能をアウトソーシングしつつある日本にとって、アジアの他の先進国・先進地域でなされてきた「外国人受入」にかんする調査は、先例として学ぶに値するものだと思います。
②平田知久（京都大学大学院人間・環境学研究科）「No.28：アジア・移動・インターネットカフェ」

『宇宙素粒子物理学』（C・グルーペン著、小早川恵三訳、丸善出版）※

- ①宇宙・素粒子の最先端な面白い話がだいたい書いてあります。宇宙や素粒子に進もうかなと考えている学生さんは一度読んでみて下さい。楽しそうな分野が多すぎて進路を決めるのが悩ましくなります（笑）
②中村輝石（京都大学大学院理学研究科）「No.29：ニュートリノ最先端」

『素粒子の世界』（秋本祐希著、洋泉社）※

- ①宇宙素粒子の最先端の実験がかわいいイラストつきで（←重要）色々紹介してあります。素粒子実験に興味があるならとっても参考になります。ちなみに、私が博士号を取得したNEWAGE実験についても書いてあります。
②中村輝石（京都大学大学院理学研究科）「No.29：ニュートリノ最先端」

『雪』（中谷宇吉郎著、岩波文庫）※

- ①雪の結晶を最初に人工的に実現した、中谷先生の話は聞いたことがありませんが、その研究のエピソードは、とても楽しいです。
②竹内繁樹（京都大学大学院工学研究科）「No.36：光子のふしぎと量子情報科学」

『物理学はいかに創られたか』（アインシュタイン、インフェルト著、石原純訳、岩波書店）※

①アインシュタインが、物理学を中心にした自然科学がどのように発展してきたかを、ほんとうに簡明に書いてくださった本です。その簡潔さには感動します。非常におすすめです。

②竹内繁樹（京都大学大学院工学研究科）「No.36：光子のふしぎと量子情報科学」

『航空の世紀』（吉川康夫著、技報堂出版）

①航空機における耐熱材料の重要性を系統的に理解するのに最適の書。

②乾晴行（京都大学大学院工学研究科）「No.39：炎を制する一超耐熱構造材料」

『明文術 伝わる日本語の書きかた』（阿部圭一著、NTT 出版）※

①日本人で論理的でわかりやすい日本語が書ける人は多くありません。この本は伝わりやすい日本語の書き方を重点的にレクチャーしてくれます。大学のレポートや小論文などにおすすめです。

②大谷雅之（京都大学大学院情報学研究科）「No. 41：世界の言葉を繋ぐ「言語グリッド」」

『思考する機械コンピュータ』（W.Daniel Hillis 著、倉骨彰訳、草思社）※

①コンピュータ初学者に、コンピュータの原理から応用たる人工知能までわかりやすく解説しています。この本を読んでおくとその後の勉強にも役立ちます。

②大谷雅之（京都大学大学院情報学研究科）「No. 41：世界の言葉を繋ぐ「言語グリッド」」

『告白』（アウグスティヌス著、服部英次郎訳、岩波書店）※

①自分の罪と対峙しつつ、神との対話のなかで、真理を真摯に探し求める姿は、心打たれると同時に、ヨーロッパの伝統的な思索のモデルのひとつを知るのに役立ちます。

②服部敬弘（京都大学大学院文学研究科）「No.42：「ある」の謎—フランス現象学の挑戦」

『ツァラトゥストラ』（ニーチェ著、手塚富雄訳、中央公論新社）※

①「より高い身体を君は創造しなければならぬ」。旧来の哲学的知の終焉を宣言し、新しいそれを告知する書です。

②服部敬弘（京都大学大学院文学研究科）「No.42：「ある」の謎—フランス現象学の挑戦」

『こころのふしぎ なぜ? どうして?』（村山哲哉監修、高橋書店）

①「こうすべき」「これはだめ」と理解はしていてもそのことがなかなか納得できずに適切に行動できないという経験は誰にもあるだろう。本書は、それを善悪や正邪からではなく人間の心の不思議という観点から解き明かし、適切に行動する道を探る。しかも、子どもにもわかるように説明する工夫が凝らされている。児童向けの本だが、大人になっても読み返したい一冊。

②山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）「No.43：津波被災者からのメッセージを読み解け」

『人間の大地（上・下）』（プラムディヤ・アナンタ・トゥール著、押川典昭、めこん）※

①海外旅行が手軽になったせいもあって東南アジアはずいぶん身近になった。しかし、一方的に親近感を抱いても、東南アジアの人々が日々何を考えているかがわかるわけではない。それを補うには現地の小説を読むのがいい。本書とその続編の『すべての民族の子』や『足跡』は、オランダによる植民地支配下のインドネシアが舞台になっているが、独立後の現在にも通じるものがある。

②山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）「No.43：津波被災者からのメッセージを読み解け」

『偶然と必然』（ジャック・モノー著、渡辺格、村上光彦訳、みすず書房）※

①コメントなし

②眞田昌（京都大学大学院医学研究科）「No.45：遺伝子からみた老化とがん」

『はじめての言語学』（黒田龍之介著、講談社現代新書）※

①「言語学とは何か」を、小中高生や専門外にもわかりやすく、適格に書かれた良書。言語はあまりに身近で、外国語学習と言語学を混同する場合が多い。言語学に関する偏見や言語に関する先入観を取り去り、さらに学びたい分野に関しては参考書が列挙されている。1日で読める楽しい入門書。

②西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所）「No.47：言語多様性 vs.生物多様性」

『絶滅していく言語を救うために—ことばの死とその再生』（クロード・アジェージュ著、糟谷啓介訳、白水社）※

①世界には消滅の危機に瀕する言語が無数に存在します。消滅危機言語に関する見解も学者によって様々です。この本を通じて、世界の言語の数、多様性、どういうきっかけで、どのように言語が消滅していくのか、消滅危機言語に対して我々は何をすべきか、何ができるのか、考えるきっかけを与えてくれます。

②西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所）「No.47：言語多様性 vs.生物多様性」

『名もなきアフリカの地へ』（映画）

①ケニアを舞台にした映画、ユダヤ人迫害をのがれ、ケニアの農村へ移り住む親子と現地の人々の物語。外国語アカデミー賞受賞。ユダヤ人少女がケニア農村部の子供たちと言語・文化ともに打ち解けていく姿が印象的。

②西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所）「No.47：言語多様性 vs.生物多様性」

『どんなかんじかなあ』（中山千夏著、イラスト：和田誠、自由国民社）

①ヒト遺伝教育は何を目指すのか？一番最後にドキッとする絵本です。今までに読んだ絵本の中で一番ラストが印象に残る本でした。主人公の男の子がお友達の立場に立って、いろいろな想像をめぐらせて体験していきます。本を読み進めていながら、主人公の男の子と一緒にいろんな人の立場、感じ方を想像してみると、読み終わったときに自分の感覚や世界がちょっと広がったような、不思議な感覚になります。お子さんだけではなく大人の方にもぜひ読んでいただきたい一冊です。

②和田敬仁（京都大学大学院医学研究科）「No.48、いのちのバトン—体験型ヒト遺伝教室—」

“LIFE: The Science of Biology (10th)” (David Sadava et.al, W.H. Freeman)

①『大学生物学の教科書』の原本（最新版）。大学時代に勉強しておけば良かったと後悔。でも、今からでも遅くはないはず！

②和田敬仁（京都大学大学院医学研究科）「No.48、②いのちのバトン—体験型ヒト遺伝教室—」

『キャンベル生物学』（N.A.キャンベル著、小林興監訳、伊藤元己他訳）※

①スーパー高校生はこれで勉強している！あらゆる分野の皆さんが、一度は目を通した方が良いでしょう。

②和田敬仁（京都大学大学院医学研究科）「No.48：いのちのバトン—体験型ヒト遺伝教室—」

『若きウェルテルの悩み』（ゲーテ著、高橋義孝訳、新潮社）※

①高校1年生の時に読んで、世の中こんなすごいものがあるのかと思わされた本です。途中で挫折しそうになりますが、最後まで読んだ人にはそれなりの感動が待っています。

②西村周浩（京都大学白眉センター）「No.49：日本でヨーロッパについて語る？」

D 自分の研究に関連して紹介したい本

凡例

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

- ① 推薦者のコメント
- ② 出展代表者（所属）「出展ブース番号：出展タイトル」

『食べものどくすり-食の薬効を探る』（京都健康フォーラム監修、大東肇編、建帛社）※

- ①本研究プロジェクトメンバーによる記事が掲載されている書籍。
- ②後藤幸織（京都大学霊長類研究所）「No.1：食と生薬による健康」

『How Animals Heal Themselves』（Caroline Ingraham, Ingraham Trading Ltd）

- ①本研究プロジェクトメンバーによる記事が掲載されている書籍。
- ②後藤幸織（京都大学霊長類研究所）「No.1：食と生薬による健康」

『日本被害地震総覧 599-2012』（宇佐美龍夫他著、東京大学出版会）※

- ①日本の1400年間にわたる被害地震のカタログ。
- ②加納靖之（京都大学防災研究所地震予知研究センター）「No.3：過去の地震にまなぶ」

『The Orphan Tsunami of 1700-Japanese Clues to a Parent Earthquake in North America』（Atwater et.al.）

- ①英語、日本語、くずし字、地質学、地震学、歴史学が入りまじったおもしろい報告書。

<http://pubs.usgs.gov/pp/pp1707/>

- ②加納靖之（京都大学防災研究所地震予知研究センター）「No.3：過去の地震にまなぶ」

『記憶力の正体』（高橋雅延著、ちくま新書）※

- ①記憶についての心理学的研究が、わかりやすく紹介されています。
- ②齊藤智（京都大学大学院教育学研究科）「No.6：心の構えを切り替える心の働き」

『意識のなかの時間』（エルンスト・ペッペル著、田山忠行訳、岩波書店）

- ①心と時間の関係について科学的に考える方法を提示しています。 ※
- ②齊藤智（京都大学大学院教育学研究科）「No.6：心の構えを切り替える心の働き」

『脳のなかの幽霊』（V.S.ラマチャンドラン、サンドラ・ブレイクスリー著、山下篤子訳、角川書店）※

- ①心と脳の関係を考えるための手がかりを与えてくれる良書。
- ②齊藤智（京都大学大学院教育学研究科）「No.6：心の構えを切り替える心の働き」

『植物で未来をつくる』（松永和紀著、化学同人）※

- ①遺伝子組換え作物という不安だという声を良く聞くが、その技術のもつ可能性をもっとしてほしいという日本人研究者の声をインタビューした本です。植物科学を目指す若者に是非読んで頂きたいと思います。
- ②佐藤文彦（京都大学大学院生命科学科）「No.7：植物の薬用成分を効率的につくる」

『量から質に迫る：人間の複雑な感性をいかに「計る」か』（往住彰文監修、村井源編、新曜社）※

- ①音楽や文学、思想を数量化することは可能か？人間の文化的営みを「科学的」に分析することを試みた本。
- ②福田宏（京都大学地域研究統合情報センター）「No.10：音楽から地域を語れるか？」

『重力波をとらえる』（中村卓史・三尾典克・大橋正健編、京都大学学術出版会）

- ①この本の出版後も様々な研究の発展があるが、重力波を（もうすぐ）とらえるためのバイブルとしていつもそばに置いておきたい。
- ②田中貴浩（京都大学大学院理学研究科）「No.11：重力波物理学の未来」

『トマトが野菜になった日-毒草から世界一の野菜へ』（橘みのり著、草思社）※

- ①わずか200年ほど前までは毒草として扱われていたトマトが、世界一の生産量を誇る野菜になるまでの歴史がまとめられた著書。専門書ではないが、私たちが普段食しているトマトがどのように世界中に広まり、栽培されるようになったのがまとめられている。

②柴田大輔（京都大学大学院農学研究科）「No. 12：トマトって、なに？」

『からだにいい野菜の便利帳』（板木利隆著、高橋書店）※

①近年、スーパーの野菜売り場には非常に多くの品種の野菜が並ぶようになってきました。それぞれが味も香りも食感も多彩で、どれを選んでよいのか、どんな調理法がよいのか迷ってしまいます。本書は代表的な野菜について、様々な品種の特徴を比較し、おいしい調理の仕方なども含めて紹介しています。こんな品種もあったのか、と野菜の世界を探検できる、一家に一冊、お薦めの本です。

②柴田大輔（京都大学大学院農学研究科）「No. 12：トマトって、なに？」

『波打際のむろみさん』（名島啓二著、講談社）

①最初は人魚系ギャグマンガだとタカをくくっていたら、意外にも魚の形態や生態、珍魚にまつわる迷信などを上手く使ってギャグを展開していて、感服致しました。

②飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所）「No.13：お腹の中で子供を育てるサカナ」

『モラル・エコノミー—東南アジアの農民叛乱と生存維持』（ジェームス・C・スコット著、高橋彰訳、勁草書房）

①本書は、東南アジアの農村で起った反乱を分析して、農民の社会・経済の特質であるモラル・エコノミーを指摘しています。その大きな特徴は、所得を大きくすることよりも、人びとの社会関係や生存維持を重視することです。このことは、発表者たちが調査するアフリカの多くの社会でも指摘されていて、この考えをもとに社会の発展のあり方が議論されています。日本の社会を考えるうえでも参考になるのではないのでしょうか。

②田嶋潔／泉直明（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科／京都大学アフリカ地域研究資料センター）
「No.14：東アフリカ牧畜民：サバンナを生きる」

『遊牧と定住の人類学—ケニア・レンディール社会の維持と変容』（孫曉剛著、昭和堂）※

①近代化、貨幣経済が浸透するなかで、アフリカの牧畜社会は消えてゆくのだろうかという疑問を抱いて調査を始めた発表者（田）が、フィールドで出会ったのは、牧畜文化に高い誇りをもって生きているマサイの人びとでした。本書で紹介されるケニア北部におけるレンディール社会の人びとも自然・社会環境の変化に柔軟的に適応し、変化しながら「遊牧の生き方」を続けてきました。牧畜社会をもっと知りたい方にぜひ！読んでもらいたい一冊です。

②田嶋潔／泉直明（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科／京都大学アフリカ地域研究資料センター）
「No.14：東アフリカ牧畜民：サバンナを生きる」

『ファインマン物理学』（R・P・ファインマン著、坪井忠二訳、岩波書店）※

①なんというか、「人間的」な物理の教科書だと感じています。物理を目指す人は読んで損は無いと一冊（セット？）です。

②増田亮（京都大学原子炉実験所）「No.21：原子核からのぞく世界」

『基礎ケミカルバイオロジー』（杉山弘・板東俊和著、化学同人）※

①DNA、RNA、タンパク質の構造と機能に関して、生物、化学、薬学的な視点から分かりやすく説明したケミカルバイオロジーの入門書として本著を推薦します。

②板東俊和（京都大学大学院理学研究科）「No.25：DNAオリガミを使ってできること」

『Hello My Big Big Honey!: Love Letters to Bangkok Bar Girls and Their Revealing Interviews』（Walker, D., and Ehrlich, R., S., Last Gasp of San Francisco）

①カナダ出身で様々なメディア活動に従事する D. ウォーカーとカリフォルニア出身のジャーナリスト R. S. エーリッヒが著した異色の本です。前半部分では、バンコクのバー・ガール1（売春街で働く女性）たちに宛てられた白人男性からの「ラブ・レター」を載せ、後半部分では彼女たちがそのような手紙をどう捉えているのかインタビューしています。実は、インターネットカフェでも同じことが起こっていることをお話ししたいと思います。

②平田知久（京都大学大学院人間・環境学研究科）「No.28：アジア・移動・インターネットカフェ」

『Les mots et les choses: une archéologie des sciences humaines』（Foucault, M., Gall）（『言葉と物——人文科学の考古学』（M フーコー著、渡辺一民・佐々木明訳、新潮社）※

①思想史、あるいは歴史書としても読むことができる、M. フーコーの代表的著作です。彼はこの本で、私たちがよ

く知っているはずの「人間」という形象は、実はそれほど長い歴史を持たない、と論じました。このような考え方は、私たちにとってあまりに自明（当たり前）のものになったあるものを反省的に捉える際に、非常に役に立ちます。例えば、日本におけるインターネットカフェが、今あるかたちになったのはいつ頃からでしょう？

②平田知久（京都大学大学院人間・環境学研究科）「No.28：アジア・移動・インターネットカフェ」

『元素戦略』（中山智弘著、ダイヤモンド社）

①元素戦略プロジェクトのプログラムオフィサーが著した本で、「元素戦略」のねらいがわかるように書かれている。

②田中庸裕／田中功（京都大学実験と理論計算科学のインタープレイによる触媒・電池の元素戦略研究拠点／京都大学構造材料元素戦略研究拠点）「No.35：元素戦略プロジェクト」

『未来を拓く元素戦略—持続可能な社会を実現する化学』（日本化学会編、化学同人）

①この元素戦略プロジェクトも含めて、化学分野からの「元素戦略」へのさまざまなアプローチが紹介されている。

②田中庸裕／田中功（京都大学実験と理論計算科学のインタープレイによる触媒・電池の元素戦略研究拠点／京都大学構造材料元素戦略研究拠点）「No.35：元素戦略プロジェクト」

『材料特性と材料選択』（落合庄治郎他著、岩波書店）

①コメントなし

②田中庸裕／田中功（京都大学実験と理論計算科学のインタープレイによる触媒・電池の元素戦略研究拠点／京都大学構造材料元素戦略研究拠点）「No.35：元素戦略プロジェクト」

『量子コンピュータ』（竹内繁樹著、ブルーバックス）※

①光の不思議と、量子コンピュータについて書いた本です。今回の話に興味を持って頂いた方には、ご覧頂けたらと思います。

②竹内繁樹（京都大学大学院工学研究科）「No. 36：光子のふしぎと量子情報科学」

『光と物質のふしぎな理論』（R.P.ファインマン著、釜江常好・大貫昌子訳、岩波書店）※

①ファインマン先生がノーベル賞を、朝永先生と共同受賞された量子電磁気学を、なんと数式をつかわずに説明した本です。私は学生の頃によんで、目からうろこが落ちる気がしたのを覚えています。

②竹内繁樹（京都大学大学院工学研究科）「No. 36：光子のふしぎと量子情報科学」

『金属間化合物入門』（山口正治・乾晴行・伊藤和博著、内田老鶴圃）※

①耐熱材料の中のエース、金属間化合物について平易に述べられている。

②乾晴行（京都大学大学院工学研究科）「No. 39：炎を制する—超耐熱構造材料」

『The Language Grid: Service-Oriented Collective Intelligence for Language Resource Interoperability』（Toru Ishida ed., Springer）

①展示する「言語グリッド」について、構想や原理、使われている技術を書いた本です。言語グリッドについてより詳しく知りたい方におすすめです。

②大谷雅之（京都大学大学院情報学研究科）「No.41：世界の言葉を繋ぐ「言語グリッド」」

『存在と時間』（マルティン・ハイデガー著、細谷貞雄訳、筑摩書房）※

①存在論の歴史を独特の記述のなかに凝縮させながら、その超克を企図した著作です。フランス現象学は、この著作との対決なしには語ることができません。

②服部敬弘（京都大学大学院文学研究科）「No.42：「ある」の謎—フランス現象学の挑戦」

『災害復興で内戦を乗り越える：スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』（西芳実著、京都大学学術出版会）※

①22 万人以上が亡くなったスマトラ島の巨大津波から 10 年。その被災地でどのように復興が進んできたかを、建物や制度の再建・復興だけでなく人々の心の復興に目を向け、10 年にわたって調査を続けた記録。「災害対応の地域研究」シリーズの第二巻。同シリーズ第一巻の『復興の文化空間学——ビッグデータと人道支援の時代』とともに、人文社会系の研究が被災地の復興とどう関わるかを考えるのにも役立つ。

②山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）「No. 43：津波被災者からのメッセージを読み解け」

『脱植民地化とナショナリズム：英領北ボルネオにおける民族形成』（山本博之著、東京大学出版会）※

①複数の民族や宗教が混在する状況で、各民族が独自の民族意識や言語・慣習を維持しつつ、全体で1つの国民を構成するというナショナリズムのあり方を、1963年にイギリスから独立した北ボルネオ（現在のマレーシアのサバ州）について明らかにしたもの。第二次世界大戦による戦災を経験した北ボルネオの人々が社会をどのように再建・復興しようとしたかを、自分たちを世界にどう位置づけるかという点を中心に捉えた。

②山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）「No. 43：津波被災者からのメッセージを読み解け」

『遺伝子医療革命 ゲノム科学がわたしたちを変える』（フランシス・S・コリンズ著、矢野真千子訳、日本放送出版協会）※

①個人の遺伝子配列情報を知ることができるようになった現在の状況と未来をヒトゲノムプロジェクトのリーダーが分かりやすく解説している。

②眞田昌（京都大学大学院医学研究科）「No.45：遺伝子からみた老化とがん」

『民族植物学—原理と応用』（C.M.コットン著、木俣美樹男・石川裕子訳、八坂書房）※

①フィールドワークを行っている言語学者にとって、植物学は、とても密接な分野です。言語調査を通じて、また、植物語彙や植物利用を通じて言葉のルーツや言葉の移動、文化接触を知ることができます。

②西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所）「No. 47：言語多様性 vs. 生物多様性」

『太平洋—東南アジアとオセアニアの人類史』（ピーター・ベルウッド著、植木武・服部研二訳、法政大学出版局）※

①祖先を同じくする、オーストロネシア語族の言語、台湾の原住民の言語、ニュージーランドのマオリ族の言語、アフリカ東海岸のマダガスカル言語、イースター島のラパヌイ語など 2000 以上の島々の言語と人類の歴史について詳しく解説してあります。

②西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所）「No. 47：言語多様性 vs. 生物多様性」

『遺伝子図鑑』（国立遺伝学研究所『遺伝子図鑑』編集委員会編、悠書館）※

①とことん遺伝子のことに特化した図鑑です。普段の生活ではなかなか触れる機会の少ない遺伝や遺伝子の話で、難しいかなと考える方も多いかもしれませんが、図を見ているだけでも楽しめる一冊です。自分の体の中でこんなことが起きているなんて！目では直接見ることができない遺伝子のことを分かりやすく解説しているだけでなく、身近なものと比較していて、改めて人体の不思議を感じることができると思います

②和田敬仁（京都大学大学院医学研究科）「No.48：いのちのボタン—体験型ヒト遺伝教室—」

『フィンランド理科教科書（生物編）』（M.ホロパニエン他著、鈴木誠監訳、山川亜古訳、化学同人）

①教育先進国フィンランドの中学校で使われている生物の教科書（日本語訳）です。ヒトの遺伝や生命に対する扱いが日本と大きく異なっていることに驚きます。

②和田敬仁（京都大学大学院医学研究科）「No.48：いのちのボタン—体験型ヒト遺伝教室—」

『おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん』（長谷川義史著、BL出版）※

①私たちはヒト遺伝リテラシー向上を目指しています。子ども向けの絵本だけれど、なかなか奥が深いです。「命は続いている」とか言葉だけではいまいちピンときませんが、自分とご先祖様の命はつながっているのだということを、「ひいひいひい・・・」と読み進めていくうちに実感できる内容になっています。ページが進む度に子どもたちに読み聞かせるのが大変になってきますが、登場するキャラクターやイラストがどんどん変化していき、時代の変化も楽しむことができます。

②和田敬仁（京都大学大学院医学研究科）「No.48：いのちのボタン—体験型ヒト遺伝教室—」

『いのちのまつり「ヌチヌグスージ」』（草場一壽（作）、平安座資尚（絵）、サンマーク出版）

①ヒト遺伝教育はDNAや染色体を学ぶためだけではありません。サブタイトルにある「ヌチヌグスージ」とは沖縄の言葉で「いのちの祭り」と意味するとのこと。絵本冒頭の、ご先祖様のお墓の前に集まった家族らが、歌ったり踊ったりしながら感謝の意を伝えるシーンを指しているようです。絵本は途中にしかけがあり、命の広がりや視覚的に魅せてくれます。登場人物の表情が1人1人みんな違うのも見どころの1つ！自分の命と家族とのつながりをやさしく教えてくれる、とっても心温まる1冊です。

②和田敬仁（京都大学大学院医学研究科）「No.48：いのちのボタン—体験型ヒト遺伝教室—」

『物の本質について』（ルクレティウス著、樋口勝彦訳、岩波書店）※

①2000 年以上も前にこんなことを考えていた人がいたのかと思えるような本です。当時支配的だった迷信的な考え方への挑戦状とも言える内容です。

②西村周浩（京都大学白眉センター）「No.49：日本でヨーロッパについて語る？」

『歴史としての生命』（村瀬雅俊著、京都大学学術出版会）※

①新たな生命哲学の創造を実践的に展開した、ある意味で体験の書である。

②村瀬雅俊（京都大学基礎物理学研究所）「No.50：統合知－新たな学問の創成に向けて－」

座談会・本トークの登壇者からの推薦図書

凡例

登壇者（所属）

【推薦図書ジャンル】

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

推薦コメント

お茶を片手に座談会「宇宙を見てゴカイを食べる？」登壇者 推薦図書

古澤拓郎（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

【今の仕事（研究、進路）を選ぶことになったきっかけになった本】

『シャーマンの弟子になった民族植物学者の話（上・下）』（マーク・プロトキン著、屋代通子訳、築地書館）※

熱帯雨林を歩き回り、植物標本を集め、そこに暮らす人々と語り合う様子がいきいきと描かれ、自分もぜひそういうフィールドワークをしたいと思いました。研究とは何か、地域社会の役に立つとはどういうことか、思い悩む姿にも感銘を受けました。

『EV Café 超進化論』（村上龍・坂本龍一著、講談社文庫）

中学から高校生のころに繰り返し読んで、学問ってオシャレでカッコイイと興奮しました。学問というのは、つまらない受験勉強だけではないのだと知りました。この世界に憧れるきっかけの1つになりました。（ただし今読んだら、いろいろと反論したくなると思います）

【若者にお勧めしたい本】

『百年の孤独』（ガブリエル・ガルシア＝マルケス著、鼓直訳、新潮社）※

一番好きな本です。高校時代に読んで、内容を深く理解したくなり、著者のマルケスやラテンアメリカ文学、さらにコロンビアやラテンアメリカの歴史や社会について、調べました。今思えば、地域研究への第一歩だったかもしれません。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『人類生態学』（大塚柳太郎他著、東京大学出版会）※

人間を生物としてみる視点と、社会的・文化的存在としてみる視点を横断しながら、人間と環境の関わりを研究すると、現代の様々な環境問題・社会問題に新たな光をあてることができます。そういう人類生態学の大学生向けの教科書です。読むたびに新たな発見があります。いまは大塚柳太郎ら編集版が流通していますが、絶版の鈴木継美ら編集版もおすすめです。

佐藤正典（鹿児島大学大学院理工学研究科）

【今ハマっている本】

『人類はどこから来て、どこへ行くのか』（エドワード・O. ウィルソン著、斉藤隆央訳、化学同人）※

基礎的な生物学の研究から人間の本性を洞察するという壮大で魅力的なテーマです。「理系」と「文系」の垣根がないのです。少々難しいですが「文系」の人にもこの進化生物学の視点をぜひ知ってほしいものです。

【若者にお勧めしたい本】

『生命は細部に宿りたまう』（加藤真著、岩波書店）※

日本列島の目立たない場所、地味な生物が、美しい写真と格調高い文章で語られます。日本がどれほど豊かな生物多様性に恵まれた国であることか、それが世界の中でどんなに稀なことであることか、そして、私たち日本人がそのことにいかに気づいていないことか。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『海をよみがえらせる一課早湾の再生から考える』（佐藤正典著、岩波ブックレット）※

私の研究対象のゴカイ類がすんでいる干潟（美しい泥の世界）の大切さを、ぜひ多くの人に知っていただきたいものです。

『干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック』（日本ベントス学会編、東海大学出版会）※

干潟にすむ目立たない小さな生きものたち（貝やカニやゴカイなど）にも絶滅危惧種がたくさんいます。それぞれの専門家が愛情を込めて撮影した各種の写真が美しく、圧倒的です。ゴカイ類の絶滅危惧種も 21 種掲載されています。

磯部洋明（京都大学宇宙総合学研究ユニット）

【今ハマっている本】

『**亡命ロシア料理**』（ピョートル・ワイリ、アレクサンドル・ゲニス著、沼野充義訳、未知谷）

本文より引用『おたまを持って鍋の前に立つとき、自分が世界の無秩序と闘う兵士の一人だという考えに熱くなれ』『日常生活と冷えてしまったマカロニを比較してみよう。そのどちらにも意味を与えるのは刺激だと、すぐに思いいたるはず。予期せぬ恋、トマトソース、危険な冒険、唐辛子、宝くじ、ニンニク』...かつこ良すぎる。

『**ダンゴムシに心はあるのか**』（森山徹著、PHP 新書）※

自然界でダンゴムシを観察しては決して分からなかったであろう、ダンゴムシの「ところ」とは？

『**闇の左手**』（ル・グイン著、小尾芙佐訳、ハヤカワ文庫 SF）※

人間が男女に別れていなかったらどうなるか？「ゲド戦記」の作者で文化人類学者を父に持つ著者が他の惑星に住む人々を通じて人類社会について考察した、ジェンダー論 SF。これぞ宇宙人類学。

『**自閉症の僕が飛び跳ねる理由**』（東田直樹著、エスコアール）

重度の自閉症で会話もできないが、文字盤を使って考えを綴る術を得た著者。世界の把握の仕方にこんなあり方があるのか、という人間精神の多様性を教えてくれる本です。

【若者にお勧めしたい本】

『**サルなりに思い出す事など**』（ロバード・サボルスキー著、大沢章子訳、みすず書房）※

「起きている間の時間の大半を他人...じゃなくて他ヒヒとのヒヒ関係に神経をすり減らすのに使っている」というヒヒ研究者が著者。アフリカ冒険譚としても楽しい。

『**多様化世界**』（フリーマン・ダイソン著、鎮目恭夫訳、みすず書房）

著名な物理学者であり、未来の宇宙文明を科学的かつ壮大に考察した人であり、穏やかで暖かいまなざしで科学と社会や宗教の関係を語る、著者フリーマン・ダイソンの世界観がよく表れている著作です。

『**梅崎春生**』（梅崎春生著、筑摩書房）※

一番最後にある「チョウチンアンコウについて」というほんの 3 ページほどの小品にて、著者に「この瞬間のことを考えると、私は何か感動を禁じ得ない。どういう感動かということは、うまく言えないけれども」と言わせた瞬間のことを、ぜひ読んで欲しいです。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『**宇宙人類学の挑戦**』（岡田浩樹・木村大治・大村敬一編、昭和堂）

人類学者と宇宙研究者が出会って始めた、宇宙時代の人類について考える新しい学問のキックオフとなる本です。

『**最新画像で見る太陽**』（柴田一成・大山真満・浅井歩・磯部洋明著、ナノオプトニクスエナジー出版局）※

ダイナミックに活動する太陽の美しい写真が、大学院のゼミで使えるくらいマニアックな解説とともに楽しみ頂けます。

お茶を片手に座談会「震災映像の想像力と市井の人々」登壇者 推薦図書

田中傑（京都大学防災研究所）

【今の仕事（研究、進路）を選ぶことになったきっかけになった本】

『**東京の空間人類学**』（陣内秀信著、筑摩書房）※

東京の現在（80 年代）のまちなみを来歴に即して紹介し、その歴史的・地形的な文脈を解説する本です。都市空間の持つ歴史的な文脈に対する関心を抱くきっかけとなりました。

『**都市叢書 東京都市計画物語**』（越沢明著、日本経済評論社）

東京のまちなみの形成を、都市計画行政の担当者の立場から描いた本です。公的な資料（公文書、事業誌）や関係者へのインタビューによって調査・研究を進めています。まちなみを変える力に関心を持つきっかけとなりましたが、わたし自身はその力のもとで一般のひとびとがどのように行動するのかに関心を持つにいたりしました。

【若者にお勧めしたい本】

『青きドナウの乱痴気 ウィーン 1848年』(良知力著、平凡社) ※

1848年革命に関わる大量の資料を古書店その他で掻き集めて、革命騒ぎの担い手たち、革命騒ぎの進行過程などを生々しく描いた本文はもちろん素晴らしいですが、そのあとがきは良知さんの絶筆とされています。そこに記された彼の若き日の研究生生活の断片をときどき読み返します。

『麦熟るる日に』(中野孝次著、河出書房新社) ※

受験生時代、通信添削講座の現代文の問題で目にし、後日送られていた解説文で書名を知ってすぐに購入しました。自分自身には不相応なのではと感じていた学問の世界へのあこがれがそのまま描かれていたので、受験会場にも持ち込むほど心酔しました。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『日本案内記』(鉄道省編、博文館) ※

古い旅行案内は、その土地、その土地の本来の力を記録しています。地勢、気候、地場の建材を用いたまちなみ、それらと関係の深い名産品・歴史的な名所など。交通網の発達、災害(自然災害、戦災)、「進歩主義」などによって失われた(あるはず/あったはずの)資源を想像することができます。

"Baedeker (ベデカー)" ※

日本に比較して、(おどろくほど)古いものが残っているヨーロッパ諸国、諸都市をめぐるガイドブックです。1880年代に登場して以来、現在にいたってもなお、ドイツの書店の店頭にならんでいます。その地図を頼りにまちあるきをしながら、古い舎がショッピングセンターに転用され、堡塁の跡が公園に改められたプロセスを眺めてあれこれ考えます。

大澤浄 (東京国立近代美術館フィルムセンター)

【今の仕事(研究、進路)を選ぶことになったきっかけになった本】

『映画千夜一夜』(淀川長治・山田宏一・蓮實重彦著、中央公論社) ※

地方都市に住んで、当然インターネットは無く、近所のレンタルビデオ店もそれほど品揃えがあるわけでも無いという時代、書店で映画好きの中学生の目に留まったのがこの分厚い本。聞いたこともない映画タイトルの数々とそれらに向けられる熱のこもった言葉が、映画の広大な世界への渴望を引き起こしました。

『映画 視線のポリティクス』(加藤幹郎著、筑摩書房) ※

映画とより深く付き合っていくためには、映画を好きなのだけでは不十分だということが分かってきた学生時代。映画と共にあった歴史を、社会を、制度を知ることが、自らの眼差しをも変えました。

【今ハマっている本】

『ミシシッピの生活(上、下)』(マーク・トウェイン著、吉田映子訳、彩流社) ※

自身、ミシシッピ河の水先案内人だったトウェインが、河で暮らす人々を描いた本。水上生活から見た、アメリカの多様な顔や歴史を垣間見ることができる。

『チーズと文明』(ポール・キンステッド著、和田佐規子訳、築地書館) ※

面白く、かつ世界史の勉強ができてしまう本。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『関東大震災の想像力』(ジェニファー・ワイゼンフェルド著、篠儀直子訳、青土社) ※

今年8月に刊行されたばかりの関東大震災をめぐるイメージに関する刺激的な研究書。

『ドキュメンタリーの海へ 記録映画作家・土本典昭との対話』(土本典昭・石坂健治著、現代書館)

映画史上類のない長期間にわたる、撮影対象との相互関係によって、ユニークなドキュメンタリーを撮り続けた映画作家へのインタビューを中心にまとめた本。フィクションであれノンフィクションであれ、映画と付き合う上で大切なことを教えてくれる。

小川直人 (せんだいメディアテーク)

【今の仕事(研究、進路)を選ぶことになったきっかけになった本】

『夏の朝の成層圏』(池澤夏樹著、中央公論社) ※

小学生のときに読んで、今もたまに読む本。今の仕事を選ぶきっかけになった本、あるいは、出来事というのは、案外とこれくらい遠いところにあるのではないかと思います。自覚できるけれど、直接関係があるとは思えない経験こそ、きっかけと言うにふさわしい。

【今ハマっている本】

『ヴォイニッチホテル』（道満清明著、秋田書店）

むかしからあまりマンガには興味がなく、偶然手にするくらいでしか読まないのですが、近年読んだ中で最も印象深いもの（まだ連載中のはず）。人生はブルースで、ブルースにはユーモアがつきまとい、つまり、どんなひどい人生にもユーモアがあることを知らされる作品。この作家について詳しい人がいたら教えてほしい。

【若者にお勧めしたい本】

『パスタ宝典』（ヴィンチェンツォ・ブオナッシージ著、西村暢夫他訳、読売新聞社）※

学生時代に大学図書館で見つけて不思議に思っていた本で、毎日1種類ずつ作り続けても4年間かかる、パスタのレシピ集。だれか卒業までに挑戦してほしい。もちろん、3食パスタにしたり、一度に何種類か作って友達や恋人に振る舞えば、もっと短い期間で作り終わります。ちなみに、「ソース法典」という姉妹本もありました。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『伝わるデザインの基本—よい資料を作るためのレイアウトのルール』（高橋佑磨・片山なつ著、技術評論社）

世界からマイクロソフト製品に入っている WordArt が消えてしまうことを祈念してやまない私ですが、現実にはそう甘くはなく、絶望的にわかりにくいプレゼン資料を目にする日々です。デザインはプロのデザイナーのものだけにあらず。どんな優れた研究も伝わらなければ意味がないわけですから、研究者こそ重要なスキルでしょう。書いているのが進化生態学の研究者である点も興味深い。

『ゴダールの方法』（平倉圭著、インスクリプト）※

ジャン＝リュック・ゴダールといえば、多くの人にとって強烈な催眠作用をもたらす作風ながら、その作品に言及せずにはいられない不思議な力をもった映画作家ですが、彼に関する無数の書物のなかで、特に印象深いもの。読んだ後に作品が別のものにしか見えなくなるというのが良い映画批評のひとつの尺度ではないでしょうか。

『イメージ・リテラシー工場—フランスの新しい美術鑑賞法』（ジャン＝クロード・フォザ他著、犬伏雅一他訳、フィルムアート社）※

「学ぶ」ということはもっと自由で良いのではないかと常々思っているのですが（小学校くらいから）、新しいタイプの文化施設で、映像文化の専門家として仕事をするようになって試行錯誤していくなかで参考になった本。授業の国際比較としてもおもしろい。

『月刊佐藤純子』（佐藤純子著、メディアデザイン）

友人に本屋で売のような本をつくりたいと相談され、気楽な気持ちで手がけたもの。企画／編集／書店流通まで、やってみたらできた。学び、特に、メディアに関することというのは、「やってみたら案外できるかもしれない」という意識を持ことだと思っているので、人に言うばかりではなく実践してみた次第。

『映画への不実なる誘い』（蓮實重彦著、NTT 出版）※

せんだいメディアテークで 2002 年から続けたレクチャー・シリーズを本にしたもの。学生時代に本を手にしてものの難解で挫折した人とまさか一緒に仕事をするとなろうとは思っていませんでしたが、講演はべらぼうにおもしろい。ということは、蓮實重彦という人は文章が下手なのではないか（話すことに比べては）という仮説を立ててみましたが、怖くて本人には言えませんでした。

お茶を片手に座談会「コトバのデータベースが社会を変える？」登壇者 推薦図書

家入葉子（京都大学大学院文学研究科）

【若者にお勧めしたい本】

『文科系ストレイシープのための研究生活ガイド 心持ち編』（家入葉子著、ひつじ書房）

研究生活の初期段階で直面しそうな問題を、心理的な側面に焦点を当てながら解きほぐしてみました。気軽に短時間で読むことができます。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『英語の歴史—過去から未来への物語』(寺澤盾著、中公新書)

英語にはさまざまな不規則性がありますが、英語を学ぶ際には、これをそのまま憶えなければならないことが少なくありません。近年、英語の歴史を理解して、納得しながら英語学習を進めることの重要性が強調されるようになりました。本書はそれを助けてくれる1冊です。

『聖書でたどる英語の歴史』(寺澤盾著、大修館書店) ※

異なる時代の英訳聖書を読みながら英語の歴史と変化を味わうための本です。『英語の歴史』と合わせてお薦めしたい本です。

『ベーシック英語史』(家入葉子著、ひつじ書房)

5世紀の半ばから1500年以上の時間をかけて変化してきた英語の歴史を、簡単に理解できるようにまとめました。短時間で英語史の流れをつかめるとともに、英語学習者なら誰もが疑問に思っていたような事柄についても簡潔に答えてくれるはずです。

『旅するニホンゴ—異言語との出会いが変えたもの』(渋谷勝己・簡月真著、岩波書店) ※

海外に渡った日本語を扱った本です。日本語を起点に言語接触の実態を学ぶことで、言語の変容をより身近な問題と考えることができるかもしれません。

佐藤恵子(京都大学医学部付属病院臨床研究総合センター)

【今の仕事(研究、進路)を選ぶことになったきっかけになった本】

“Fundamentals of Clinical Trials 4th ed.” (Friedman L M., Furberg, C D., DeMets, D L., Springer)

私が臨床試験を初めて学んだのは1990年頃、米国のノースキャロライナ大学の公衆衛生学部です。この本はそこで教科書として使用されていました。とても良い本ですので、教員のEd Davis先生に「なぜこの本を選んだのか」とたずねたところ、「ペーパーバックで学生が買いやすいから」というお返事で、ずっとおきました。

『患者の権利』(アナス G J 著、谷田憲俊監訳、NPO 法人患者の権利オンブズマン編訳、明石書店) ※

医療では、洋の東西を問わず、「病気のことを熟知しているのは医師なので患者は医師に従っていればよい」というやり方が一般的でした。しかし、患者に施される医療については患者本人が決めるのではなく、それは患者の権利であり、医師は患者の決定を尊重しなくてはならない、という180度違う考え方をわかりやすく述べています。

【今ハマっている本】

『スモールイズビューティフル』(シューマハーAF 著、小島慶三・酒井懋訳、講談社)

経済学者のシューマハーによる1973年の著作で、科学や技術と人間のあり方を述べています。現在は、当時のシューマハーが予言したとおりのよくない状況になっているのですが、だからこそシューマハーの卓見を見直す時期ではないかと思います。

『137億年の物語—宇宙が始まってから今日までの全歴史』(ロイド C. 著、野中香方子訳、文藝春秋) ※

私は子どもの頃、出来事と年号を覚えるだけの「歴史」が嫌いでしたが、歴史好きの兄が語る人の営みとしての物語は面白くて、兄の語りのような本があったらいいのにと感じていました。この本は、生物の誕生から現在までの歴史がひとつながりになっていて、タイムマシンに乗って好きな時代の人間の営みを眺めているような楽しさがあります。

【若者にお勧めしたい本】

『夜と霧』(فرانクル VE. 著、霜山徳爾訳、みすず書房) ※

ナチスの強制収容所という極限の状態におかれた精神分析の学者フランクルが人間を洞察した記録。人間とは、人生とは、愛とは、尊厳とは…を静かに問いかけています。読むたびに新しい発見がありますので、まずは若い時には是非一度読んでみてください。

『アルジャーノンに花束を』(キイス D. 著、小尾英佐訳、早川書房) ※

知的障害のあるチャーリーが、とある手術を受けるのですが、そこで得たもの失ったもの、そして…という物語。生きること、障害を持つこと、人とかかわりなど、多くのことを考えさせられます。演劇や映画にもなっているのですが、本で読むことをお勧めしたいです。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『マンガで学ぶ生命倫理』(児玉聡・なつたか著、化学同人)

生命倫理学は、人の生老病死を扱う学問ですが、学者だけが考えることなく、一人ひとりがたとえば「自分は

人から臓器をもらって生きたいか」を考える必要があります。縁起が悪かったり考え方もわからなかったりしてハードルが高いのですが、この本は高校生を主人公にして一緒に考えることができますので、若い人にお勧めしたいです。

『宇宙怪人しまりす 医療統計を学ぶ』（佐藤俊哉著、岩波科学ライブラリー）※

日本では、「コレを飲んだら病気が治った、ゆえにコレは病気に効く」というような話が巷にはびこっておりますが、治療の有効性を評価するには、医療統計の知識が必要です。数式なども使いますのでじんましんが出そうになりますが、この本は、算数や数式は嫌いだけど、地球を征服しにきた「宇宙怪人しまりす」と一緒に、病気や健康に関する基本的な考え方を学ぶことができます。

ミニトーク「お伽草子の世界」登壇者 推薦図書

金光桂子（京都大学大学院文学研究科）

【今の仕事（研究、進路）を選ぶことになったきっかけになった本】

『源氏物語論』（清水好子著、塙書房）※

学部生の頃に読み、作品に込められた作者の思いを客観的な証拠に基づいて解き明かすという、文学研究のおもしろさを知った本です。

【若者にお勧めしたい本】

『文車日記—私の古典散歩』（田辺聖子著、新潮文庫）※

ただただ古典文学が愛しくてたまらない—という気分に入れます。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『慶應義塾図書館蔵 図解御伽草子』（石川透著、三弥井書店）※

奈良絵本・絵巻の美しさをカラー図版で堪能できます。

『京都大学蔵むろまちものがたり』3巻・10巻（臨川書店）※

今回のトークで紹介する『しほやきぶんしやう』『はちかづき』が収載されています。

もっと知りたい！研究者の本棚 ～人文・社会科学者（地域研究者）の本棚～

京都大学地域研究統合情報センター 山本博之

凡例

【推薦図書ジャンル】

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

推薦コメント

【小学生の時に読んだ本】

『光・音・熱の魔術師（なぜなぜ理科学習漫画）』（若月てつ著、集英社）

小学生の頃に何度も繰り返し読んだ本。家の中や道端にある身近なものを題材に、世の中の物事はそれぞれ仕組みがあって動いているということを漫画でわかりやすく解説したもの。

『文部省で決まった早わかり国語』（江守賢治著、新東京出版）

小学校卒業の頃を買って、中学生の頃に繰り返し読んだ本。いろいろな言葉を漢字でどう書くか、漢字をどう書くかという決まりを手書きで解説してくれた本。小学校の国語で漢字を習ったけれど、漢字の書き方の決まりは変わることがあることや、決まりにはどの範囲までなら逸脱してもよいという許容の形があることを知った。決まりを説明する本なのに、決まりに対する疑問や漢字の美醜に対する著者の個人的判断がときどきあらわれるのも面白い。

【中学・高校生の時に読んだ本】

『若き数学者のアメリカ』（藤原正彦著、新潮文庫）※

高校時代、1年間のホームステイ留学中に読んだ本。自分が日本人であることを忘れて現地社会の一員になるぞという意気込みで留学したが、留学先は多民族社会のマレーシア、しかもホームステイ先は民族的マイノリティで、「現地社会の一員になる」というのはどの人たちと同じになることなのか悩んだ。本書で「アメリカでは日本人らしく振舞うのが現地社会に馴染むことだ」と読み、その意味を考えることが後の研究につながった。

『殺される側の論理』（本多勝一著、朝日文庫）※

子どもの頃から常識や慣例となっていた考え方や行動の一部は、実は米国の常識や慣例をそのまま持ち込んだものだという見方を本書で知った。ローマ字で名前を書くときに姓・名ではなく名・姓の順に書くこと、数字を書くときに4桁ごとではなく3桁ごとにカンマで区切ることなどをはじめ、1つ1つの言葉をどう書くかに書き手の意識が反映されるという考え方を知り、発せられた言葉の行間を読む習慣が身についた。

【大学学部生の時に読んだ本】

『ゴジラとヤマトとぼくらの民主主義』（佐藤健志著、文藝春秋）※

子どもの頃から好きだったウルトラマンなどのテレビ番組や映画の背景に、アメリカの傘の下で平和を享受しているという日本社会の意識などが読み解けるという本。何気ない大衆娯楽でも分析の仕方しだいで時代性や社会思想を読み解くことができることに驚き、それまで考えもしなかった自分の意識を当てられたことやその手際の鮮やかさに驚く一方で、その読み解きに違和感が残り、別の読み解き方ができないかとずっと考えている。

『愛するということ』（エーリッヒ・フロム著、鈴木晶訳、紀伊国屋書店）※

愛するということは状態ではなく意志であり技術であるという考え方を知った。地域研究とは研究対象への愛であるという地域研究の考え方のもととなった。

『風の谷のナウシカ』（宮崎駿著、徳間書店）※

アニメ映画が有名だが、漫画には映画では描かれなかった後半部分が描かれている。私たちが生きるこの世の中には矛盾や穢れがあるが、そこに生きる私たちもみなその矛盾や穢れを一部で身にまとい、すべて浄化した理想の世界を作ってもそこで私たちは生きていけない。いま生きている人々や命を犠牲にしてでもすべてが浄化された世界を作らなければならないという考え方を明確に否定し、現実の世界の中で矛盾や穢れを身にまとった存在として生きていく覚悟を力強く描いた本。

【大学院生の時に読んだ本】

『ためらいの倫理学—戦争・性・物語』（内田樹著、角川書店）※

大学院在籍中に会い、常勤職に就くまでによく読んだ本。任期が切れて職場が変わるたびに持っている本の一部を処分しなければならなくなっても最後まで手元に残そうと思った1冊。いろいろな人々が集まって成り立つ社

会では、ものごとの善悪を語るだけでは相手と話が通じないことがあり、善悪の判断を他人が納得できる形で説明しなければならず、それをいくつかの例で実際に示して見せた本。書かれている内容も興味深い、他人に納得してもらう技術という意味でも興味深い。

【お勧めしたい本―一世の中編】

『こころのふしぎ なぜ? どうして?』(村山哲哉監修、高橋書店)

「こうすべき」「これはだめ」と理解はしていてもそのことがなかなか納得できずに適切に行動できないという経験は誰にもあるだろう。本書は、それを善悪や正邪からではなく人間の心の不思議という観点から解き明かし、適切に行動する道を探る。しかも、子どもにもわかるように説明する工夫が凝らされている。児童向けの本だが、大人になってからも読み返したい一冊。

『イケズの構造』(入江敦彦著、新潮社) ※

イラストも面白い京都紹介の本。京都(人)について鋭く突き放した筆致でいろいろ書かれているけれど、いずれも京都(人)に対する広い知識と深い愛情があってこそその内容。学術書ではなくても、ある意味で地域研究の本。関東出身の私が京都に来たばかりの頃に読んだ京都本の中で特に印象に残っている1冊。でも、もしかしたら本書をまじめに読みすぎたために私の京都(人)に対するイメージが強く作られてしまったかもしれない。

【お勧めしたい本―研究書編】

『想像の共同体: ナショナリズムの起源と流行』(ベネディクト・アンダーソン著、白石さや・白石隆訳、NTT出版)

※

1990年代頃の大学生の必読書という雰囲気があった。中身をよく読まずに「国民とは幻想の共同体である」という主張だと誤読されたりもしたが、「正真正銘」のナショナリズムは排他的ではなく自己解放をもたらす原理であるとしてナショナリズムを肯定的に捉えている。21世紀に入って世界各地で排他的なナショナリズムが勢いを増しているように見えるが、それでも本書の議論はなお有効なのか、今こそ改めて考えてみたい。

『ハーフィズ詩集』(ハーフィズ著、黒柳恒男訳、平凡社) ※

読んでおもしろい古典。14世紀のペルシャの詩人による詩集。中世のイスラム宮廷を背景にした詩集だが、全編に酒と美女が溢れている。マレーシアの映画にも引用されている。

『ベトナム人共産主義者の民族政策史―革命の中のエスニシティ』(古田元夫著、大月書店)

現地語を駆使して可能な限りあらゆる文献を参照して地域像と世界像を組み立てた「学者の仕事」。ベトナムに自由に行き来できなかった頃にベトナム研究を行った著者は、ベトナムの友人から小包が届くと、中身を包んでいた新聞紙を読んで現地の様子を知っていたという。

『対立と共存の国際理論―国民国家体系のゆくえ』(山影進著、東京大学出版会)

スタイリッシュな学者の仕事。章ごとに変わる手さばきの鮮やかさ。学術書の扉に小説の一節を引用する遊び心。所収論文の本文に出てくる駄洒落。そして抽象画のようでテーマと密接に関わっている表紙のデザイン。ただし、現地社会にのめり込まない風を装いながら、実は世界と人類社会の行く末を気にかけている様子が行間から伺える。

【お勧めしたい本―研究作法編】

『論文作法』(ウンベルト・エーコ著、谷口勇訳、而立書房)

学術論文を書くための指南書。論文執筆の具体的な方法もわかりやすく解説してくれているが、論文とは何か、研究とは何かを読み物風にして見せてくれる。学術論文の執筆を仕事にしようとする人にとって最初に読むべき必読書の1つ。

『社会学的想像力』(ミルズ著、鈴木広訳、紀伊國屋書店) ※

事件や事故があったとき、その直接の当事者の原因を個別に追究する態度ではなく、その事件や事故を手がかりに社会のあり方を考えるという態度が社会学的想像力だとしたら、調査研究する側とされる側、見る側と見られる側、情報発信する側と受け取る側の境界がぼやけて相互乗り入れの部分が大きくなっている現代世界では、事件や事故を手がかりに社会のあり方を考える「地域研究的想像力」をどう構想するのか。

『知の虚構』(坂奈玲著、三一書房) ※

研究は孤独な作業だけれど、研究活動は職場や家庭や地域社会の中で場所を得ることで進めることができるし、研究成果も社会の中に置かれてはじめて意味を持つ。

【お勧めしたい本―東南アジア編】

『人間の大地(上・下)』(ブルムディア・アナンタ・トゥール著、押川典昭、めこん) ※

海外旅行が手軽になったせいもあって東南アジアはずいぶん身近になった。しかし、一方的に親近感を抱いても、東南アジアの人々が日々何を考えているかがわかるわけではない。それを補うには現地の小説を読むのがいい。本書とその続編の『すべての民族の子』や『足跡』は、オランダによる植民地支配下のインドネシアが舞台になっているが、独立後の現在のインドネシア社会にも通じるものがある。

『マレー蘭印紀行』（金子光春著、中央公論社）※

太平洋戦争の直前の時期に東南アジアを訪れた詩人の紀行文。現地の日本人社会を渡り歩き、日本人を含む現地社会の様子を冷めた目で鋭く描いている文章を読んでいると、「上から」「下から」の目線といった単純な見方ではなく、自分がよそ者であることを自覚した上で現地社会とどう付き合うのかを考えさせられる。

『東南アジアを知る事典』（桃木至朗ほか編、平凡社）※

事典だけれど読み物としてもおもしろい。日本の東南アジア研究者が総力を結集して刊行した本。（自身が担当した項目を含めて）東南アジアや個別の研究対象に対する書き手の思いが垣間見える項目が少なくない。

『サンダカン八番娼館』（山崎朋子著、文藝春秋）※

日本と東南アジアの関わりを知るための必読書の1つ。ほんの少し前の時代まで日本からアジア各地への出稼ぎがあった。ボルネオ島（現在のマレーシア・サバ州）のサンダカンで働いていた日本人女性たちの人生の聞き書き。彼女たちの墓は今でもサンダカン市の丘に海に面して立っており、私もサンダカンを訪問するたびに訪れている。

【お勧めしたい本—災害対応編】

『噴火のこだま—ピナトゥポ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』（清水展著、九州大学出版会）

自分の研究対象が突然大きな災害や事故に巻き込まれてしまったとき、研究者はどう関わるのか。被災社会に寄り添いつつ、外部者として、そして研究者として復興過程とともに歩み、その結果を記録して世界に共有する。研究対象地域の事情に通じ、何年も何十年もその地域に関わり続ける地域研究者だからこそその仕事であり、「災害対応の地域研究」の源流。

『被災地デイズ』（矢守克也編、弘文堂）※

災害が起こると、ふだんの常識では考えられない問題がいくつも発生し、次々と判断していかなければならない。そのためには、災害が起こったらどんなことが起こりうるのか、どんな判断が必要になるのかを、過去の災害から例をとって、災害が起こる前に考えておく必要がある。過去の災害の経験から将来の災害への対応のしかたを考えるための練習帳。引っ越し祝いや新築祝いにぜひ。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『脱植民地化とナショナリズム：英領北ボルネオにおける民族形成』（山本博之著、東京大学出版会）※

自身の博士論文をもとにした本。複数の民族や宗教が混在する状況で、各民族が独自の民族意識や言語・慣習を維持しつつ、全体で1つの国民を構成するというナショナリズムのあり方を、1963年にイギリスから独立した北ボルネオ（現在のマレーシアのサバ州）について明らかにしたもの。第二次世界大戦による戦災を経験した北ボルネオの人々が社会をどのように再建・復興しようとしたかを、自分たちを世界にどう位置づけるかという点を中心に捉えた。

『災害復興で内戦を乗り越える：スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』（西芳実著、京都大学学術出版会）※

22万人以上が亡くなったスマトラ島の巨大津波から10年。その被災地でどのように復興が進んできたかを、建物や制度の再建・復興だけでなく人々の心の復興に目を向け、10年にわたって調査を続けた記録。「災害対応の地域研究」シリーズの第二巻。同シリーズ第一巻の『復興の文化空間学——ビッグデータと人道支援の時代』とともに、人文社会系の研究が被災地の復興や支援とどう関わるかを考えるのにも役立つ。

『復興の文化空間学：人道支援とビッグデータの時代』（山本博之著、京都大学学術出版会）※

自身の9年間の研究をまとめたもの。インターネットを使えば誰でも家や職場にいながらにして世界中の情報を手に入れることが可能となった時代に、あらためて情報の読み解き方を考えた本。「災害対応の地域研究」シリーズ第1巻。

『地域研究』第12巻第2号（「地域研究方法論」特集号）（昭和堂）

「地域研究とはどんな学問なのか。」一般の人からも、他の分野の研究者からも、そしてときには地域研究者自身からもしばしば問われるこの問いに対して、調査のしかたや論文の書き方ではなく、地域研究の構えについて書いた特集。研究者になるかどうか、地域研究を志すかどうかにかかわらず、現代世界に生きる人にぜひ読んでもらいたい本。

『地域研究』第13巻第2号（「混成アジア映画の海—時代と世界を映す鏡」特集号）（昭和堂）

日本を含むアジア31か国を対象に、映画の専門家ではなく地域の専門家が映画を紹介し、映画を通じて地域を紹介した本。デジタルカメラやインターネットの発達などによって個人による映像の発信が容易になった時代には、世界規模で相互理解を助け、誤解を防ぐための映像のリテラシーが必要。映画の読み解きは実社会の理解も助ける。

編集者 白井哲哉（京都大学学術研究支援室）
仲野安紗（京都大学学術研究支援室）
森下明子（京都大学学術研究支援室）
福元隆（研究国際部研究推進課研究助成掛）
元木環（京都大学情報環境機構／学術情報メディアセンター）
デザイン 永田奈緒美（京都大学学術情報メディアセンター）
写真 大森貴生

発行日 2014 年 12 月 25 日
発行 京都大学学術研究支援室
京都大学国際研究部研究推進課
京都大学「国民との科学・技術対話」ワーキンググループ
問合せ 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学学術研究支援室
Tel : 075-753-5113
E-mail : shirai@kura.kyoto-u.ac.jp